

然ういふ風に、大局に、眼を注いで、過去つた怨みを、忘れて了ふ、といふ程に、大きい考へを有つて、時局を観るものは、誠に少いので、木戸の態度にも、何となく窮屈の所があつた。

木戸が、黒田の希望を容れて、京都へ、出るに就ては、藩論の纏りを、つけて置く必要がある。自分は、永く國を離れて居たので、幾分か、藩の内情にも、疎くなつて居るし、又、自分の手では、藩士の纏まりを、つける事が難かしい、といふ考へもあるから、何うしても此事は、高杉晋作に、やらせる他はない、と、早くも考へをつけて、高杉に會つて見ると、意外にも、高杉は、薩藩と相携へて、天下の事に當るのには、反對である、といふて、却々承知をしなかつた。高杉が承知しない、となれば、恐らく六十餘大隊の藩士は、皆承知せぬ事に、なるだらう。夫ては、京都に出た所で、木戸が、何の働きも爲し得ないのである。之には木戸も、頗る困つた。

「高杉、足下が、左様いふ間違つた、考へを有つて居るとは、思はなかつた。そりや、足下の言ふ通り、薩藩は、我藩に對して、不都合の働きを、仕たには違ひないが、併し、何日迄も、其怨みを以て、只だ徒らに、薩藩と、睨み合つて居ても、面白くなからう、と思ふ。今度の機會を幸ひに、薩藩と組んで、天下の事に當る、と仕たならば、我藩も、頗る都合の好い事にもならうし、殊に、今は幕軍が、押寄せて来る前であるから、何事につけても、薩藩と深い約束を、仕て置くのが、我藩の爲であらう、と考へる。昔の事を數へて、故障を言ふのは、足下にも、似合はぬ事ではないか」

木戸は、宛然諭すやうにして、高杉を、説き始めた。

「何と言はれても、此事は、平に御免を被る。由來、長州藩は、義を以て、天下に起つて居る。敢て此場合に、薩賊の力を、藉るには及ばぬ。假令、天下の爲に、薩藩と、相携へる必要がある、としても、今は、其時期でない、と思ふ。況んや、長州征伐の軍令も出て、今や幕府の大軍が、我國境を犯さう、とする場合に、今までの怨みを忘れて薩藩の力を藉るとなつたならば、長州藩は、天下の胡盧を招くのみである。藩士一同が、其意見を以て進むも

一一二

拙者一人は、平に御免を被る」

「然う、頑固な事を、言ふては困る。免に角、此際は、拙者に任せて呉れ」

「いや、此事ばかりは、残念ながら從ふ譯には參らぬ」

高杉が、どうしても、承知を仕ないから、木戸は、口を酸くして、説き付けたけれども、遂に高杉は、不承知をいふて、其日の相談は纏まらず、空しく別れて了つた。

智慧は、木戸の方が、多く働らくだらうが、肝腎の若い連中が、今では、高杉でなくては、どうしても動かない。その高杉が、反對であつては、木戸の力にも及ばないのである。高杉が、斯んな無理窟を言つて、木戸に反對するのは、珍らしい事であつた。何うした事情から、高杉が、感違ひして、居るのか、木戸には、更に見當が付かなかつた。

木戸は、其晩、宿屋へ歸つて、種々に考へて見たが、高杉が、極端は反對論を唱へる、其精神を、知る事が出来なかつた。

幕府との關係上からみても、此際、薩藩と結ぶのは、此上もなき良策である。京都の一條が、續に障つて、薩藩と、睨み合つて居るのは、無理もない事ではあるが、要するに、之を以て、何日までも薩藩と、睨み合つて居るのは、小兒の情で、大人の爲すべき事ではない。他の者なら、格別の事、高杉ほどの者が、其理合の判らぬ筈はない。此事に限つて、那のやうに頑固な事を、いふて居るのは、果して何ういふ譯であらうか、何か之には、深い事情があらう。

と、流石に、木戸は、伶俐な人であるから、高杉の心事を探つて、幾分の頼みを繋いで、明日こそは、如何やうにしても、高杉を、説き付けて、藩士の纏りを、つけさせなければならぬ、と、堅く決心して、其晩は、寢て了つた。

高杉の爲人に就ては、前にも屢次、言ふて置いたが、兎に角、高杉といふ人は、何事につけても、機敏で、快活で、大膽に、物事を、取捌いて行く、其調子といふものは、當時に於て、長州人中、第一の人であつた。最初は、非常に異人を嫌ふて、極端に攘夷論を、唱へた人であつたが、上海へ行つて、歸つて来る、と、世界の大事を着破て攘夷論の如きものは、眞に日本の爲に、なるものではない。攘夷を行ふよりは、寧ろ討幕を行ふて、王政復古の下に國を開いて、異人と交際するのが、却て日本の爲になる、といふ意見を以て、藩侯までも、説附けた位である。夫が爲に、藩士に憎まれて、一度は身を隠すやうな、危い場合もあつたのである。斯ういふ風に、高杉は、物事の利害を看破く事が早かつたのである。其爲人は、木戸も、熟知して居るのだから、薩藩との聯合について、斯う判らない事を、いふて居るのは、何ういふものであるか、と、其處に疑ひを懷いて、裏面の事情に、注意を始めたのは、流石に、木戸なればこそ、と思はれる。

翌日も、高杉に會ふて、木戸は、荐りに前説を、くり返した。今日は、昨日と變つて、高杉は、只首を掉るばかりで、少しも議論らしい事を言はぬから、木戸は、益々話を進めて、西郷の一條から、黒田の來た事迄も打明けて、之でも、承知が出来ないか、といふ、意氣込を以て、はげしく詰寄せた。

「高杉」

「何ぢや」

「何故、薩藩と結ぶ事が、不可ぬのか。何うしても不可ぬ、と言ふのなら、拙者に、納得のいくやうに、足下の説を聞かせて呉れ、どうも、拙者には、足下の心を、知る事が出来ない。此事だけに就て、足下が、然う没分曉事をいふは、どうした譯か」

「別に、何も言ふては居らぬ」
「今日は、黙つて居ても、昨日の説に依れば、薩藩と、折合ふ事は悪い、といふて居るではないか。其次第を聞かう

「といふのぢや」
「俺のいふ事位は、捨て置いて、兎に角、話の運びをつけたら、宜いだらう」

「そりや、不可ぬ。拙者が、話の運びをつけても、足下が、毀して歩けば、何日迄経つても、同じ事を繰返すのぢや。其所で、足下の確答を、求めて置かなければならぬのぢや。若し藩論が、拙者のいふた通り、薩藩と結ぶ、といふ事に決つたら、足下は、何うする意か」

「藩論が定つても、俺だけは嫌ぢや」

「然らば、君公の御沙汰が下つたら、何とするか。よもや、君公の命には背けまい」

「ハツハ、、、」

「何が、可笑しいか」

「いや、到頭、押へられたか」

「押へられたとは、何ぢや」

「君命を持出されてはかなはぬからな。だが實は、俺の考へも、薩藩が、誠意を以て來るならば、結んでも可からうと思つて居たのぢや」

「それでは何故、今迄拒んで居たのか」

「直ぐ、おいそれと答へたら、長州人の腹を見られるからな」

「ウム、夫ぢや、足下は、同意ぢやつたのか」

「然うさ。其位の理合が、判らんで何うする。併し、俺が、突張つて居なかつたら、折角に固まつて居る藩軍へ對する、藩士の意氣も挫けるからな」

木戸は、思はず膝を打つて、

「矢張り、高杉ぢやな」
 昨日から、木戸は、非常に胸を痛めて、高杉を、説き付けたのであつたが、併し、高杉は初めから、木戸の意見と同じであつたのだ。木戸も、高杉の反對が、如何にも可怪しい、と思つて、今日も、激しく論じたのだが、到頭、高杉は、本音を吐いて、木戸の意見に同意したから、木戸も、大喜びであつた。此調子で行けば、無論、薩長の聯合は出来る、といふ見込がついた。
 「夫ちや、高杉、藩士の方は、足下に頼んだぞ」
 「可し、そりや、俺が引受けた。只聴く所に依ると、西郷といふ奴は、却々の者ぢや、といふから、よほど氣を注げてやつて呉れ」
 「大丈夫、拙者にも、考へがある」
 「急所を衝いて、押へる所だけ、押へて置いて呉れ。然うせぬと、土俵際になつてから、危い藝當をやられるからな」
 於是、木戸は、京都へ上るべく、決心を仕た。後は高杉が引受けて、同志の間を纏める、といふ事になつた。

軍艦買入の事情

攘夷の密勅を受けたのは、二十四藩であるが、其中に於て、之を實行した者は、長州藩だけである。文久三年の五月十一日に、下之關の海峡を通過する、英、米、佛、蘭、四箇國の商船に、何等の豫告も與へず、砲撃を加へた。其事があつた爲に、長州藩は、甚く異人の方から、目指されたのであつた。其後、伊藤、井上等の洋行や、高杉が、上海へ行つて、歸つて來た事や、色々の關係から、攘夷論は、甚だ不可である、といふ事が判つて、慶應の年に入つてからは、開國論者も、殖えて來た。併し、大勢の上から言へば、未だ攘夷論の方が、威勢が強かつた。けれども、先に立つて働らく、藩士の中に、開國論者が、出て來た、といふ證據は、現に、馬關開港の事が、企てられた一事に徴しても、明かである。
 伊藤と高杉が、長崎迄行つて、グラバといふ異人に諭されて、洋行を思ひ止まり、空しく國へ歸つて來た。グラバの話に依れば、英吉利公使のパークスと、いふ者が、日本へ、轉任して來るらしいから、パークスに遇ふて、話した方が、洋行するよりか利益があらう、といはれて、其説に従ひ、歸つて來たのである。其事は、藩公にも、密に申上げてあるし、木戸も、能く承知して居たのであつた。
 そのうちに、パークスが、馬關へ這入つて來た、といふので、其の報知が、山口の方へもあつた。そこで木戸は、

改めて藩公に、願を出した。パークスに面會して、色々話して置きたいから、御許しを願ひたい」といふ事を申立てたのである。極端な、攘夷論を唱へて、巧に朝廷を動かし、幕府を苦しめたけれど、毛利侯は、既に開國論に傾いて居たのであるから、木戸の願を容れた。併し、木戸の家柄や、現在の位置が、まだ低いのであるから、藩を代表するといふ、様な事は出来ない。是に於て、家老の中から、福原駒之進といふ人を選んで、それを藩の代表者として、木戸は、其の附添といふ格で、馬關へ下ることに決した。福原は、藩の代表者となつて居ても、名義だけの看板であつて、實權は、木戸にあつたのであるから、大切な内命杯も、總て木戸に、下つたくらゐである。

愈々、馬關へ下つて来て、パークスに、遇つて見ると、伊藤や高杉から傳へられた、グラバの語る所と、少しも違はなかつた。一見して、普通の異人とは、違ふ所がある。言語は、更に解らないので、通辯の力に依つて、辛うじて、其語る所を、聞分ける位のものであつたが、流石に、木戸も、あれ丈けの人物であつたから、パークスの一言一行を、能く注意して見た。面白い調子があつて、これと繋がり、組んで置いたならば、後日になつて、損は無い、といふ見込が附いたのである。其時に、パークスが、木戸に向つて、

「毛利、殿さん、私國の人、一番に怖ろしく思ひます」

「ハ、ア、そりや、どういふ譯で、怖ろしいですか」

「左様、戦さの器械持ちませぬ、この海通ります船、無斷で鐵砲打ちます。怖ろしい殿さんと、皆々思つて居ります」

「イヤ、それは、大變な間違ひです。其時は、お互ひの事情が、通じないで居たから、それで、さういふ事もあつたのですが、今日では、能くお互に、事情も判つたし、馬關を開いて、港にしやうとした位ですから、モウ大丈夫あります。さういふ事に心配なく、親しく交際つて下さい」

「宜しい。あなたの考へ、それありますなら、私國の人、少しも異存ありません。殿さん遇ひませぬ事、残念あります」

「そりや、同じ事です。私、殿さんの名代ありますから、あなたが、英吉利の國、名代ありますのと同じ事です」

「オ、宜しい。能く判りました」

「時に、パークスさん、軍艦、鐵砲、其外、色々物、買ひたいと思ひますが、グラバさん、骨折願ひます。あなたからも、宜しく言ふて置いて下さい」

「宜しい。便利計ります」

それから又、座談に移つて、暫く話して、木戸は上陸した。艦は、パークスを乗せた儘、横濱へ向けて、出帆した。

一一

當時の長州藩に於て、最も必要なものは、軍艦と兵器であつた。元龜天正の昔のやうに、鎗薙刀の争ひならば、格別の事だが、既に此時は、餘程進んで、戦ひに使ふ武器も、變り掛けて居たのであるから、無論、小銃も、大砲も、必要であつた。殊に、長防二州は、海を控へて居るのであるから、幕府が、愈々攻寄せて来る、としても、海上から掛られるのが、一番に怖ろしいのだ。海岸の要所々々には、砲臺の築造もしてあるし、相當の防禦準備は、出來て居るけれども、全然、軍艦なしで戦ふ、といふ事は、至難しいのである。素より幕府に劣らぬ、といふ丈けの備へを、立つる事は出來ないが、務めて力の及ぶ丈けは、其の備へを、仕て居らなければならぬのであつた。

それには、夷人の手を経て、外國から、買入れる外はないのだ。それに就て、グラバといふ人が、便宜を與へて呉れる、としても、公使のパークスが、あれ迄に、引受けて呉れば、尙更、グラバの方でも、遠慮なく働いて呉れるから、萬事に、都合が宜い、といふ事に、なつて來た。斯うした事迄、藩公の差圖を受けて極める、といふのでは、面倒でもあるし、又、重役の中には、存外に解らずやも、多かつたのであるから、成る可く、重役や、藩公に聞かせずに、先づ取敢ず、手を着けて仕舞はう、といふ考へて、木戸が、專斷で行ふ事になつたのだ。

そこで、伊藤と井上が、木戸から呼ばれた。
 『長崎へ、行つて貰はなければならぬが、どうぢや、緊かりやつて呉れるか』
 『そりや宜いとも、初めからの關係だから、我々が引受けたら、間違ひはない』
 『それでは、早速、行つて貰ひたい、と思ふが、都合が附かうか』
 『行けるも、行けないも、藩命次第ぢや。すぐに行けといふなら、すぐに出掛ける』
 井上は、キツパリ答へて、伊藤の方を、振り向いた。

『オイ、伊藤』

『何ぢや』

『貴様の都合は、どうぢや』

『已は、何時でも、行けるやうにしてある。併し、一寸伺つて置きたいですが、小銃位のもの、外の荷物と、見せ掛けて、持つて来る事も出来るが、如何に小さくても、買入れた船の運び方は、どうするつもりですか』
 流石に、伊藤は、其時分から、用心深かつた。と見えて、買ひ入れる船の、軍艦である丈に、それをどうして、馬關まで、持つて来るかに就て、考へて居るのだ。無論、幕府の注意を、避けて来る必要があり、殊に、長州藩の動きには、幕府が、目を光らして居るから、不用意な取扱をすれば、買入れた軍艦は、馬關迄運ばぬ内に、或は幕府の手に、這入つて仕舞ふかも知れぬので、それを案じて、木戸に、質問するのであつた。同じ同志としても、伊藤が木戸に於ける關係は、普通の先輩後進でなく、恰も主従の如き因縁になつて居たから、井上が、木戸に對する、態度言語とは、全く異つて居たのである。木戸は、伊藤の質問に應じて、
 『其事に就ては、心配はない。委しく話して置くから、井上も、能く聞いて貰ひたい。土州の浪人で、谷晋といふ者が、ある。今は變名して、楠本文吉と、言つて居るが、太宰府から、京都へ、歸る途中だ、と言つて、實は、拙者を、

誘つて來たのぢや。それは、どういふ事か、といふに、楠本が、元來は、太宰府に居る、三條卿等に、附いて居たので、同じ土州藩といふ關係から、坂本や中岡等は、深い交りもあつて、今度、太宰府から來る時分に、中岡坂本にも、親しく遇ふて、傳言を頼まれて來たのだ。兩人の説に依ると、若し、我が藩に於て、軍艦兵器等を、買入れる場合には、薩藩の名義を、以てしても差支へない、といふ事を、西郷に、保證させてあるから、それを拙者に、傳へて呉れる、といふのぢやさうだ。それに就ては、坂本から、直接に聞いた事もあるから、信用の出来る、傳言であつた。依つて、足下方が、長崎へ行つて、軍艦を、買ひ入れるにしても、無論、薩藩の名義を以て、致す事になるのぢや。馬關へ廻送するに就ても、矢張り薩藩の名で致せば、差支へはない。長崎には、小松帯刀が居る筈ぢやから、先づ小松に遇ふて、確と、それを確かめた上、グラバの方に、注文をしたら宜からう、と思ふ。これだけの事は、秘密に吞込んで、思ひ通りに、やつて貰ひたいのぢや』
 斯う聞いて見ると、二人は大に安心した。折角、骨を折つて、買つた船の廻送が出来ぬとなつては、一大事である、と思つたが、是迄に薩藩と、話の運びが、附いて居るならば、少しの心配もないから、直にも出立して、其事に着手しやう、といふ事になつた。けれども、此事は、前にも言ふた通り、藩公や、重役の許可を得て居ないのであつて、總て木戸が、專斷で計らうのだから、二人も、其心得で行かなければならぬ。況て、幕府へは、秘密で爲る事であるから、井上は、山田新助と變名し、伊藤は、吉村床藏といふ名で、長崎へ渡つた。

二二

三條始め、五人の公卿は、太宰府の延壽王院に、淋しい月日を、送つて居るのであるが、後になつて考へると、それが討幕勤王の一派に、少からぬ力になつたのである。中國から九州へ掛けて、多くの有志は、殆んど三條等を中心として、往來して居た傾きがあつた。素より官位を剝奪されて、不遇の身とはなつて、居たけれど、世にある時は、

中納言に迄進んで、現に學習院に、出て居る、若い公卿のうちでは、首領の如き、位地に居たのであつて、陛下の御寵愛も浅からず、父、實萬卿の志を繼いで、勤王討幕の意見を有つて、劇しい働きを、仕て居たのであるから、三條卿を、崇拝する浪士は、頗る多かつた。

折柄、京都の政變に依つて、一時、長州へ落延び、それから、太宰府へ来たのであるが、其の前後に於て、有志や浪人は、何れも三條卿を中心として、堅い結合が、出来て居たのである。幕府が、それを知つて、太宰府に置いては、危険である、といふ考へから、大阪へ移させやう、とした事もあるが、その計畫は、西郷の爲に、破られてしまつた。それから、といふものは、三條等も、充分に警戒して、容易な者には、面會しない事に、なつて居た。同志の連中も、それからそれへ、と打合せをして、九州地方に、立入る者は、成るべく太宰府に、五卿を訪ねて、聯絡を保つやうにして、居たのであつた。

されば、伊藤と井上も、馬關を立つて、長崎へ、行く途中、態々、太宰府に廻つて、五卿の御機嫌伺ひをして、一兩日を、此處に費やしたのである、五卿の左右には、土方楠左衛門、尾崎三良、大山裕之助、黒田了介等の人々が、控へて居て、嚴重に警戒して居たのであるが、二人は、先づ黒田、大山に遇ふて、

「實は、之より長崎へ參つて、兵器の買入をしなければ、ならないのぢやが、それに就て、或は鹿兒島迄、行かなければならぬかも知れない。まだ一度も、行つた事がないのであるから、萬事不勝手で、甚だ困る。就ては、お手前

方の配下の中から、案内者を一人、同行させて貰う事は、出来まいか」と、いふ相談をした。其事に就ては、豫て聞いても居つたから、配下の者、一人位を、出す事は、何でも無い譯だが、何分にも、今は澤山の人数が居る、といふてはなく、又、幕府の方に、何ういふ陰謀が、あるかも知れぬから、一人でも、配下の者を出す、といふ事は、出来ないのである。然し乍ら、今、さういふ事を、口實として斷つては、長州藩の感情も、悪くなるであらうし、大山も、頗る胸を苦しめて、即答もなり兼ねたのであつた。折柄、都合の宜い事

には、京都へ行つた、楠本文吉が、立返つて来たので、楠本に、行つて貰はう、といふ事になつた。最初からの、諒の關係者でもあるし、且又、楠本も、大山等の都合は、能く察して居るから、快く承諾して、二人と共に、長崎へ、行く事になつた。

長崎には、坂本龍馬が造つた、海援隊といふのがあつて、其時分には、幅を利かして居たのであつた。上杉宗次郎新宮馬之助、伊達小二郎、中島作太郎、北村長兵衛等を初め、數十名の隊士が集つて、盛んに活動して居たのである。

作太郎は、後の信行で、小二郎が、陸奥宗光の事である。斯ういふ連中が集まつて、騒いで居たのだから、海援隊の勢力は、大したものであつたが、伊達の才と辯とは、隊中に於て、最も優れたものであり、誰一人として、彼を、凌ぐ者はなかつた。身體が虚弱であつたから、武藝の嗜みは、充分になかつたけれども、疊の上に坐らせてあつたら、迎も大概な者が、五人や十人、圍まつて掛つても、智と辯に於ては、及ばなかつたのである。坂本が、常に人に語つて、我が隊中に於て、大小を取られても、其日から、飯の食へるのは、伊達一人である、と言つて、常に賞讃して居た位である。併し乍ら、隊中に於ては、いつも外の者と、衝突して居た。獨り交情を、良くして居たのが、中島一人であつた。隊中の勢力家としては、上杉が、第一人であつた。坂本が、土州藩であつたから、自然、隊中には、土佐の者が多く、他藩の者は少かつた。

四

此の海援隊が、最も勢力を占めて居る、長崎へ来るのに、土州人の楠本文吉を、連れて来た、といふのは、極めて好都合であつた。三人は、長崎へ着いてから、先づ、楠本が、海援隊へ、訪ねて行つて、上杉に遇ひ、伊藤井上の二人を、案内して来たが、其の用事は、斯様々々云々と、始終を話したから、上杉も、大層喜んで、

「さういふ次第ならば、却つて市中外に居るよりは、薩州邸へ、入れた方が、萬事の都合が、宜からう」

と、いふ事に、相談が極つて、上杉は、直に薩摩屋敷へ、乗込んで行つて、重役に、面會を求めた。幸にして木戸の鑑定通り、小松帯刀が、来て居たので、早速、小松に、此事を話す、と、小松は、膝を打つて、

「豫て西郷どんから、話もあつたから、其二人は、屋敷へ引取つて、出来る丈け、御都合を圖る事にしやう。お世話序に屋敷まで、案内をして下さい」

「然らば、偏にお願ひ申す」

「宜しい。承知を致した」

上杉が、歸つて来て、楠本に話したから、そこで、伊藤と井上に、上杉を紹介して、改めて小松と、對談の運びを報告した。二人も、大層喜んで、其晩の中に、薩摩屋敷へ、這入つて仕舞つた。豫て噂に聞いて居た、小松帯刀は、薩州第一の智者と、いふ事だが、今遇ふて、段々、話して見ると、成程、普通の人物ではなかつた。斯うした關係から、小松が、非常に盡力したので、二人は、薩摩士として、好都合を、得て居たのであつた。

グラバは、前からの關係で、心置なく、取引も出来て、小銃七千挺を買入れ、別に軍艦を、一艘買ふ可く、話が出て来た。然るに、此船へ、薩摩の旗を揚げるに就ては、どうしても、薩摩へ、行つて来なければならぬ、となつて、井上は、小松と共に、鹿兒島へ、乗込む事になつた。此事は、薩長聯合の上に、少からぬ關係を、有つて居る話であるから、それを語る事にしやう。

聯合の主動者は、勿論、坂本一人であつたが、絶えず、熱心に活動して居た結果、遂に纏りを附けて、是迄に運んで来た、其の努力は、實に大いものであつた。併し、井上が、此事に就て、態々、薩摩迄、出て行つた、といふやうな事は、近年になつて、漸く判つて来たので、どういふ都合であつたか、此事は、殆んど世間に、現はれずに居たのである。兎に角、井上が、此時に、薩摩へ行つたのは、聯合の基礎を、固めるに就ては、效力のあつた事であつて、聯合の歴史を、語る上に於て、頗る大切な事である。

尤も、同行して行つたのが、小松帯刀であつたから、此人の力に依つて、便宜を得たのは、無論、少くはなかつたが、薩摩に於ても、多數の意見は、聯合に傾いて居たので、在外に話の運びは、早く附いたのである。

長崎を、出る時に、海援隊から、上杉宗次郎が、同行して来たが、此人は、本名を近藤昶次郎と、云つた人で、海援隊の中では、最も坂本から、信用を得て居り、内外の事は、此人が取仕切つて、やつて居たのであるが、動もすると、才氣に委せて、やり過ぎる傾きがあつたので、隊中には、相當反對するものもあつた。此人が、井上と、薩摩の重役との間を往來して、能く双方の意志を通じさせて、斯ういふ事を、定めて来た。

第一、銃器其他の兵器を、買入れるに就ては、薩摩は、飽迄も長州藩の、便宜を計つて、盡力する事。第二は、其買入れた兵器の運搬には、薩摩の名義を、用ひて差支ない、といふ事。第三は、軍艦を、買入れた場合には、薩摩の旗印を、立てても差支へない、といふ事。以上の三箇條が極つたから、詰り、聯合の前提が成立つた、と同じ事になる。これだけの事が極つたのは、後に聯合の相談になつても、頗る好都合の運びを、得た譯である。

井上が、鹿兒島滞在中は、薩摩に於ても、鄭重な款待をした。今迄、長州藩の、感情が、行違つて居たのを、一時に打解けて、互に相携へて、天下の事に當らう、とするのだから、薩摩でも、出来る丈け、井上を款待したのである。國老の島津將曹の如きは、極めて頑固な人で、嘗ては、佐幕の意見を、抱いて居たのであつたが、それほどの人でさへも、此時には、自分の屋敷へ迄、井上を招いて、厚い饗應をした、といふ位であつた。久光には、拜調し得なかつたが、併し、小松や、將曹から、其事は申上げて、久光に於ても、敢て異論はなかつたのであるから、形式上の拜調をしないでも、薩摩の藩論は、既に長州藩と、聯合する事に決した、と見て、差支はなかつたのである。是迄に、話の運びを附けたから、井上は、上杉と共に、再び長崎へ、歸つて来て、これから、兵器と軍艦の買入に、着手したのであつた。

兵器軍艦の買入に就ては、素より幕府へ對して、秘密に爲す事であつて、若し此事が漏れたら、大い騒ぎになるのであるから、表面は、薩藩が、買入れた事にして、且つ秘密の守れるだけは、秘密にして居たので、幕府の方では、氣が附かなかつた許りでなく、海援隊の方でも、一二の者は、知つて居たが、總ての隊士が、それを知つて居た、といふのではなく、殆んど上杉が、獨斷專行を以て、長州藩の爲に、努めたのであつた。上杉は、之が爲に、後には、同志の間で、喧しい問題になつて、到頭、詰らぬ最期を、遂げて仕舞つた。上杉としては、隊長の坂本が、薩長の聯合を計つて居り、其聯合の一端として、薩藩に、是丈の事を務めさせるのだから、自分は、隊長の意に添ふて働くのみで、敢て差支へはない、といふ考へて、やつた事ではあるが、長州藩から、兵器軍艦の買入に就て、報酬を得たといふ事が問題になつて、武士にある間敷き事をしたといふ口實で、詰腹を、切らせられて仕舞つた。

小銃は、新式の物を、七千挺も買入れて、軍艦は、ユニオンといふ、船を買ふ事になつた。取引も、既に済んで、船旗を掲げる、といふ一條になつてから、どうしても、薩藩の旗でなければ、馬關へ、廻航する事が出来ぬから、一旦は、鹿兒島灣へ、それを廻して、薩藩の旗を掲げて、廻航するといふ、順序になつて居たのである。されば、ユニオン號には、上杉が乗込んで、鹿兒島へ向つた。井上は、萬事の手続きが、都合よく運んだから、其の復命を含んで山口へ歸り、更に馬關へ出て、上杉の來るのを、待受けて居た。

所が、茲に一つの、悶着が起きた。長州藩では、愈々軍艦が、手に這入つた、といふので、其艦名も、乙丑丸と附けて、船長には、中島四郎といふ人を任じ、船が馬關へ着いたらば、それへ乗込ませて、長州藩の軍艦として、仕舞ふ積りであつた。然るに、上杉は、鹿兒島へ行つて、久光に、拜謁を遂げて、段々、今迄の手續きを、申上げた。薩藩に於ても、非常な優待をした。爾來、薩長の間に於て、此船を共用しやう、といふ相談があつたのに對して、上杉

は、專斷を以て、其事は然るべしと、答へて仕舞つた。薩藩の旗を掲げるのであるから、船名も、櫻島丸と附けて、正々堂々と、馬關へ、引上げて來た。

長州藩の方では、前に言ふた通り、乙丑丸といふ名を附けて、船長迄も極め、一切の受渡をする積りで、待構へて居た所へ、櫻島丸と命名した、ユニオン號が、乗込んで來た。上杉等の報告を、聞いて見る、と、薩藩の共用船にする、といふ事であるから、議論が沸騰して、騒ぎは大くなつた。費用は、長州藩が出して、旗丈だけは、薩藩のを掲げ、船は兩藩の共用と、いふが如き事は、甚だ怪しからぬ。そんな馬鹿げた事ならば、敢て外國船を、買求める必要もない、と言つて、喧しい議論が始まつた。櫻島丸には、勿論、薩藩士も、乗つて居るのであるから、さうした議論になつてくれれば、行掛り上、どうしても、上陸しない。刀に掛けても、此船を、一步も退かない、といふ様な事を言つて、頭張つて居る。其間に這入つて、上杉は、粉になる程苦しんだが、どうにも、解決のしやうがない。井上も、流石に閉口して、山口へ、出て來た。そこで、若殿の長門守に拜謁して、事情を申述べた上、

『これしきの事に就て、薩藩と軋轢して、之が爲に、纏まり掛つて居る、聯合の事に迄、影響を及ぼしては、甚だ面白からざる事と、考へまするに依つて、兎に角、此の捌を致します重役一名を、馬關へ下して、速に紛議の、纏まりを附くべきやう、御賢慮の程を、願上げまする』

と、言つて出たので、長門守は、

『如何にも、道理の事である。山田宇右衛門に命じて此の捌きを、速に附けさせる事にいたそう』

と、いふのであつた。そこで井上は、山田と共に、馬關へ、再び引返して來た。



坂本龍馬の斡旋

一

山田と井上が、乗込んで来る前、馬關では、櫻島丸の一條で、紛紜ついて居た所へ、折良く、坂本龍馬が、やつて来た。坂本は、双方の申條を聞いて、此の處分に就て、苦心して居たが、山田と井上が着いた、と聞いて、坂本の方から、訪ねて行つた。

「ヤア、坂本さん、いつお出たか」

「實は、今日、着いた許りぢやが、櫻島丸の一條で、飛んだ行違ひが出来て、何共申譯がない」

山田は、鄭重に會釋して、

「此度の件に就ては、種々、御配慮に預つて、千萬忝けない。これしきの事で、双方の心持を悪くするのは、面白くないと思ふから、實は、君命を帯びて、自分と、井上が、此の捌きをする爲に、參つたので御座るが、何とか良き御分別はあるまいか」

井上も、膝を進めて、

「重役の山田が、申述べた通り、何とか、坂本さん、良い工風を廻らして、無事の治まりを附けて、貰ひたいものぢや」

坂本は、額を押へて、

「イヤ、さう仰せられては、偏に恐縮いたす。結局を申せば、我が配下の上杉が、十分の打合せも爲さずして、事を計らひ過ぎた、といふ事になるので御座るから、此の始末を附けるのは、勿論、拙者の役廻りと心得て、お引受けは致すが、併し、これが爲に、大切な、一方の事に、影響を及ぼしては、これこそ、一大事であるに依つて、どうか木戸さんが、一日も早く、京都へ上られる、といふ事に、御盡方願ひたい。さうなれば、拙者は、これより長崎へ參つて、薩藩の重立つた者に遭ふて、この始末は、必ず附ける積りで御座るから、どうぞ、木戸さんの事だけは、偏にお願ひ致す」

山田と、井上は、均しく言葉を揃へて、

「其儀に就ては、決して御心配下さるな。速やかに取計らうて、木戸を、京都へ上せることに致しませう。依つて、船の件は、速かに運びを、附けて戴きたい」

「宜しい。それならば、直に長崎へ、參る事に致さう」

そこで、相談が極つたから、坂本は、長崎へ急行する事になつた。

木戸は、萩の城下へ、行つて居たので、坂本は、遇ふことが出来なかつた。けれども、それは、井上が、引受けて居たから、早速此旨を、木戸へ通じたので、愈、十二月の中旬になつて、木戸は、品川彌二郎、三好慎藏、田中顯介の三人と共に、京都へ、行く運びになつた。

櫻島丸の一條は、坂本が、長崎へ行つてから、薩藩の重立ちたる、役人に遇ふて、段々、交渉をした末に大體の話は附けた。船名を、乙丑丸と名付ける事も承諾されたが、只だ長州藩専用の船として、全然、薩摩との關係を、離れて仕舞ふ、といふ一事は、多少の異論もあつた。これは無論もない事で、船旗には、薩藩の印が附いて居るのだから、其位の苦情は、出るのが當然である。併し、それを其儘に取次いだのでは、長州藩が収まらないから、残る問題に就

ては、坂本が、引受けて解決する、といふ迄にして、一時、船の苦情は、坂本が預かる、といふ程度で、すまず事になつた。

坂本としては、こんな小さな問題に、關つて居る場合ではなかつた。といふのは、既に木戸は、京都へ上つて、聯合の事に就て、相談を始めて居る筈である。無論、自分が企てた、聯合談であるから、愈々といふ場合には、自分が立會はずに、事が済むものでもなし、又、詰らぬ言葉の行違ひから、破れるやうでは、千日に刈つた萱を、一日に燃す様なものであるから、坂本はそれを、心配して居たのである。そこで、船の件は、大概にして置いて、坂本は、晝夜兼行で、京都へ、乗附けて來た。途中で、年を越して、正月の上旬であつた。

木戸が、京都へ、這入つた時は、折良く小松も、鹿兒島から、上つて來て、二本松の薩邸に、西郷と、共に居たから、此上もなき好都合であつた。先に來て、待受けて居た、中岡が、田中と遇ふて、萬事、打合せの後に、薩州邸へ、木戸の到着を通じた。西郷は、黒田から、其事を聞いて居たから、實は、心待ちに待つて居たのである。木戸は、文久三年の政變以來、身を晦まして、爾來、今日に至る迄、京都の町は、覗く事も出来なかつたのである。偶、今度の話が、始まつた爲に、人知れず密と、京都へ、這入つた時は、坐に當時の事を回想して、徒らに政變の犠牲となつた、故人の事杯を、思ひ出で、無量の感慨に、打たれたのであつた。

一一

正月八日の夕刻から、二本松の薩邸に於て、西郷小松に面會する、約束が出来たので、木戸は、田中、中岡の二人を連れて、乗込んで來た。西郷は、例の無造作な調子で、手輕に木戸を迎へて、上席に据ゑた。

「ヤア、木戸さん、何共相済みぬ。中岡さんから話があつて、是非、馬關へ、寄る積りであつたのが、藩命の爲に、道を急いで、遂に先禮を働いたが、どうか免して下さい。全く拙者が、悪かつたのぢや」

「その御挨拶では、却つて難み入る、約束とは云ふやうなもの、詰り、片便りの様なもので、あつたのぢやから、あの手違ひも、已む事を得まい。併し、今は、事情も能く判るし、殊に、先般、黒田さんのお出もあつた爲に、今迄の疑ひは解けたから、其儀は、御承知を願ひたい」

それから、小松との挨拶も済み、兵器軍艦の買入に就て、薩藩が、便宜を與へて呉れた禮も述べた。此時は、中岡が一番に骨の折れる、役を務めた。坂本が、未だ長崎から歸らぬので、仲介の勞は、中岡の役であつた。

「扱て、此度の事に就ては、少しは御異見もあらうが、それ等を忘れて、美しく御會見下さる、といふ事は、坂本に於ても、定めて満足で御座らう。豫て申上げた通り、櫻島丸一條に付て、坂本は、目下、長崎に在りますれば、同人が着京いたす迄、拙者が、萬事代つて、名代を勤める事に、相成つて居る。木戸さんに於ても、腹藏なく、今日迄の成行に就て、疑惑のある所は、申述べて戴きたい。又、西郷さんに於ても、胸襟を開いて、今後の事に就て、充分の御相談を願ひたい、と存する」

中岡の挨拶が済んで、木戸は、膝を進めた。

「貴藩と、弊藩の間に於て、何の隔意も無く、打過ぎて參つたのが、文久三年の政變に依つて、あアいふ仕宜と相成り、之が爲に、砲火相見える、といふ次第に、なつたのぢやが、それも、既に過去の一夢に屬した。今は、左様な事を、敷へ立て、居る、時世でもなく、只、貴藩を、弊藩に於て、心を一つにして、天下の事に、盡さなければならぬ時が、參つたものと考へる。今般、弊藩に於て、軍艦兵器の買入を、致すに就て、貴藩が、十二分の便宜を、盡して下された、といふ事は、弊藩に於ても、快く思ふて居る所御座るが、尙、今後に於ても、此の心を以て、お互に相盡したい、と考へる。それに就ては、御意見もあらうから、願はくはお考への程を、伺ひたい」

木戸から、長い挨拶があつた。其間、西郷は、只だ點頭いて居る許りであつた。

「あんたの、言はつしやる所は、一々御尤でござす。其以上、俺どん等が、意見の加ふべき所はない。何分お願ひ申



す迄の事ぢや。其以上の意見は、お互に無からうぢやないか。ハツハ、
若し、西郷の方から、意見が出れば、それに對して、木戸も、多少の注文は、あつたのだ。木戸といふ人は、細かい所に、能く氣の付く人で、何事かを極めるに就ても、几帳面にして置く、といふ性質の人であつたから、大體を捉へて、要領丈けて、事を極めて置く、といつたやうな事は、餘り好かない方であつた。何は斯う、どれは斯う、といふ工合に、キチンと、物事を、極めて置かう、といふ質の人である。それに反して、西郷は、如何なる大事件に對しても、可否の一言を以て、事を決し、別に覺書も取らないで、済まして居やう、といふ風であつた。
西郷の爲人は、木戸も、少しは解つて居たが、まだ其頃には、さう打解けて、話をするといふ迄に、懇意でもなかつたから、控へ目になつて、自然、打割つた話も出來ず、此晩の相談は、これからは、打連れて行かう、といふ位の事、別れて歸つた。その後は、木戸も、人目を憚る身の、しばらく出入もならず、此一事には、頗る困つた。西郷の方でも、それでは不自由であるから、木戸に勸めて、薩邸内に、潜んで居るやうにしてしまつた。

二二

それから、十日餘り經つて、櫻島丸の事件で奔走して居た坂本が、その方も、一段落を告げたので、歸つて來た。木戸は、薩邸に、泊り込んでから、毎日のやうに、御馳走攻に、なつて居たのである。普通の食事は、朝の時ばかりで、午餐には、相當に資格ある、藩士の取持であつた。夕食になると、浪花節の言草ではないが、山海の珍味、田野の野菜で、酌の女は美しく、飲む酒に、制限はなく、西郷、大久保、小松の三人が、必ず一人は、相手になつてくれる。時には、三人揃つて、共に盃を取る事もあり、實に歡待のある限りを盡された。
けれども、木戸には、非常な不満があつた。御馳走ばかりして居て、聯合に關する、相談は、更に進んで居なかつた。話出す機會のないほど、丁寧に取扱はれて、酒と女と、佳肴ばかりであるから、木戸には、西郷等の眞意を捉へ

得なかつたのである。

是れでは、國から出て來た、甲斐のないは勿論、何の爲に、薩邸に、泊り込んで居るのか、それさへ、理由の解らぬ事になつてしまつた。さればとて、あまりに、焦つて、聯合の相談を催促しては、長州薩の弱味を、現はすやうにもなるから、先方の發言を、待つより外に、木戸としては、取る可き道はなかつた。

坂本は、長崎から歸つて、二三日すぎると、薩邸へ、やつて來た。

木戸は、坂本の顔を見て、ほつとした。

「坂本さん、何日歸へられたか」

「長崎の方の話が、存外に手間取られたので、歸りも遅くなつたが、實は、二三日前に、伏見へ着いたのぢや」

「貴下の來るのを、待ち兼ねて居つたのぢや」

「フム」

「例の一條にも、困つたものぢや」

「西郷さんに、遇ひなすつたか」

「それは、二度も三度も、遇ふて居る」

「然らば、話の運びは、早く出來なければならぬ譯ぢやが……」

「これからは、一しよに行かう、といふ文の事、肝腎の細かい話が、一向に進んで居らぬから、困つて居るのぢや」

「細かい話が進まぬ、といふのは……ハ、ア、未だ幾らか、お互に隔意があつて、それで、話が進まぬのか」

「さういふ事は、ない様ぢやが、遇ふ度毎に、えらい御馳走に許り、なり居つて、話の方は、いつも大提みの事で、一向に運ばぬ。長州から京都迄、馳走を、食ひに來たのぢやないから、實は、貴下の來るのを、待ち受けて居つたのぢや」

「たのぢや」

何でもない様に、言ふては居るが、木戸の言葉の中には、無限の不平が、現はれて居る。坂本も、之れを聞いて、多少は、意外の感もあつたが、左迄に心配はしなかつた。

「宜しい。それでは、拙者が、西郷さんに遇ふて、細かい相談を、遂げた上の事に、致さう」

「其邊の事は、然る可く頼む」

「確かに引受けした。併し、どういふ注文があるか、それだけは、聞いて行かうか」

「別に、注文といふほどの事はないが、善い時だけ、一つになつて、悪い時は、離れろ」といふ、それが一番困る。御尤ぢや。其外に、何か、承はつて置く事はないか」

「これといふて、大した事はないが、詰り、長州人が、大手を振つて、京都へ這入れるやうにする。其の働きは、薩藩の方で、附けて呉れねば、長州藩は、朝廷への受けが悪いのぢやからな」

「宜しい、それから……」

「愈々、一橋、桑名、會津杯が、一つになつて、朝廷と、我藩の間を、隔つるやうな事があつたら、其時こそ、薩藩は、本當の力を出して、當つて呉れなければ、困るのぢや。そこ迄の約束が出来ねば、聯合の甲斐はない、といふ事にならう」

「仰せの通りぢや」

「大體、そんなものぢや」

「別に難かしい、といふほどの箇條もない。まア、話は出来たやうなものぢや。拙者から、御挨拶する迄、どうぞお待ち願ひたい」

「何分、お願ひ申す」

木戸の注文は、軽いやうに聞えて、實は重いのであつた。殆んど薩藩が、長州藩の窮厄を、背負つて立つ事になるのだ。併し、坂本の考へては、相手が、西郷丈々に、此の相談は、左迄に難かしくない、と看破いて、手輕に一切を引受けて仕舞つた。

四

只だ一つ、坂本が、不思議に思つたのは、毎日のやうに、顔を合せて居乍ら、どうして話が、進んで居なかつたか、といふ事である。

西郷に逢ふて、それを訊ねて見ると、木戸が、何もいはぬから、黙つて居た、と答へた。これは、西郷らしいと思つた。

木戸に、それを話して、餘りに遠慮が過ぎたやうだ、といつたら、木戸は、藩情が、昨今の如くであるから、此方からは、どうしても切出せぬ、といつた。いかに窮して居ても、救ひは求めぬ、といふ意味で、木戸としては、無理ならぬ事だ、と思つた。

坂本が、想像した通り、西郷は、薩長聯合の大體さへ極れば、細目の如きは、どうでも構はぬ、といふ意見であつた。そこで、細目を擧げない迄も、凡そ此事に就ては、斯うするとか、あの事は、斯ういふ計らひにすると、かいふ丈けの事は、極めて置かなければなるまい、といふ事になつて、改めて木戸に、面會する事になつた。今度は、坂本の立會で、木戸が、言ひ出し憎い事は、坂本が、代つて述べる。西郷の答には、坂本が、然る可く解釋を加へて、木戸に、納得させる。萬事は、都合よく運んで、薩長の聯合は、完全に成立した。

此の約束の出来た事を、幕府の方では、少しも知らなかつた。長州人の出入を、差止めて居た、京都の地に於て、而も、幕府から見れば、最も怖ろしく、思ふて居た、桂小五郎の木戸が、密に入京して、西郷と、手を握つて、斯うした約束が、成立する迄、知らずに居た、といふのは、随分迂闊な事であつた。

木戸は、約束が出来ると、直に大阪へ行つて仕舞つた。それは、木戸の顔が、餘りに能く幕府の方の人に知れて居るから、萬一、それと悟られては、一大事である、といふので、京都の地をわざと離れたのである。此時、西郷との約束に就ては、書面の取交せをしたのでもなく、又、藩と藩の間に於て、一枚の文書がある、といふのでもなく、言はゞ武士と武士とが、刀の手前、言ふた事は、何處迄も立通す、といふ丈の事で、後日の證據として、形に残るものは、作らなかつたのである。斯ういふ法式に依つて、成立した約束が、あれ迄に、堅く行はれた、といふのは、頗る味はひのある事だ。

然しながら、西郷は、兎に角、木戸の方にすれば、薩藩に對して、悪い感情を、有つて居る藩士が、多く控へて居るのであるから、萬一の場合を考へて、入念の手續きは、どうしても、取つて置かねばならぬ。大阪へ引上げの時、伏見の寺田屋で、木戸と坂本の間、面白く應酬があつた。

『今度は、足下の骨折で、漸く是迄に運びは附いたが、併し、大體の綱目だけは、掲げて置かない、と、後日になつて、意見の相違の爲に、一切の苦心が、水泡に歸する様な事があつてはならぬから、それに就て、何とか工夫がなからうか』

『貴下と、西郷さんが、親しく顔を合せて、約束した事が、間違ふとは思はぬが、それに念を入れやう、といふのは、どうするつもりか』

『これに、署名をして置き度い』
 といつて、木戸は、懷裡から一通の書附を出した。それには、西郷と話合つた事を、簡條書にしてあつた。

『那の席に於てなら格別、今となつては、その取次は、御免蒙る』
 と、一度は、木戸の相談を刎付けた。けれど坂本は、更に考直して、この書附へ、坂本の名を以て、裏書をして渡した。木戸も、それで満足したが、この一枚の書附こそ、薩長聯合の盟約書に、ひとしい物である。

第一、愈々幕府と長州藩と、戦ひを開いたといふ場合には、直に薩州藩に於ては、三千人の兵士を京阪の地に入れて、飽迄も幕府へ對して、固めをつける事。

第二、幕府との戦に、長州藩が愈々勝利といふ見込が附いたならば、其機會に、薩州藩に於ては、朝廷を動かして、前年の御沙沙を一變せしむるといふ事。

第三、假令幕府との戦が、多少拙く行つても、まさか長州藩が、一年や半年で潰れる様なことは無いから、薩州藩も長州藩に對して、相當の助力をするといふ事。

第四、萬一にも戦の終局を見ずして何かの都合から、幕府が兵を引上げることがあつたら、矢張り長州藩が勝つた時と、同じ様な考へを持つて、毛利公父子の爲に、朝廷の御沙汰を一變せしむることに盡力するといふ事。

第五、會津桑名を初め、苟くも佐幕一味の者が、長州藩の唱へる勤王正義の仕事に對して、妨げをするといふやうなことがあつたならば、薩州藩は、決戦してまでも、全力を擧げて、長州藩を助けるといふ事。

第六、長州藩が、朝廷から罪をゆるされた上は、猶更の事であるが、いづれにしても、今日より、兩藩力を併せて、皇國のために盡力し、皇威の回復に努める事。

これは、木戸の書いた、正文を、著者が、書刷して、其意味を現はしたものである。

慶應二年正月二十日の夜、此聯盟が出来て、木戸が、薩邸を去る時、西郷等は、盛宴を張つて、木戸を歡待した。其時、一人の美少年が、琵琶を彈奏して、興を接した。これは、西郷の愛して居た、稚兒らしく見えた。容姿も美しかつたが、聲も良く、彈奏も、頗る巧みであつた。木戸は、感嘆の餘り、一詩を賦して、西郷に示した。

西郷は、低い調子で、之を朗誦して居たが、丁寧に折疊んで、懷裡へ入れた。
 『木戸さん、よい記念ぢや。長く残す事に、いたそう』
 『これは、恐縮する。即吟の未定稿ぢや。長く残されては困る』

「イヤ、名吟ぢや。頂戴して置く」
木戸は、思はず額へ、手をやつたが、併し、得意の色は、現はれて居た。

別離在近歎分袂、忽聞坐邊四絃彈、
曲是悲想第一曲、人是少年第一人、
追懷往時憾追骨、不意紅淚自潸々、
知是明朝澁水夢、半在京城半故園、

これが、其時の詩である。

木戸の薩摩行

一

薩長聯合は、密に長州藩が、望んで居たばかりでなく、薩藩の方でも、大分乗氣になつて居た。それから後は、相互の往來も、やうやくはげしくなつて、聯合の實は、全く擧るやうになつた。長州藩へ對して、島津侯から、直接の使者を、送つて來た。木戸が、毛利侯の内命を含んで、薩摩へ出掛ける事になつたのも、詰り、薩藩の使者に對する答禮をかねて、島津侯に會ふて、充分の言質を押へて置かう、と考へたからであつた。

薩藩から來た、使者は、後の黒田清綱、其時は、嘉右衛門といふて居た。其他に、平河甚左衛門、東郷源四郎の二人が、隨つて來たのであるが、毛利侯は、山口の城下に於て、親しく使者に、面會して居る。斯ういふ風に、兩藩の聯合が、着々、進んで行くにも拘らず、幕府の方では、更に之に對する、相當の對策も立てず、萬事が、手抜かりのみであつた。

木戸が、山口を立つたのは、慶應二年の十一月十六日であつた。三田尻の海岸に、丙寅丸といふ船が、着いて居て之へ乗込んだのである。高杉が、長崎から、買つて來た、オテント丸が、之であつた。船長としては、河野又十郎が乗込んで、運輸方には、石川龜之進、其他にも、多くの人は、乗つて居たが、蒸氣係は、山根文次郎が、一人であつた。これでは、何うにも仕様がなない。そこで、田中顯介が、手傳人として、乗込む事になつたが、田中としても船の

事は、餘り解らないのだ。併し、人の爲る事だから、出来ない事もなからう、といふ意氣込で、幾分は覺えもある所から、乗込んだといふやうな譯で、甚だ心細い機關係であつた。前に言ふた、薩藩の使者、黒田の一行も乗込み、其他に、大村藩の渡邊昇が、山口へ、來合して居たので、之も同行する事になつた。渡邊と、木戸の關係は、既に詳しく述べてあるから、其説明は、略す事にするが、兎に角、木戸の方から見れば、子分とも、弟とも見られるのである。此船が、薩州へ行くまでには、餘程、能く用心をして行かない、と、幕府の爲に妨げられるから、豫て薩藩との約束に基づいて、船旗は、薩藩の章の付いたのを、掲げて行つたのである。船が、玄海灘へ掛つた時、甚い風雨に遭ふて、非常に困難を仕た。何分にも、蒸汽係の山根と、助手の田中は、素人の事であるから、一時は、どうなるかと、乗組の者は、心配したほどであるが、幸ひにして、風雨も治まり、難破の厄は、免がれたのであつた。併し、此苦しみを見た爲に、山根と田中は却て實驗上の知識を得て、それからは、船の操縦が、巧手になつたといふ事であるが、此様な、危ない蒸汽係に、船を扱はれたのでは、乗つて居る者こそ、洵に劍呑な次第で、全く命懸の航海であつた。

船は、唐津の沖を通る。望遠鏡を執つて、遙かに海岸を見ると、砲臺を築いて、沿岸防禦の準備は、調ふて居る。船長の河野は、忽ち部下に命令を下して、薩藩の旗章を、下させた。同時に、長州藩の一引三星の、旗章を掲げて、大砲係を招んだ。

「遙かに見えるのが、唐津の城下であるから、二三發の、空砲を放つたら、何うぢや」

「ハツ、空砲で御座いますか」

「ウム、實弾を入れるまでの事はない。空砲で、澤山だ」

「委細、心得ました」

大砲係は、三四發、續け撃に、空砲を放つたので、唐津の城下は、大い騒ぎになつた。彈丸は、飛んで來ないが、

甚い響が仕た。沖合を通る船から、大砲を撃込んだ、といふので、上を下へと、混雜して居る。船の方では、各自遠眼鏡を執つて、遙かに之を見る、と、武装した武士が、東西に入違つて、非常な騒ぎをやつて居るから、手を拍つて一同笑ひさざめきながら、唐津の沖合を、通り過ぎた。之は別に、意味のあつた事ではなく、風雨が歇んで、海上も穏やかに、船の操縦も、自由になつたし、此沿岸を、通り越せば、最早安全だ、といふので、餘りの退屈に、座眠を仕て居るよりは増した、といふ位の考で、串戯に、やつた事だが、唐津藩こそ、迷惑な次第であつた。

船は、長崎へ入つた。幕府の役人は、早くも之を見て、四方から、一時に密せて來たが、此時には、長州の船旗を撤廢して、薩藩の船旗に、變へて居たので、如何ともする事が能なかつた。現に、薩藩の船章を、掲げて居るばかりでなく、薩藩の人も、乗つて居るのだから、強て争へば、却つて不利になるので、據所なく、手を束ねて、見て居るばかりであつた。

木戸の一行は、夜になつてから上陸して、薩摩の藩邸に入り、充分に休息して、翌日は、直に出帆する、といふ事になつた。斯ういふやうな調子で、其後は、海上も穩かに、十一月二十八日になつて、鹿兒島灣へ、入る事が出來た。船が見えると、歓迎は非常なもので、二十一發の祝砲を放つやら、紫の幔幕を引廻した、小船を、盛に出して、出迎へる。木戸の一行は、甚だ面目を施した。翌日は、島津久光父子が、自ら對面する、といふ事になつて、其準備に、忙殺された。

久光は、薩藩の當主ではなく、其子の忠義といふのが、當主であつて、久光は、最初から、後見になつて居たのである。先代の齊彬が、死ぬ時分に遺言して、久光の子に相續させる、といふたので、藩主には、忠義がなつたけれども、久光は、其時から後見になつて、居たのである。併し、藩の實權は、全く久光が、握つて居た。

鹿兒島といふ所には、城が無いのだ。彼の地へ、行つて見ると、城がなくても可い、といふ理由が、直ぐ判る。三方は、峻しい山に包まれ、山の間に挟まつて、大きな部落がある。其處には、知行を分けて、老臣や、血統の人を、領主としてある。いざといふ時には、其峻に據つて、防禦するのであるから、容易に他國から、攻込む事は難かしい。従つて、鹿兒島には、築城の必要はないのである。西郷の詩の中に、「百二の都城云々」といふ事はあるが、夫は茲に言ふた、是等の部落の事を指したもので、必ずしも百二の城が、あつた譯ではない。地勢の上から見て、出入には、不便な所があつたのみならず、日本の西南の端で、すぐ前は、海になつて居るのであるから、薩摩の人は、自然、他國との交通も、充分でなかつた。夫等の關係から、士女の氣風も、他國の人とは、異つて居る。言語の如きも全く日本離れが、して居るやうだ。併し、風景の佳い事は、此上もない。淨光明寺山から、櫻島を眺めた、雄大な風景は、恐らく日本に、二つとはなからう。土地が、日本の西南端に、僻在して居て、此雄大な、風景を眺めながら育つた武士が、驍勇無双と、いはれたのも、無理はない。

今日は、彌、長州藩の使者、木戸準一郎の一行を迎へる、といふので、御殿は、目の眩るほどの忙しさである。只茲に一つ面白いのは、此日の御馳走が、西洋料理であつた、といふ事だ。其時分の西洋料理だから、どうせ碌なものではなからうが、御馳走になる方でも、眞に西洋料理の事は、知らなかつたのだから、何様なものを食べさせても、斯ういふ物だな、と思つて居たに違ひない。兎に角、久光は、極めて、頑固な人で、明治になつてから、左大臣の職に就いた時、未だ鬚を結んで居た、といふ位であるが、其久光が主人として、他藩の使者を接待するのに、西洋料理であつた、といふのは、實に面白い事だ。

列席を命ぜられたものは、家老の島津伊勢、桂右衛門、それから伊地知莊之丞、黒田嘉右衛門、接待係としては、三雲藤一郎、本田彌右衛門の二人であつた。本田は、男爵になつた、親雄の事である。

久光は、上座から發乎と、木戸を見下して、

「毛利侯にも、別に御變りはないか」

「ハツ、相變らず、健勝に御座います。此度は、御使者を賜り、主人父子に於きましても、有難く存じ居ります。猶此上ともに、何かと御助勢の程、偏に仰ぎ奉る」

「ウム、叮嚀の挨拶、却つて痛み入る。及ばずながら今後も、持ちつ、持たれつちや」

御挨拶が済むと、久光から、木戸へ盃を下される。家老の伊勢を初め、順に夫々、盃の献酬があつた。彼是する中に、久光は、退席せられて、跡は、家臣同志の、無禮講になつた。斯ういふ席には、定り切つた挨拶だけは、殿様から爲るが、大概な處で、殿様は、雲隠れになる。而うして後は、家來同志に、勝手に相談させる、といふのが、何處の藩でも、同じ事になつて居た。伊地知莊之丞が、木戸に向つて、

「斯様に、御互の藩が、聯合した以上、一時も早く、馬關の海峡を鎖して、天下の勢を制したら、どうであらうか」と言はれて、木戸は、徐に答へた。

「折角の事で御座るが、其儀は、御同意いたしかねる」

「何と、同意が出来ぬ」

「左様」

「そりや、何ういふ理由で御座るか」

「馬關を鎖せば、上方との交通を斷つて、天下の人に、難儀を興へる事になる。之は長州藩としては、何うしても出来ませぬ」

木戸が、斷乎いふたので、伊地知は、甚だ不快の色を作して、激しい議論が、初まつた。今までは、極めて穩やかに、快く飲んで居たのが、此一事から、互ひに感情を悪くしてはならぬ、と思つたものもあり、島津伊勢や、桂右衛

門が、中に入つて、其事は、預り置いて、何れ後日の相談と、いふ事にして、其場は一時、濁して了つたが、伊地知は、中途で退席した。此酒宴の納まりは、少しく不出來であつた。併し、その爲に、聯合に龜裂が入る、といふほどの事ではなかつた。

此事に就て、是非述べて置かなければならぬ事は、馬關を鎖す、といふ策は、至極、面白い事には違ひないが、然うなると、長州藩は、幕府から許りてなく、天下の人に、怨みを買ふやうな事になるから、甚だ面白くない。毛利親が、普通の諸侯と異つて、頗る偉かつた人である、といふ證據には、木戸が、薩州へ出發する、といふ時分に、敬親が、堅く木戸に申付けたのが、此問題であつた。

『尙し、鹿兒島へ参つて、種々相談の中に、馬關を鎖す一條が、出るかも知れないが、然ういふ事があつたら、此の一事丈は、堅くお断りして参れ』

といふて、木戸に、申付けて置いた。然るに、宴會の席上でこそあれ、伊地知から、此事の相談があつたので、木戸は、心の中で、窃に敬親侯の先見に驚いた、といふ事である。今日から、考へて見ても、敬親が、斯ういふ事に、氣が注いた、といふのは、稱讚に値する。家臣の智慧で、天下の事に興る、普通の諸侯とは、異なつた所があり、流石に、賢君と、いはれた丈の事はある。

木戸は、鹿兒島滞在中、非常な歡待を受けて、或は櫻島巡りを仕たり、或は造船所を見せて貰つたりした。薩藩の方でも、出来るだけの待遇をして、木戸に、満足させやう、としたのである。彌、滞在の日も切れて、之から長崎を廻つて、國へ歸る、といふので、再度、久光侯に、お別れの拜謁を許された。

『今後も、海上往來に就ては、我藩の船旗を掲げて、差支へない』
といふ、許しを受けた。斯ういふ次第で、木戸は、誠に萬事が好都合で、鹿兒島を出發して、長崎へ回航する事になつた。

大村藩の内訌

一

舊幕の時代、大藩の間に、挟まつて居る、小藩ほど、哀れなものなかつた。毎も、大藩の壓力で、動きがとれないうやうに、なつて居て、何事にも、小藩は、ギウ／＼言はせられて居たのだ。卑屈のやうだが、小藩の方では、何うしても、大藩の尾に従いて行く外なかつた。假令、その補助は、求めないにしても、憎まれぬやうに、心懸けるのが必要である、といはれて居た。然う仕なければ、迎も安泰に、獨立して行く事は、難かしいのであつた。

幕末の頃、勤王佐幕の議論が、漸次、嚴しくなつて來て、何れの藩にしても、その去就を、明かに仕なければならぬ、といふ場合になつた。勤王論の方に、傾く者は、自然、幕府から、憎まれる事になるから、相當の後援がなければ、判然、勤王派といふ看板を、掲げる事は出来ない。何程、將軍の御威光が、衰へたやうに見えても、まだ、天下の大權は、握つて居るし、何といふても、二百年以上の泰平を、保つて來た、將軍の威勢には、相當の大藩でも、公然、背く事は、可能なかつたのである。従つて、幕府の睨みは、相當に利いたから、佐幕の説を、唱へる者は、大手を振つて歩けるが、勤王論を唱へる、小藩の主人は、餘程、大膽な者でなければ、威張つて居る事は、可能なかつたのだ。

對州藩が、他の藩に率先して、勤王派に、馳せ加はつたのは、長州藩といふ、後楯があつたから、何うか斯うか、

押切る事が出来たのである。對州藩の他に、極めて小藩であつて、勤王派に加はつたのは、肥前の大村藩であつた。二萬石や、三萬石の木葉大名が、却々、表面に立つて、幕府に、反對の旗章を掲げる、といふのは、容易な事ではなかつたらうが、大村藩が、勤王で押切つたのは、感服すべき價値が、充分にある。併しながら、それまでになるには種々の事情もあつて、對州藩が、長州藩の後楯に依つて、起つた如く、大村藩も、長州藩と結んで、初めて勤王派たるの面目を、完うする事が可能たのである。

大藩の間に挟まつて、苦しめられて居る事よりも、大村藩に於て、最も苦痛を感じたのは、直ぐ隣りに、長崎奉行の居た、といふ事である。其一擧一動は、總て長崎奉行の監視を、受けて居たのであるから、何事も爲さずに、ジツと、其分に安んじて居たならば、敢て差支へもなからうが、少しでも、天下國家の事に、關係を有てば、長崎奉行の眼玉が光るので、後日の祟りが恐ろしい。然うした立物に居る、大村藩が、よく踏切つて、勤王派になつたのは、不思議に思はれる事であるが、それに就いては、藩中に於いても、勤王佐幕の二派があつて、非常な軋轢を仕た結果、血の雨を降らせて、何うか、斯うか、地固めが出来たのであつた。

其時分には、諸藩を通じて、何處にでもあつたのが、重役と、輕輩との、暗闘であつた。藩の重役にも、なつて居る者は、家柄もよし、先祖代々、仕へて居る、といふ所から、藩主の信用も厚く、それが爲に、重役にもなれるのであるから、従つて、勢力もなければならぬ筈だが、之に反して、輕輩や、一時抱へた家來は、始終、頭を押へられて居るから、其不平もあるし、又、藩政に干與つて、天下の事に、與つて見たい、といふ志もあり、現在の身分や位置にも、安んじ居る心がないから、自然、功名心も盛んである。夫が爲に、天下の事にも注意して、平生からの心懸が、違つて居た。重役よりは、却て然うした側の人の方が、天下の大勢には、通じて居たものである。

大村藩に於ても、猶且、その暗闘は、何時も絶なかつた。家老として、藩士の首席に、なつて居たのが、大村五郎兵衛、福田仲衛、淺田彌次右衛門、針尾九左衛門、大村左衛門の、五人であつたが、實際に於て、藩政を、思ふ儘に

攪亂して居たのは、御側御用人の富永快左衛門と、いふものであつた。家老と用人を比較すれば、無論、家老は、ズツと重い方であるが、朝夕、殿様の御側に居て、少し才氣の働きがあれば、殿様を、自由に動かすものは、却て御側御用人の方が、好都合であつたから、富永の勢力は、實に素晴らしいものであつた。之をチツと、睨んで居たのが、針尾九左衛門で、富永の方でも、五家老の中で、一番に、目の上の瘤ともいふべきは、針尾である、といふので、針尾の一擧一動に就ては、注意を怠らなかつた。

最初の中は、只、富永が、勝手な事をして、藩政を攪亂す、といふ事位であつたが、漸次、勤王佐幕の議論が、熾になつて、大村藩も、亦た御多分に漏れず、其軋轢が、甚くなつて來るに従つて、富永は、何處迄も、佐幕の意見で、進んで行かう、とする。永い間の習慣で、何うしても、其方へ、多數の人は、傾く風があつた。針尾は、甚く憤慨して、幾度か、殿様の御前に、富永と争つた事もあつた。けれども、未だ其頃は、藩主の意見も、佐幕に傾いて居たので、針尾の意見は、殆んど行はれなかつた。

それにも屈せず、針尾は、大義名分を説いて、勤王論を、鼓吹して行くのであつた。遂に、其勢力は、日に加はるの有様となり、多少とも、時勢に對する見識の有るものは、何れも、針尾の論論に、傾いて行くやうになつた。富永は、之を見て、頻りに自分の勢力を張らんとし、藩主の名義を濫用して、味方の結束に努めたから、毎も、富永の方が、針尾よりも、藩中の羽振り、は、良かったのだ。

然るに針尾の爲には、此上もない幸福が、湧いて來た、といふのは、外でもない、藩の世臣ではないが、松林廉之助といふ人が、抱へられて來て、藩の學校に、なつて居た。五教館の學頭といふ、立派な肩書で、藩の青年を、教導して居たのであるが、松林は、針尾と同じく、飽までも勤王の意見を以て、大村藩を動かさうといふ、考へが、あつた爲に、自然、針尾と松林が、手を握つて、共に進む事になつた。其上に、永く江戸に、出て居た、渡邊兄弟が、歸つて來て、之も亦、松林と共に、針尾に、近接して來たので、針尾は、夫が爲に非常な、力を得たのである。

渡邊兄弟といふのは、清左衛門と昇の事である。清左衛門も偉かつたが、弟の昇は、齋藤彌九郎の門に入つて、劍術の修行を積んで、齋藤塾の取締りにまで、なつた位であるから、腕前の體な事は、云ふまでもない。木戸が、桂の時代に、齋藤塾の頭であつた、といふ事は、前にも言つたが、桂が、去る時に、渡邊を、自分の後繼にして去つた。桂に比べれば、劣つて居たらうが、兎に角、齋藤塾の取締りが、勤まる位になるには、尋常一様の腕前では、左様はなれぬのであるから、昇が、劍客として、諸藩の間に、名前も知られたのは、大村藩でも、幾分の誇として居た位だ。松林は、渡邊のやうに、武藝の人ではなかつたが、併し、學問と見識に於ては、當時の大村藩に於ては、第一流の人であつた。此二人が、針尾九左衛門の味方となつて、勤王論を鼓吹したのは、少くも大村藩をして、維新の際に於ける、立場に迷はず、正々堂々と、勤王論で、押通す事の可能な、基礎を、作つたものである、といふ事は、いへるのだ。先づ、松林廉之助が、何ういふ人物であつたか、といふ次第から、述べる事に仕やう。

筑後國に、府中といふ所がある。今では、三井郡御井町と、いふて居るが、此處に、榎原杏哲といふ人があつた。先代から、醫者であつた所から、自分も、充分に修行を仕たい、といふ考へて、遙々、長崎へ、出て來た。

其頃の醫者で、多少共に、志の高かつた人は、多く長崎へ出たものだ。長崎は、早くから其一部が開放されて、異人の出入が、相當にあつたので、西洋の文明は、一度、長崎の關門を通じて、夫から六十餘州に、種が蒔かれて來る、といふやうな順序に、なつて居たのだ。然れば、醫者の如きも、長崎で學んで、歸つて來た、といへば、人の信用も増す、長崎へ行つて、修行を仕て來たのだから、大したものだ、と、其腕の良否は、姑く措いて、先づ長崎歸りと、いふ事に惚込んで、其信用が、却々深かつたのである。

杏哲が、長崎へ出たのも、仍且、醫者の本場の長崎であるから、其處で、修行して來たのでなければ、人中へも出られない、といふ考へて、はる／＼と、出駈て來たのであるが、記憶も良かつたし、負けぬ氣性の人であつたから、其進歩も著しく、固より多少の下地もあつたのだから、三年餘りて、立派な醫者に、なつて了つた。遠く離れた所からも、修行に來る位だから、長崎附近の人で、修行に來る者の多かつたのは、言ふまでもない。彼杵郡の宮村といふ所に、森周庵と、いふ人があつて、此人も、長崎へ來たのであるが、杏哲が、長崎へ來た時には、修行を終つて、宮村へ歸らう、とする時であつた。併し、二三ヶ月は、同窓の下に、起臥を仕たので、互に氣心も、知り合ふて、深く交はつたのである。

『オイ、榎原』

『ヤア』

『俺は、彌と明日、出立する事になつた』

『左様か、急になつたのぢやな』

『俺は、猶少し居る意であつたが、種々の都合から、急に歸らなければならぬ事になつたが、年に四度や五度は、出て來るから、必らず訪ねる事に仕やう』

『何うか、左様して呉れ。折角、懇意になつたのが、此儘別れるのは、名殘惜しくも思はれるが、其方の都合で、何とも致方がない。たとへ、顔は見られずとも、文通は絶えず、爲る事に仕やうぢやないか』

『そりや、無論ぢや。兎に角、今夜は、呑み明す事に仕て、明日は別れぢや』

年齒も若いし、威勢も好いものだから、他目にはそれ程にも見えないが、交情の好い同志の書生が別れるのは、何方も、心細くなつて不可ぬものだ。森と榎原は、一夜を呑明して、翌日は、榎原に送られて、森は、宮村へ歸つた。

夫から、年月を経て、榎原が、彌修行もつんで、近く故郷へ歸らう、として、其準備を仕て居た處へ、やつて來たのが、例の森周庵である。

其頃には、森は、既に大村に出て、醫者を、開業して居たのだ。却々、世事に通じて、如才ない上に、療治も、巧手に扱すので、大層氣受が好く、病家の信用も厚い、といふ事は、樞原も、豫て評判を聞いて、知つて居たのだ。杏哲が、近々に、故郷へ歸る、といふ事を聞いて、態々、森は、出て來たのであるが、其用向といふのは、杏哲とは、約東が仕てあつて、修行が積んで、歸國する時には、必らず大村へ、寄つて行く、といふ事になつて居たから、其約東を、果させる爲に、森は、迎へに出て來たのであつた。然るに、急いで歸る必要もないので、杏哲は、森との約束に従つて、暫く大村に、足を留める事にして、森の誘ふが儘に、大村へ、やつて來た。

何しろ、森は、杏哲に、惚込んで居るのだから、自分の家に置いて、種々と、世話をする間に、到頭、杏哲を、説き付けて、妹の松子を、娶せる事にして、下話の出來た後に、媒酌人を定めて、公然の式を、擧げる事になつた。

杏哲は、森の妹と結婚して、暫く大村に、足を留める事になつたが、只空しく、何事もなく日を送る、といふのは、好まぬ事ではあるし、殊に、醫者の修行も、充分にしてあるのだから、妻帯した以上、暫時は、此處で開業仕やう、といふ事になつて、醫名を始めた。土地も狭く、人數も少ない、城下の事であるから、敢て病家の競争をする譯はないが、自然と、森の病家にも、出入するやうな事になる。御互に、心の中では、更に嫉妬がましい事はないが、杏哲にして見ると、何となく、氣の濟まぬ感じもする。幸ひ郷里から、數次の迎へがあるのを、よい口實として、斷然大村を引拂つて、新婦を携へ、筑後の府中へ、歸つて來た。

夫から更に、筑前の早良郡へ轉じて、仍且、醫者を初める事になつた。夫婦の間も睦じく、醫者の方も、日に榮えて行く。善い事の重なる時は、斯うしたものか、妻の松子が、何時か妊娠して、天保十年二月十六日、安々と、男の子を産落した。杏哲の喜びは一通りでなく、名を、駒次郎と稱けて、寵愛を仕た。此小兒が、後年に松林廉之助となるのである。

「梅檀は、嫩より芳し」といふ諺がある。偉人は、小兒の時分から、調子の異つて居る所がある。時としては、其例に洩れる人もあるが、多くは此諺の通りで、小兒の時分に、優れて偉い所のある人は、大きくなつても、仍且偉くなつて、世の中に、大切の人として、敬はれるやうになるものである。何うかすると、小兒の時分には、素晴しく偉く成りそうであつたが、大きくなつたら、詰らぬ人になつた、といふ例も少くない。乃て、世間の人々が「十年で神童、二十歳で才子、二十五過ぎれば、普通の人」といふても居る。

駒次郎が、三歳の時には、既に文字を、能く書いて、今も猶、太宰府の天満宮に「松竹梅」の三字を認めた、額面が揚つて居る。夫は、三歳の時に、駒次郎が書いたものである、といふ事だ。尤も、新井白石といふ人も、三歳の時に、大字を認めて、人を驚ろかした、といふ事も、聞いて居る。晩年は、興業銀行の總裁になつたり、或は貴族院に入つたりした、添田壽一なども、少年時代には、字が巧手だ、といふので、字を書きながら、日本漫遊を、仕た事がある。其他にも、少年時代に、文字を、能く書いたものは、多く在るが、其調子で、ズツと、育つて行くと、素晴らしいものになるが、大概は、中途で、腰折をするものだ。日本外史を著はして、今猶、其名を誦はれて居る、頼山陽の如きも、僅かに十三歳にして、詩を作つて、古賀精里や、尾藤二洲をして、舌を巻いて、驚ろかした事がある。

父の杏哲は、極めて謹嚴な性質で、稍や偏狹の傾きが、あつた位に、人に許さなかつたので、存外に、敵も多かつた。然しながら、妻の松子は、氣質の和しい、情の深い、人の世話を、能く仕た爲に、出入りの者を初め、杏哲を、喜ばない者でも、松子には狎いて、頭を下げて來る、といふ位であつた。駒次郎は、嚴格な父と、慈愛深い母に、育てられたのであるから其中庸をとつて、誠に立派な人物になり得たのであらう。

飯盛山の麓に、鎮守の神が、祀つてあつた。祭禮があるといふので、近郷近在から、多數の人が、出て來て、大層

な賑ひである。小児にせがまれて、杏哲も、其祭典に、出掛けて来た。
 何處の祭典にても、必ず附屬物のやうに、なつて居るのは、高小屋の觀覽物である。其時分には、今日のやうに、風俗上の取締りが厳しくなかつたから、親子が、手を携へて、見る事の出来ぬやうな、猥褻な、觀覽物が多かつた。左様でなければ、極めて慘酷な、見たばかりでも、心持の悪くなるやうなものを、多く選んで、見せるやうにして居た。また、之を見に行く者は、却て然ういふものを、喜んで見る、といふ傾きがあつた。祭典といふても、必ずしも神詣をする、といふ譯ではなく、觀覽物小屋に、人が集まつて来て、ワイ／＼騒ぐ事を、祭典の趣意のやうに、心得て居るものが多い。

父の杏哲と、並んで歩いて居た、駒次郎が、足を停めて、凝乎と、觀覽物の看板を、見て居るから、杏哲も、黙つて見て居ると、臆て、駒次郎が、

「阿父様、那の看板に書いてあるのは、馬で御座いますね」

杏哲が見れば、成程、曲馬の看板である。

「ア、然うぢやよ。那れは、馬の觀覽物ぢや」

「曲馬といふのは、何ういふ馬で御座いますか」

「えツ、曲馬……」

「那處に、書いてあるのです」

杏哲が見れば、曲馬と、書いてあるのだ。夫を曲馬と讀んで、然ういふ馬は、何ういふ馬かと、聞いて居るのである。之が生れて、四歳にしかならない、小兒の言ふ事とは、逆も思へない。豫て、自分の子ながらも、幾度か、大人らしい事をいふので、脅かされて居る、父も、此曲馬の質問に就ては、今更のやうに驚いて、偏に胸の中で、此小兒の將來に、益々、望みを屬して居るのであつたが、亦何となく、怖ろしいやうな氣も仕た、といふ事だ。

何でもない事のやうであるが、四歳にしかならぬ小兒が、曲馬の看板を見て、曲り馬とは、如何なる馬であるか、と、父に問を發する、といふやうな事は、考へやうに依つては、恐ろしくも思はれたらう。兎に角、斯ういふ子供の將來は、人間の智慧を以て、測り知る事が能ない。

弘化四年になつて、西彼杵郡の蠣の浦と、いふ所へ、杏哲の一家は、移つて来た。杏哲は、醫術は巧手だが、無愛想の人であつたから、それが爲に、患者の狎方が悪い。従つて、一つ所に、長く居る事が能ない、といふやうな譯で、あつたのだらう。大村近くなつたので、森周庵が、度々、訪ねて来ては、面白い話に、時を過すと、泊つて行く事もある。可愛い甥の、駒次郎が居るので、其愛にひかされて、泊る事も、屢々であつた。

駒次郎が、恰も神の童の如く、伶俐である、といふのには、周庵も、舌を巻いて、驚く事が、數次であつた。彼是する中に、駒次郎は、十二歳の春を迎へた。大村藩に於て、新年の宴會が、開かれた時に、自分も、席に列して居た。藩主は、勿論、其席へ、お出ましになつて居られたが、無禮講の席上とて、周庵も、御前へ出て、お對手を申上げて居る。其時に、駒次郎の事を、有の儘に申上げたので、藩主も、頗る乘氣になつて、種々、お尋ねになつた末、

「追つて、沙汰をいたした場合には、必らず本人を、伴れ參れ」

といふ、お言葉が下つた。
 周庵も、面目を施して、其日は退つたが、日ならずして、藩主の御沙汰があつたので、駒次郎を伴れて、御前へ出る、と、唐詩選の講義を、申付かつた。駒次郎は、徐に見臺に向つて、滔々と、詩の講義を初めたが、其辯舌の明快にして、而も、詩の意味を、釋く事の精しいのには、藩主も驚いて、即時に、お召抱への御沙汰が出て、玄米六俵の扶持を、賜はる事になり、改めて、藩の學校、五教館へ入らせて、片山琴浦と、いふ人の門人として、正式に、學問の修行を、させる事にした。兎に角、十二歳の小兒が、扶持米を貰つて、藩校に入門した、といふのは、他藩にも、其例は多く無からう。

四

権原の姓は、杏哲の代になつて、松林と改めた。されば、廉之助は、小兒の時から、松林の姓を、名乗つて居たのだ。駒次郎から、廉之助になつたのも、ザツと成人してからの事であるが、別に號を、飯山といふて、世間には、廉之助では判らないが、飯山の方が、能く聞えて居る。何しろ十二位の小兒でありながら、藩主から、扶持米を貰ふて、藩校へ入つた程の神童であるから、學問の進歩も、却々著しく、十四歳の時に、大村藩に於ける、第一人者といはれた、村田士毅といふ儒者が、藩命に依つて、江戸へ出る時、駒次郎の飯山も、出府を命ぜられた。其用向は言ふまでもなく、學問の修行であつたから、本人も、非常に喜んで、村田に従いて、江戸へ出て来た。

駒次郎は、村田の指圖に依つて、就學をする他はない。村田は、駒次郎を、立派な學者に仕なければ、藩主へ對して、申譯がないのであるから、師匠とすべきものを、種々に物色して、漸く安積良齋を選んで、其門に入れる事に仕た。

良齋は、村田から、始終の事を聞いて、頼母しい少年と思ふて、一方ならず喜んだ。同じ門人を引受けるにしても、記憶の悪い、薄ぼんやりした者よりは、大村藩唯一の神童と、言はれて居るほどの子供に、教へる方が、自然に、張合のあるといふのも、人情であるから、良齋は、宛然、自分の子のやうにして、教へたのであつた。

然るに、本人は、前に言ふた通りの神童であるから、僅か四年にして、學問は大成したが、最も長所としたのは、歴史上の觀察と、人物論であつた。眞に天稟でもあつたらうが、文章の巧い事は、先生の安積でさへ、舌を巻いて、激賞する程であつた。曾て、駒次郎の文章を評して『才華空湧、一瀉千里』といふて、賞めた位である。安政四年には、年齢も十九歳となつて、遂に昌平齋へ、入ることになつた。亦此處で、二年の修行を續け、二十一歳の春、彌よ修行を終つて、大村藩へ、歸つて來たのである。

藩主も、非常に喜んで、待つて居たのであるから、翌日は、直に拜謁と、いふ事になつた。種々のお訴ねもあつて、藩主のお喜びは、一通りではなかつた。即座に、馬廻役に取立てる、といふ、御沙汰が下つたのは、此時であつた。全體、大村藩の世襲家格といふのが、四階級に分れて居た。第一が馬廻、第二が城下大給、第三が村大給、第四が小給と、いふのであつて、馬廻格は、藩中の上士といふて、非常に格式の良い者であるから、御譜代の家臣でなければ、容易になる事が、出来なかつた。夫を、此處まで引揚げたのは、全く破格の登庸といふても、可いのである。斯て數日の後、改めて又、御前へ召されて、五教館へ館長を命ずる、といふ御沙汰が下つたが、駒次郎は、強ひて辭退仕たのである。

「重ね、有難き御説では御座りますが、幼年の頃より、少からぬ御扶持米を頂き、御恩は、身に餘つて居ります。今は僅に、昌平齋の修學を畢つて、歸りましたまでの事で、未だ藩へ對しまして、何等の功も建てぬ身でありますから、却々、五教館の取締などは、勤まるべき身分では、御座りませぬ。折角の御説では御座りますが、右の次第ゆゑ、平に御辭退申上げまする」といふて、切りに辭するのを、藩主の大村侯は、

「いや、其遠慮には及ばぬ、慥かに職務の勤まるものと、見抜いて申付けるのであるから、遠慮なく受けたら、可からう」

「重ねての御説では御座りますが、幾分の功を建てました後に於て、御沙汰を願ひ上げたう、存じまする。殊に、御家臣の中に於て、多年、五教館に、勤めて居ります者も、數多くあるので御座りますから、此際は、是非とも御辭退申上げたう、存じまする」

夫と言はねど、暗に自分が、斯る破格の拔擢を受けては、却て他の藩士の、猜疑嫉妬を受けて、五教館の納まりが悪からう、と言はぬばかりに申上げたから、藩主も、遂に頷いて、

「然らば、館長は、暫く控へる、として、學頭になる事は、差支へあるまい。其事だけは、必ず受けて、可からう」
 暫らく考へて居た。駒次郎は、
 「夫までの仰せと御座いますれば、御受けを仕ります。未だ修行も充分ならず、年齒も、弱き事で御座いますから、其邊の處は、偏に御賢慮の程を、願ひ上げます」
 乃て、彌五教館の學頭と、いふ事になつた。
 其頃は、既に駒次郎を改めて、廉之助と、いふて居たのだが、却て飯山と、いふ號の方が、能く人に知られて、藩士は大概「飯山先生」と、稱して居た。年齢こそ、漸く廿歳を超たばかりではあつたが、學問の修行が本式であつたから、其評判は、實にえらいもので、父の杏哲も、母の松子も、口には出して言はないが、知己や親類へ對しての誇りは、一通りでなかつた。
 無事に、勤めて居る中に、安政が改元して、萬延元年となつた。飯山は、改めて藩へ、願ひを出して、大阪へ、再度の修行に出る事になつた。

五

安政から、萬延に跨る頃が、幕末に於て、一番に、峻しい時であつた。例の井伊大老が、幼い將軍を擁して、専ら權威を、弄んだ時で、二言目には「上意、上意」といふて、將軍の御沙汰を、笠に被つて、我儘の行爲を、仕て居たのであるから、井伊に對する、一般の反感は、一通りでなかつた。

將軍の御沙汰と言ふても、將軍は、年齢の幼いお方で、政治向に就いて、一見識を有つた、御沙汰を、下すやうな事は、出来ないものであるから、夫を、井伊が、自分の思ふ儘に扱ふて、面倒な事は、上意の一言で、決めてしまふ、といふやうに、仕て居たのである。外からは異人が、ドシ／＼押込んで来る。内には、攘夷論を唱へる、浪士が多く、幕府の威權も、漸く地に墜ちんとする。斯る場合に於て、能く人心を調和し、上下の意志を疎通して、両手に、國の政治を、扱ふて行く、といふ事を仕ないで、只、將軍の御沙汰なるものを濫發して、之に依つて、不平の士を押しやう、としたから、一般の者が、承知しなかつたのも無理はない。御親藩の中には、幕府の命を拒む者さへ、有るに至つたのは、全く之が爲であつた。何れの時代を問はず、苟も一國の政府を、預る者が、斯うした風うのやりかたをすれば、失敗するに決まつて居る。

却説、飯山が、大村を離れて、大阪へ乗出して來た時は、恰度、井伊大老が、櫻田門外に於て、水戸の浪士に、首を取られた時であつた。途中で、驢氣に聞いて、大阪へ着いてから、慥かな事を知つたので、かね／＼幕府の專權を、憤つて居た、飯山は、何となく痛快の感に堪へなかつた。學問を修めて、藩校の學頭を、勤めて居たのであるが、其學問は、章句の末に拘泥して、文字の數のみ算へて居る、といふやうな、流儀ではなく、學問を、時世の上に應用して、出来る事なら、天下の爲に、働いて見たい、といふ考へが、あつたのだから、普通の學者とは、頭腦が、異つて居るのだ。従つて、交際友人は、同じやうな人物ばかりで、既に兄弟同様に、深い交はりを結んだのが、三河の松本奎堂、仙臺の岡千仞の二人であつた。當時、阪地に於ける、儒者の仲間では、之を浪華の三秀才と、稱して居た位である。

奎堂は、後年に、侍従、中山忠光に從いて、大和五條に旗場ををして、最期を遂げた人であるが、優れた人物であつた。千仞も、普通の學者とは異つて、慷慨激越の士であつたが、此人は長壽をして、明治の世に生残り、八十歳以上の高齡になつても、相變らず門人が、訪ねて行くと、昔語りをしては、腕を扼して、慷慨悲憤した事は、有名なものである。此人の書いた書物の中で、一番に有名なのが「尊攘記事」といふのである。著者なども、子供の時分には、盛んに之を讀んだものであるが、斯うした人達と、飯山が、交際をした爲に、一層、勤王の思想が、深くなつて來たのであつた。

文久二年になつて、飯山は、大村へ、歸つて来た。再び藩命が下つて、五教館に、職を執る事に、なつたのであるが、其前から、五教館の講師が、重役の子弟に、教へる爲に、出張講義を、やつて居た。之に對して、飯山は、荐りに異論を唱へ、遂に、藩主に請して、其不可を説いたのである。

『師弟の間の禮義が立たなければ、君臣の間の忠節も、亂れて来る。既に門人としては其師たる者を、自宅に呼び付けて、講義を聴く、といふ心得が、間違つて居る。斯る悪弊は、速かに除いて、如何なる身分の者と雖も、必らず五教館に来つて、其教へを受ける、といふ事に、仕なければならぬ。又、藩主といへども、月に一度や二度は、必らず藩校に臨んで、藩臣の子弟と、膝を交へて、臨講する位の思召しがあれば、逆も此小藩を以て、大藩の間に介在して、天下に、藩の威信を保つ、といふ事は、能るものでない』

と、荐りに説いて、遂に藩主をして、その意見を、採用させる事にした。誠に良い事ではあつたけれども、重役の中には、甚だ不快に感ずる者もあつて、何となく飯山を、快く思はないのであつた。

然るに、藩主の御寵愛めてたく、元治元年になつてから、近習番頭格に進んで、旗下隊に入る事になつた。然し、斯ういふ事は、古い因習で、各自、其藩に於て、家格を誇つて居たものから見ると、甚だ嬉しくない事であるから、自然、飯山に對する嫉妬の心から、何となく、飯山を疎外して、動もすれば、陰口を利くやうに、なつて来た。

江戸や、京都大阪に於て、種々な、政治問題が、起きて来た爲に、幕府の内部分部が、動搖し始めた。諸侯と、幕府の間には、面倒な事件が起り、然うした事が、關係を及ぼして、三百諸侯の間にも、内訌が起り勝てあつた。幕府を、飽までも助けて行かう、といふのと、幕府を倒して、王政の昔に復さう、といふのと、又、攘夷開港の意見が、相違して居る、とかいふやうな、種々な事から、何の藩でも、藩士の意見が、區々に別れて、暗闘が、起つて来た。大村藩も、同じやうな事で、ごたつくやうに、なつて来たので、前途を思へば、心配な事でもあり、藩主の身に取つて見れば、容易ならぬ事であるから、或る日、飯山へ、御沙汰が下つて、至急登城しろ、といふのであつた。飯山は、藩主の御前へ出て、仰ういふ御沙汰が下るのかと、待構へて居た。處へ、藩主の大村侯が、御出座になつた。

六

大村侯は、飯山を信じて、その意見を、多く用ゐたので、譜代の老臣は、甚だ喜こばれなかつた。針尾九左衛門の一派が、飯山の爲人を知つて、五教館の學頭として、尊敬して居たから、藩主が、常に飯山の意見を訊いて、藩政を行ふ事を、喜んで居たのである。

今日も、飯山が、御前へ召されて、何事か知らぬが、御下問の次第がある、と聞いて、心の曲けた、老臣等は、甚だ喜ばなかつた。此事情は、飯山にも、よく判つて居たのであるから、程よく老臣をあやなして、徐かに進んで行けば可かつたのだが、非常に意志の、固い人であつて、徒らに膝を屈する事を好まず、思ふた事は、其儘に言ひもすれば、亦行ひもする、といふのが、飯山の氣風であつたから、老臣等の中に、敵意を挾んで、自分を睨んで居る者が、ある位の事は、承知して居たが、少しも頓着なく、毎も、藩主の前に出れば、侃々諤々の議論を吐いて、老臣の膽を、冷させるのが、常の事であつた。

『我藩に於て、最も急に改めなければならぬのは、何事であるか、其方を見る所を、訊きたいのぢや』

と、大村侯が、問ふたのに對して、飯山は、徐に頭を上げて、『先づ、人心を歸服せしめる、といふのが、最も大切の事と、必得ます。御家臣の中に於て、一人たりとも、藩政の不公平を、歎く者がありますれば、其藩政は、既に缺陷があるので御座る。永い間、高祿を頂いて、君恩に浴し居る者に、公明を缺く者がありますれば、御領分内の、町人百姓の輩も、均しく御政道に就て、不服が御座います。依つて、速に其弊のある所を究めて、之を改革する事が、第一の儀と存じます』

と、遠慮もなく答へた。

殿様の前で、藩政の亂れて居る事を、平氣で、言放つのみならず、藩士の中に不平があり、領分内の町人百姓も不平を懷いて居る、といふ事を、斯ういふ風に、正直にいふものは、飯山を除いて、他にはあるまい。大村侯は、飯山の爲人を、深く信じて居るから、斯ういふ事を言はれても、更に不快の念は、懷かなかつた。

「其方、申す所は、能く相解つた。併し、夫に就ては、如何いたしたなら、政道の誤れる點を、正す事が出来やうか。予は、切に夫を聞きたいのぢや」

「ハツ、お言葉にて、恐れ入りました。不肖の申します事を、御採用下さいまして、有難き次第に御座います。仰せに従ひまして、卑見を申し上げますれば、賞罰を正しくして、君の徳を、普く行き渡らせる、といふ事が、最も大切の儀と、心得ます。今日迄の、御政道の上には、左までに、歪んだ事も、ないやうに心得ますが、強て論じますれば、一二不都合の點も御座います。併し、斯様な事は、老臣の間に於て、決すべき事柄で、決して君侯が、御心を勞するまでの事では、無いやうに心得ます。宜しく老臣へ、御下命の上、賞罰を正しくして、御家臣の間に、一點の不平不満のなきやう、御沙汰の儀、偏に願ひ上げます」

飯山は、少しの遠慮もなく、思つた通りに、言ふて了つた。其意味を解釋すれば、老臣が、寄つて集つて、不公平の事ばかりして居るので、政道が亂れるのだ、と言はぬばかりの申條であるから、家老の福田仲衛が堪りかねて、席を進んだ。

「アイヤ、松林氏、只今の一言は、聞捨てにならぬ。何となく、重役の者が、依估偏頗の政道を、執つて居るやうにも聞えるが、果して左様お認めになるならば、何れの點が、依估であり偏頗であるか、儘と其例を擧げて、御發言を願ひたい。苟も君侯の御前に、巷の風説を捉へて、輕々しく、左様な事を申し出されては、我々に於ても、黙して聞く譯には相成らぬ。儘と挨拶さつしやい」

大村五郎兵衛、淺田彌次右衛門の二人も、福田と同じやうに、佐幕派の一人であつたから、今、福田が、飯山に對して、手厳しく詰問を始めたので、幾分か溜飲も下つて、快く思つたのであるが、さて、飯山が、何と答へるだらうか、それを思へば、氣がかりにもなるのだ。

「お訊ねの儀は、儘と相判りませぬが、詰り依估偏頗の政道を、誰が致して居るかといふのを、お訊ねて御座りまするか。又、賞罰を私して、家臣の中に、不平を懷く者があるに就て、其人名を糺さう、との思召して御座りまするか。猶一應、伺つて置いて、更にお答へを致す事に仕る」

「如何にも、其通りぢや。我等は、先祖代々、君侯の御恩を辱なうして居るもので、只徒らに、家老の職に、就いては居らぬ。お手前が、申さるゝ如く、不都合の政道が、假初にもあつたとすれば、我々の罪ぢや。君侯への申譯に層よく覺悟もいたさう。依つて、其廉を擧げて、今一應、いふて見られよ」

「委細心得ました。然らば、之より手前が、存じて居る事だけを、申述べます」

飯山の膝は、グツと進んで、其鋭い眼が、ピカリと光つた。福田も、今は乗りかゝつた船で、退くわけには行かない。殿様の御前も忘れて、肱を張りながら、飯山に、詰め寄つた。

七

老臣としては、飯山の申條を聞いて、黙して居る譯にもなるまい。曲りなりにも、一通りの辯疏を、爲るには違ひない。飯山の方でも、斯う言へば、老臣が怒る位の事は、承知の上で、いふたのであるから、老臣の鼻息が強い程飯山も、亦強く出るのは、當然である。今や双方、膝を進めて、殿様の御前といふ事さへ、忘れた様子であるから、大村侯は、

「控へろツ」

鶴の一瞥で、双方、疊に手を下して、頭を下げた。

「其方共、私の争ひは、何事である。予が、廉之助に、訊ねて居る事は、予の心得にもならうか、と思ふて、訊ねるのぢや。老臣共が、彼是傍より、嘴を容れるのは、宜しくあるまい。控へて居れ。然りながら、廉之助とても、幾分の慎みはあつて、可からう」

流石に、惻かな殿様だけあつて、双方共、叱言をいふて押へた。斯う言はれては、何としても、逆らう事は能ぬ。ひとへに、恐入つて、控へる外はない。

「廉之助の申す所は、能う相判つた。それ以上は、聞くに及ばぬ。予の胸にも、夫と思ひ當る節もある。令後は能く心して、賞罰を正しうし、人心を収める事に努める故、其儀に就ては、深く心配いたすまでもなからう。就いては、猶ほ其他に、氣付いた事があるなれば、聞き置かうか」

双方へのお叱言があつた後に、改めて飯山に對して、斯う言はれるのは、其お叱言は、老臣へ聞かせたので、飯山の申上げる事は、能くお胸に、納まつたに違ひない。と思へば、飯山は、誠に快よく感じた。

「恐れながら、お言葉に従ひ、猶ほ氣付きましたる事を、申上げます。不肖、江戸在學の折柄、屢々諸藩のすぐれたる人々に接しまして、其砌に、承はりましたる事、御座りしますが、兎角、何れの藩に致しても、君侯のお側を勤めまする、御用人なるものは、動もすれば、不義の利を貪り、何事も、贈物の多少に依つて、取計らうものぢや」といふ事を、聞き及びました。幸ひにして、我藩におきましては、左様な人は、御座りませぬゆゑ、強て申上げまする迄もなき事なれど、すべて、君側に仕ふる者は、苟も利慾に離れて、只正しき道を、歩む者に限りまする此儀に就ては、深く御心にかけてせられるやう、偏に願ひ上げまする」

お答へは、殿様に、仕て居るのだが、飯山の眼は、御前に控へて居る、富永快左衛門の顔に、注いで居るのであつた。始めの中は、富永も、平氣な顔を出して居たが、漸次、飯山の言葉が烈しくなつて、チク／＼と、針で突くやうに

言はれるので、何時か眼の縁を結んで、下を向いた。膝に突いて居る、手先が、ブル／＼顫へて居るのが、脚の位であつたのは、飯山の直言を怖れたものか、夫ともに、忌々しい奴だ、と思つて、癩に障つたから、疝癩力で戯へるのか。何れにしても、飯山の申立は、痛快の至りであつた。

殿様も、之まで忍耐して、聞いて居たが、猶ほ以上訊ねたら、何様な事を、言ひ出すか知れないから、程好く納めやう、といふ氣になつて、

「其方の申す所は、能く相解つた。予は心して、人を用ふるにも、深く注意いたさう。獨ほ氣付いた事もあらば、其都度、取次を待たず、予に、直に傳へるやう致せ」

「有難き御沙汰を賜りまして、廉之助の面目、此上も御座りませぬ。猶ほ申上げたき事も、數々御座りませぬれば、追つて書面として、お手許へ差上げる事にいたしまする」

「ウム、そりや、是非待受ける。早々に書面として、差出せ」

「ハツ」

其日は、夫て退つたが、飯山は、邸へ歸つて來ると、筆を執つて、之から一編の建白書を認めた。賞罰と賄賂の事は、御前に於ていふた通りであるが、猶ほ其他に、近來、藩の士風が、奢侈淫佚に流れて來たのは、甚だ憂ひに堪へぬ。天下の泰平も、既に二百年以上續いたので、さなきだに、人の心が、遊惰に流れ易い所へ、四民の上に立つ、武士が、動もすれば、其日を放縱に送るので、民風を頹廢させる。斯様な事は、最も戒めなければならぬ。武士が、讀書を忌嫌ふて、聖賢の道を、學ぶ事をせぬから、禮儀を重んじなくなる。禮儀を重んぜぬ氣風が、増長して來ると、遂には、君臣の大義も亂れ、老幼の序も、缺けて來る。夫が、一藩の士風に、關係を有つて來るのであるから、藩侯、自ら大に戒めて、藩士の取締りを、嚴重にする必要がある、といふやうな意味の事を、細々と認め

て、大村侯の手許へ、差出した。

之が普通の殿様なら、頼にも障るであらうが、大村侯は、却々立派な、御方であつたから、其建白を容れて、藩政の上に、大改革を行はう、といふ決心になつて、時折は、老臣共に、其事を洩すやうになつた。

八

永い間、徳川が、政權を握つて、勝手放題の行爲をして、更に朝廷に對する、敬意といふものはなかつたから、多少、讀書の力があつて、大義名分を、辨まへて居るものは、心算かに憤慨して居たのである。頼山陽が、日本外史や日本政記を著して、政權が武門に歸して以來の、王室の式微を歎いて、暗に、勤王心を鼓舞した、といふのも、即ち夫が爲であつた。其他にも、山陽と同じやうに、文筆の上で、頻りに勤王論を、鼓吹したものが多數にあつた。夫が何時か、知らず識らず、人の心に、染み込んで来て、機會さへあれば、爆發仕やう、として居たのだ。

處へ、阿米利加の使節が、相州浦賀へ、乗り込んで来た爲に、一時に、世論が沸騰して、開國鎖港の議論が別れて條約調印の一條から、幕府に對する、朝廷の逆鱗は一方ならず、之が原因となつて、勤王倒幕の説が、現はれて来たのである。其間には、幕府へ對する、多年の不平を、洩らす爲に騒いだものもあるが、要するに、勤王倒幕は、大義名分論から来たのだから、何うしても、之に依つて、幕府の運命は、決せられるのが當然であつた。其點に、氣が付かなかつたのは、幕府の油断であつた。

諸藩の間にも、夫と同じ意味から、開國鎖港、勤王倒幕の説が別れて、互ひに相争ふて居た。佐幕論を、唱へる者の中にも、攘夷の意見を、有つものもあつたが、併し、それは僅かな數で、佐幕を唱へれば、どうしても、開港に同意仕なければならぬのであつた。勤王を唱へれば、攘夷論に、左袒する必要があるので。佐幕で攘夷、勤王で開港といふやうな事は、當時の勢ひの上から言へば、甚だ矛盾した事であつた。藩論を、立場の都合から、割出した中には、然ういふものもあつたが、兎に角、勤王論は、日を追ふて、盛んになる許りであつた。

飯山は、大村侯の信任を得て、莽りに勤王論を鼓吹する。殊に、五教館の學頭といふ、位置に居たから、書物の講義をする間にも、其意見を、挟んで聞かせるのであるから、どうしても、若い者の間には、勤王論を、唱へるものゝ多くなつて来るのは、當然である。昔でも、今日でも、同じ事だが、若い書生の勢は、實に偉いもので、血氣盛りの二十歳前後の者が、本氣になつて暴れ出したら、存外に力のあるものだ、といふ事は、近年になつて起つた、政變や労働爭議について視ても、能く判る。維新當時の事に顧みても、仍且、同じ事で、二十歳前後の者に、威勢の好いものも多く、三十歳未満の者が、那の大勢を作つたのである。

五教館に入つて、學ぶ者には、年輩もあつたが、多くは二十歳前後の者であるから、夫に對して、飯山が、勤王論を鼓吹したので、大村藩の雄飛は、全く之に原因したのである。

殊に、飯山が、藩主の信用を得て、其建言は、多く採用される、といふやうな次第であつたから、従つて、若い藩士の間には、望みを寄する者が、多くあつたのだ。夫だけに、佐幕派の方から見れば、飯山を憎んだのは、一通りではない。殿様の御前で、暗に辱めを受けた、富永快左衛門の一派は、非常に憤慨して、何か機會があつたならば、飯山を陥れやう、といふ事を考へて、始終、其隙を窺つて居た。

然るに、富永には、非常に心を苦しめて居る事があつた。藩の兵制改革に就て、洋式の訓練を、奨励する事になつたので、その結果、従来の鐵砲は、用を爲さない、といふので、新たに長崎へ、人を派して、西洋式の鐵砲を、澤山に買入れる事になつた。其係りが、富永であつた爲に、大村藩と、異人との間に、周旋の勞を執つた、長崎の商人と結托して、鐵砲一挺に就て、何程といふ價を定めて、ひそかに利益を、貪つた事がある。詰りを言へば、賽取の口錢を、武士が取つた、といふ事になるのだ。而も、大村藩の御側御用人を、勤めて居る、富永ともあるものが、商人と結托して、藩の御用金の、頭を刎た、といふのだから、武士としては、風上にも置く事の出来ぬ程に、賤しい事を行つた譯だ。従つて、夫に就て、富永の心の苦しみは、一通りでなかつた。

昔から、斯うした風の間人が、悪い事を仕て、筋の立たない金を、懐に入れる。それを悪い、といふ事は、よく承知して居るが、さて金を見ると、憤む事が出来ないで、怖々、金を握つて、それが知れかゝると、却て人を怨むやうな事になつて、騒ぎが持上る事に、筋書は、大體定つて居るが、飯山の爲に、殿様の御前で、それとなく、金銭の事に就て、言はれた事が、何となく気がかりでならない。事に依つたら、其事を知つて居て、飯山が、那アいふ風にふたつてはなからうか、と、飯山を恐れるばかりでなく、終には憎むやうになつた。今まで積んで置いた、不義の財を散じて、味方を集める。一方には、飯山に、隠目附をつけて、其一舉一動を探る事に、なつて来た。飯山の方でも、それと悟つたから、兩者の間は、一日ましに反目するやうに、なつて来た。之が爲に、大村藩が起つて以来、未曾有の騒ぎが、始まつたのである。

九

人間には、卑しい性質があつて、假令、筋の悪い金でも、手を出さずに居られない、といふのが、百人の中、九十人までが、それである。富永の方では、金に飽して、味方を作るのであるから、存外に勢力は、加はつて来て、多くの藩士は、どうしても、富永に、反對するものは少い。併し、飯山の方へ、味方をするものは、何れも正義の士であるから、却て富永の方よりも、其結束は堅く、殊に、家老の針尾九左衛門が、尻押をして居るので、追々に、勢力は延びてゆくのであつた。

其上に、江戸から、歸つて来た、渡邊昇が、飯山の味方となつて、若い藩士を、荐りに廻り付けたから、一時は、富永の方へ、味方した者までも、飯山の方へ、戻つて来る、といふやうな譯で、飯山が、學問の力で、人を引付けるのも、渡邊が、齋藤塾で鍛へて来た、劍術の教授をする傍ら、人の心を引付けるのも、其力に於ては、格別の違ひはなかつた。

今日も、飯山は、五教館に於て、經書の講義を授け、一日の勤めを終つて、今、歸つて来た所である。妻のおこまが出迎へた。

「今日のお退りは、例もよりか、お早いやうでございましたな」

「ウム、存外に、今日は、勤めが捗つて、歸りが早かつたのぢや」

「最前、渡邊様から、お使ひでございまして、別に御返事には及ばぬ、と仰しやつて、お手紙が、差置きて参りましたから、お机の上に、置いて御座います」

「ウム、さうか、渡邊昇殿か」

「ハイ、左様で御座います」

衣服を更めて、飯山は、自分の書齋へ入つた。渡邊の書面を、披いて見ると、些と折入つて、御相談をいたしたい事があるから、今夕六時より、罷り出るに依つて、御在宅を願ひたい、といふ意味であつた。飯山は、手を鳴らして、妻を招いた。

「渡邊氏が、おいてなさるさうぢやから、酒の用意を、いたして置け」

「ハイ」

「今、誰か来たやうぢやな」

「直記が、参つて居ります」

「ハ、ア、直記が、来て居るか」

「ハイ」

「可し。少し直記にも、話す事がある。之へ招べ」

「只今、直に伺はせします」

妻は、良人の申付けを、聞いて立去る。暫くすると、おこまの甥に當る、雄城直記が、やつて来た。直記は、頗る腕力があつて、自分の好きから、とは言ひながら、劍術は、頗る強く、若い藩士の中でも、直記を、先方へ廻して、充分に勝利を得る、といふものは、餘り澤山なかつた。其代り、學問の方は、兎角留守がちで、毎も、腕を叩いて、劍術の自慢ばかりして居る、殺伐な男であつた。常に酒色に耽つて、素行の修まらない、今ていへば、不良少年ともいふ可き、青年であつた。おこまは、自分が、叔母に當るのだから、始終心配しては、意見を言うが、却々、いふ言を肯かない。時折は、飯山に對して、直記の不身持を語つては、異見を頼むのであつた。誰に向つても、強情で、言ふことを肯かないが、飯山には、一目も二目も置いて、假令、其意見を肯かぬ迄も、此言を言はれて居る間は、口返答をする、といふ事はなく、極めて素直に、其此言を聞いて居たのだ。此頃では、富永の家に出入して、何ういふ譯か、現在の叔父に當る、飯山の事は、口を極めて、悪くいふて居るが、富永の事になると、宛然、藩中の一大傑物なるが如く、賞め讃して居るので、心ある者は、爪弾して、直記と話す事さへ、厭ふやうになつて居たのだ。

「何ぞ御用で御座いますか」

「オ、直記か」

「ハイ」

「鳥渡、之へ入れ」

「ハイ」

直記は、ズツと、書齋へ入り、飯山の前に坐つた。其姿を、凝乎と眺めた、飯山は、

「此頃から、折があつたら言はう、と思つて居たが、汝は、富永の家へ、出入するといふてはないか」

不意の質問に、直記は行詰つて、暫らく答へが出なかつた。飯山は、猶も膝をすゝめて、

「何ういふ理由で、富永へ出入するの、其仔細を語りなさい」

「同じ藩士で御座いますから、用事があれば、參る事も御座います」

「黙れ、それは、何といふ答へか。用事があつて、富永の宅へ、參る事をならぬ、と、誰が申した。此頃のやうに、足繁く、富永の家に入出入するのは、何か仔細があらう、といふて、訊ねて居るのぢや。汝は、富永といふ者を、何

ういふ人物である、と思ふて居るのか」

「夫は、能く判つて居ります」

「何う判つて居るか」

「君侯の、御側御用人で御座います」

毎になく、今日の直記は、飯山に、反抗の氣味で答へる。斯うした嘲弄に等しい、言葉を以て答へるのは、どういふ譯か。富永が、御側御用人たる事は、誰でも知つて居るのだ。其様な事を、飯山は、聞いて居るのではない。それ

と知りながら、飯山に、何ういふ人物であるか、と訊かれて、御側御用人である、といふやうな、答へを仕たので、

流石に、飯山も呆れて、直記の顔を、見詰めて居たが、

「君侯の御側を、勤めて居る富永であるから、足繁く出入する、といふのか」

「イエ、左様な次第ではありませぬ」

「然らば、何ういふ次第か」

「富永が、如何なる人物かと、お尋ねが御座りますから、御側御用人であると、お答へ申したので、同人を訪ねます

るのは、私の勝手に御座います」

「其勝手に、訊くのぢや。何ういふ勝手に、行くのか」

「併し、之は叔父さまの仰せとも、心得ませぬ。假令、富永が、何ういふ人物であらうとも、同じ藩士の列に居りま

する我々が、お訪ねして悪い、といふ事は、御座りませぬ」

「汝は、拙者に、喧嘩を賣りかけるのか」
 「イエ、決して左様な次第では、御座いませぬが、叔父様の、お訊ねに依つて、思ふ儘に、お答へをするだけの事で、御座います」
 「さうか、それでは最早、此以上は、何事も言はぬから、寧ろ富永の方へ、引取られて了つたら、何うぢや。汝のやうな、心の拗けたものは、富永のやうな、腸の腐つた奴に従ふのが、順當であらうよ」
 「何と仰せられます。私の心が、拗けて居る、といふのは、そりや、如何なる次第で御座いますか。假令、叔父様の仰せ、とはいひながら、お答へに依つては、直記も、黙しては居られませぬ」
 平生から、直記の心が、良くない事を、知つて居て、殊に、富永の家へ、出入する事が、近頃になつて、烈しくなつたから、それを異見仕やうとて、詰問を始めたのに對して、斯ういふ答へをするのであるから、飯山も、勢ひ怒らざるを得なかつた。直記は、空嘯いて、飯山の顔を、ジロリ〜と、横目で見て居る。

一〇

「最早、汝には、何も言はぬ意ぢやが、繋がる縁の、叔父として、一言だけ、述べて置きたい。富永といふ奴、御側御用人といふ、位置を利用して、常に不義の財を集め、不善の行ひをして居る、といふ事は、汝の眼にも、能く映つて居るだらう。何ういふ事情で、富永に近づいたのか、今更に、其仔細を、聞いた所で、詮のない事ではあるが、若い者の、只一時の心得違ひから、富永を見誤つて、左様相成つた、といふ事なれば、亦許す所もあれど、心から、富永に許して、親しくなつて居る、といふならば、拙者は、何も言はぬ。今、諸藩の間に、勤王佐幕と、意見が分れて、何日か、其衝突は、免がれないのぢや。吾が藩に於ても、夙く勤王の大義を唱へて、王事に盡す、覺悟を仕なかつたならば、天下の時勢に立後れ、となつて、藩の名折れになるは、言ふ迄もない。幸ひに、吾が藩侯は、賢明に在すが爲に、左右に在る、佞臣の言を、お聞入れになるやうな事も、あるまいが、萬一、富永一味の者の説が、藩論となつて、佐幕の方針を、執るやうな事にでもなつては、夫こそ、藩の一大事である。夫等に就いては、自他に、皆心を苦しめて居るのぢや。然るに、汝が、若し富永輩の手先となつて、不義を働らくやうな事があつたら、遂に家名を汚す事にも、なるのぢや。常に聖賢の道を教へて、王道の苟且ならぬ、といふ事も、傳へてある意ぢやが、汝には、其心がよめなかつたのか。汝の心は、腐つて居るのぢやから、此以上の事は言はぬが、まア、能く心して、今後、一身の計を誤らぬやうに、注意するが宜い。最早、今日限り、拙者の家へは、出入して下さるな」
 と、飯山が、理を極め、言葉を盡しての意見、大體の者なれば、一度は、邪道に踏込んで、舊の心になつて、悔悟の情も起るのであるが、飽までも、富永の味方と誓つた、直記の心に、飯山の力でも、矯め直す事は出来なかつた。
 「仰せ聞けられます事は、それまで、御座りまするか」
 「ウム、此他に言ふことはない」
 「左様なれば、之にて御無禮、仕りまする」
 と、立ちかける直記の態度や言語が、實に憎々しいほど、無禮を極めた。飯山は、堪らなくなつて、呼留めた。
 「待つツ」
 立ちかゝつた直記は、膝を下した。

「何ぞ、御用で御座いますか」
 「汝は、拙者が、今言ふた事が解つたのか」
 「能く相解りました。今後出入するな、といふ仰せ、其仰せの通りに、致したら可いので、御座いませう」
 「其答へは、汝の心からか」
 「ハイ、言葉と心と異ふやうな、直記では御座いませぬ。手前が、富永の邸に出入したればとて、それが、何程の事

て御座いますか。左様な御意見に従ふて、富永方へ、出入をいたしましたせぬ、といふ答へは能きませぬ。お氣に召さぬ、といふなれば、御當家へ参らねば、濟むので御座りますから、此儘に、立去らうとするのでありますが、猶御用を、お思ひつきになりましたのなら、承はりませう」
 如何にも、憎體な口吻には、彌上様へかへた。
 「可し、夫で可い。速かに立去れ」
 「御免を被ります」

直記が、今、室を出やう、とする所へ、入つて來たのが、飯山の妻おこま、直記の爲には、叔母に當るのであるから、洗石に、直記も躊躇つて、叮嚀に會釋した。

「直記さん、汝は、最早お歸りか」

「ハイ、叔父様が、歸れと仰せられますから、歸ります」

「叔父様が、假令、何と仰せられたればとて、一應はお託をして、叔父様の御意見も承つてからに致したら、如何ぢや。全體、汝が、宜しくないから、斯ういふ事にもなつたのであらう。まア、それに控へて、お聞きなさい」
 飯山は、之を見て、

「いや、捨て置け。左様な、犬畜生に等しい者に、二度と、言葉を交すも、穢らはしい。一刻も早く、立去つて了つた方が、可い」

直記が、俄に顔の色を變へて、膝を交直した。

「何と仰せられます。手前を、犬畜生と仰しやつたな」

「オ、言ふた。それが、何といたした」
 「こりや、一應承はらなければならぬ。假令、叔父舅の間柄なればとて、手前を、犬畜生とは、何事で御座るか。」

苟も大小城む、武士に對して、其暴言は、叔父なればとて、用捨はなりません。何と、犬畜生といはれたのが、それほど口惜しいか。腐つた心にも、犬畜生といはれるのが、それ程に立腹しいか。それなれば何故、邪道に踏入つて、富永づれの家に、出入するのにか」

「富永へ出入する、といふのが、何ういふ譯で、悪いので御座いますか。叔父様は、富永を、悪い奴ぢや、と言はしやつても、手前は、富永を、さまで悪いとは、思ふて居らぬのですから、其處は、人各々の見る所が異ふので、御自分の意に満たぬから、とて、現在の甥を、犬畜生とは、何事で御座りますか」

「諍ひは漸次、烈しくなつて來て、今は、おこまも、中へ入つて、何と取成したら可いか、殆んど其處置に、困つて居る。所へ、下男が來て、

「只今、渡邊様が、御光來て御座います」

「オ、それは、恰度好い所ぢや。之へ御案内申せ」

ハツと答へて、下男は、立去つた。暫くすると、渡邊昇が案内されて、座敷へ通つた。

「ヤア、能うお入來ぢや。最前の御書面で、お待受申して居つた」

「今少し、早く參る意であつたが、針尾の……」
 と、言ひさして、四邊を見ると、直記が居るから、渡邊は、言葉を控へた。其場の様子を見れば、物諍ひでもあつた

かのやうにも、思はれる。渡邊は、語を轉じて、

「一向心付かなかつたが、直記殿も、おいてたのか」

「是は、渡邊先生、能うこそ御入來になりました」

「ウム、今日は、何か御用があつて、おいでになつたのか」

「ハイ」

豈夫、飯山も、今迄の事情を、話す譯にも行かないから、黙つて控へて居る、と、直記は、渡邊に向つて、
「手前が、富永快左衛門殿の邸に出入する、といふのが、叔父の氣に適らぬ、といふて、叱られて居つた所で、御座
います」

「ハ、ア、それは、意外な話であるが、何ういふ筋合から、然ういふお叱言が出たのか、一應は、聞いて見たいやう
な、心もする。差支へなくば、お語り下さらぬか」

「憚る事も御座いませぬから、お話し申すのは譯のない事で、御座います」

飯山が、苦り切つて、直記を、睨んで居るにも拘らず、直記は、ベラ／＼と、今までの始末を、物語つた。自分に
は、疚しい事はなく、只、叔父の飯山が、一種の嫉妬心から、富永の家へ、自分が、出入するのを差止めやう、とす
るが、無理な事である、といふやうに、直記は、語るのであつた。渡邊は、腕を拱で、聞いて居たが、心の中では、
原來、豫て噂にあつた通り、此直記は、叔父に背いて、富永に、款を通じ、佐幕派の手足となつて、働いて居るに違
ひない、と思へば、何となく、直記に對する、輕侮の念も起つて、渡邊は、ニヤリと、可憐な笑ひを洩した。

一一一

飯山は、直記の振舞を、苦々しい事に思つて、自分は、口を利くのも、可憐になつて了つたのだ。然るに、直記は、
猶ほ執拗に、飯山に向つて、

「拙者が、犬畜生と、同様であるといふ、其次第だけは、承つて置きたい。如何なる點が、犬畜生であるか。御説
明を願ひたい」

と、詰寄つて来る。假令、何程争ひをして居ても、他人の渡邊が来たのだから、其場合は、差控へるが、至當である。
然るに、直記は、更に其遠慮が、ないのみならず、殆んど飯山に對して、詰問するが如き、態度で、迫つて行くから、

渡邊も、豈夫に、黙つて、居られない。

「マア、直記殿、待たつしやい。何ういふ次第か存せぬが、叔父甥の間で、目に角立つて、争ふ事もあるまい。何れ
は、此昇が、仲裁の位置にも立たう。此場合は、何もいはずに引取つたら、何うぢや」

「之は、渡邊先生の仰せとも、心得ませぬ。此場の終始を、詳しく御承知で、容嘴になるのか、それともに御承知な
くして、餘計な世話を、やかつしやるのか。何ういふ次第で、横合から、左様な事を仰せられる」

「そりや、餘計な事と、いはれれば、それまでの事であるが、拙者と、飯山先生の間柄は、藩中でも知らぬものはな
い。従つて、他人ではござるが、足下とも、親類同様に、心得て居るのぢや。何となく、此場の光景が穩かならぬ
と思へばこそ、口も出す次第であるが、拙者に、花を持たせて、快よく何事もいはずに、今日は、引取つて貰ひた
い」

「いや、然ういふ都合にはなりません。他の事と異うて、苟も大小差す、武士に對して、假令、目上の人なればとて
犬畜生といはれては、此儘に濟す譯にはなりません」

「其處が、言葉の行掛り、といふもので御座る」

「こりや、怪しからぬ。斯様な事に、言葉の行掛り、といふのは、ござらぬ。渡邊先生、平生の御氣性にも似合ぬ。
餘りに馬鹿々々しい事を、仰しやる」

威猛高になつて、渡邊に喰つかつた。渡邊も、今は勘忍袋の緒を切つて、恐ろしい目付で、直記を、睨みつけた。
「拙者の申す事が、足下の氣に適らぬ、といふのか」

「いや、氣に適るも、適らぬもない。奇怪千萬な事を仰せられるから、それに對しての返答を、求めるのぢや」

「何が、奇怪千萬か。有體にいへば、足下などは、犬畜生より甚いのぢや。そりや、飯山先生が仰せられた通り、足
下が、犬畜生同様な振舞をした、といふ事は、拙者も、認めて居るのだ。それが何とした、といふのか」

渡邊は、腹に据ゑかねて、言葉もあらく、斯う言ひ放つた。今は、直記も、退くにひかれぬ。
 「こりや、面白い。叔父上許りてなく、渡邊先生までが、犬畜生と、いはれる以上、よく／＼拙者は、犬畜生に、劣つて居るのぢやらう。然る上は、猶更に、其次第を、承つて置かなければ、ならぬ」
 「その次第は、いふまでもない。自分の胸に、手を置いて、考へて見さつしやい。すべて、世間の人が、悪事を働く時分に、それを善事と思ふて、爲るものはない。悪事と思ひながらも、心のねぢけたまゝ、改める事が出来ずに、爲るものぢや。足下も其通りで、悪いと知りつゝ、仕て居り乍ら、たま／＼人に咎められたればとて、彼是争ふまての事は、あるまい」
 渡邊が、思ひきつて、やりつけた。此一言に、カツと逆上た。直記は、膝立直し、押取刀で、渡邊に迫つた。之を見ると、渡邊は、カラ／＼と打笑つて、
 「何をする。拙者に、切つてかゝらう、といたすのか。刀を取つて、膝立直す以上は、勝負仕やう、といふのか。口賢く、争ふ事は不得手ぢやが、腕づくならば、負けぬぞ」
 直記は、體格も堂々として、腕力も強かつた。劍術も、評判されるほど、巧手に使つたが、渡邊の前へ出ては、逆も仕様がななのだ。併し、氣の勝つて居る、男であるから、ジリ／＼と、膝をすゝめて、何か言はう、とすると、渡邊が抑へて、
 「マア、何も言はずに、歸らつしやい。今日の事に、意趣遣恨を扱むなら、何時でも對手になるから、名乗りかけて來さつしやい。逃げかくれば、いたさぬ。今、怒しい、手出しをしては、却て足下の、身分に障らう。此場は、速に引取らつしやい」

伴れて行つた。

一一一

後には、飯山と昇が、互に顔を見合せて、暫時は言葉もなかつたが、飯山は、幾度か太息を吐いて、
 「さて、渡邊氏、困つた事が出来た。拙者の親戚から、那アいふ不心得な奴が出る、といふのも、平生の教訓が、足りねばこそぢや。汗顔の至りてござる」
 「イヤ、何ういふ立派な人の親戚でも、那アいふ性質の者は、一人や二人は御座る。ぢやが、困つたものだ」
 「而て、最前の御書面に依れば、何かお話しがある、といふ。そりや、何ういふ事か」
 「他にもないが、明日の夕方から、山田の瀧で、針尾重役を初め、四五の同志が打寄つて、今後の事を、決めて置きたいといふのぢや。が、それに就ては、是非とも、先生に、御列席を願ひたい、といふのぢや。尤も、此會合は、極めて祕密に致すので、自分が主唱致して、然う決つたのぢやから、先生の御出席を願ひたいが、御都合は、何うあらうか」
 「別に異存のあるべき譯はない。慥かに罷り出る事に、いたさう」
 渡邊は、聲をひそめて、
 「聞き及ぶ所によれば、例の富永の一派が、何か穩かならぬ、企てをして居る、といふ。只今の直記殿の振舞といひ旁々、滿更に風説ばかりとも思へぬ。夫等に對する、充分の準備も、いたさなければなるまい。殊に、今日の成行から、考へて見れば、藩論の大勢も、佐幕に傾きさうな、誠に心がかりの事ばかりで御座る。實は、此度、長州藩の桂小五郎殿が、薩州藩へ、毛利侯の御名代として、使者に立たれた。それに就て、暫時、長崎に、足を留めて、兵器の買入れをいたされるが、其周旋方を、拙者へ、御依頼になつて居るゆゑ、拙者に於ても、盡せるだけの事は

いたさなければならぬ、と思ふ。それを幸ひに、都合に依つては、當藩へも、御立寄を願ふ所存ぢやが、先生のお考へは、どうであらうか」

「そりや、極めての妙策ぢや。桂先生は、なか／＼人を説く事に、妙を得て居られる、と聞及ぶ。殊に、長い間、京大阪の間を往來して、天下の事情にも、通じて居られる。加ふるに、毛利といふ大藩を、負ふて居る事であるから出来る事なれば、藩侯へも、紹介せする事に、致したい」

先生が、夫までに進んでのお考へなれば、桂先生にも、お話し申す事にいたさう。左様、お含み置きを、願ひたい」

「よろしい。承知した」
「針尾重役にも、自分よりお話し申す事にいたさう」
「何分、お願ひ申す」

其日の相談は、それで終つて、夜のふけるまで、渡邊は、酒を呑んで歸つた。

翌日は、夕方から、西大村の、山田の瀧といふ所へ、勤王派の有志が、集まる事になつた。此會合は、渡邊の主唱で、催される事になつたのである。一日と、富永の一派が、羽振を利かして、殊には、不義の財を積んであるから、今といふ運動費も、充分であるし、追々、藩の若武士などを引入れて、存外、佐幕派の根柢も堅くなつたので、それを突崩して、富永派を排斥するには、どうしたら可からうか、といふ、對策を練る爲に、集まつて来たのであるが、其晩の會合では、別に之といふて、纏まつた事もなかつた。只何所までも、味方を募つて、大村藩は、勤王の大義を唱へて進まう、といふ事に申合せ、尙ほ、針尾から、藩主にも申上げる、といふ事になつて、散會したのである。

山田の瀧に、針尾や、飯山の一派が、集まつて居る、といふ事が判つたので、佐幕派の方でも、大分騒ぎ出して、彼所、此所に、集會を催して、夫に對する、相當の對抗策をとらう、といふ事になつた。けれども、才智のすぐれて居る、富永が、ジツと、それを押へつけて、何事もさせなかつた。若し、富永が、押へなかつたならば、或一二の者は、

同志を、集めて、山田の瀧へ、襲撃を試みやう、としたのであるが、然ういふ事にも、なつた日には、藩を擧げての騒ぎになるから、富永が、之を壓へたのだ。悪い奴ではあつたが、普通の者よりは、何處か、すぐれた所があつたに違ひない。

其晩の事であるが、意外の凶變が起きた。富永は、同志と共に、會合を催して、夜遅くなつてから、邸へ歸つて来て、眠に就いた。所が、木茅も眠る、といふ丑滿の頃になつて、家内の者が、寢静まつて居る、奥座敷の雨戸を押開けて、闖入した、二人の武士がある。覆面をして居るから、誰といふ事は判らないが、富永の寢所に、跳り込んで、一太刀浴せた。ぐつすり、寢込んで居た所へ、一太刀浴せられたから、富永は、驚いて眼をさまし、飛び起きやうとすると、又一太刀、遂に急所の二太刀で、富永は、其處へ倒れた。倒れた上に跨つて、止めの一刀まで、易々と刺して、何處ともなく、逃げて了つた。

此物音に、家内の者が眼をさまして、それから騒ぎになつた。一同が、奥座敷へ、来て見ると、主人の富永は、敢なき最期を遂げて、此世の人ではなかつた。急報を得て、親戚も駆けつける。夜を徹しての混雜だ。凶漢の行方を探したが、更に手掛りもなく、富永は、大死同様な事に、なつて了つたが、其一味の方では、どうしても、飯山の一派がやつたものである、といふ事に決つて了つて、飯山一派に對する、反感は、一層甚だしくなつて來た。

一一一

人を暗殺する、といふ事は、如何なる場合に於ても、可いとは謂へない。併しながら、舊幕時代には、殆んど常習の如くに、それが行はれて居た。富永を殺したのは、無論、勤王派の一人であつたに違ひない。けれども、飯山が、煽動したものではなく、全く下手人が、自分の考へから、行つたものである、といふ事は、今日に至るまで、飯山が煽動した、といふ證據は、一つも擧げられないから、然う見る外はないのである。けれども、佐幕派の方から考へれば、

どうしても、飯山が煽動したものと思ふのは、或は無理でなかつたかも知れない。殊に、其晩は、例の山田の瀧に於て、飯山一派の人が、集會して居たのであるから、其集會と、此暗殺は、何となく連絡のあつたやうにも思はれたのも、止むを得ない。佐幕派の方にも、却々強いのが居たのだから、従つて、飯山一派に對して、此復讐をしなればならぬ、といふ議論が、日に増し、熾んになつて来た。

飯山の年齢、僅かに二十四五で、五教館の學頭を、勤めた上に、近習頭といふ、破格の登庸をされて、居たのは、慥かに普通の武士と、異なつた所はあつた。殊に、之が御譜代といふのではなく、只一時の召抱へて、新しい家來として、之までの信任を得た、といふのは、藩侯に於ても、餘程見所があつたればこそ、然う仕たのだらう。學問もあるし、見識もあるが、併し、未だ年齢が若い。燃ゆるが如き情を抑へて、徐かに進んで行く、といふやうな、巧手な事は、如何に偉い人でも、血氣の時代には、却々可能する事ではない。西郷隆盛は、一代の偉人で、那れ丈けに、立派な人であり、維新の大業も、殆んど半ば以上は、西郷の手に依つて、成されたのであるが、それでも、僧月照と、薩摩の瀬戸に、身を投げるまでの、西郷は、まだ元氣の横溢した時代で、只だ熱烈なる、勤王愛國の志士である、といふ事は認められたが、遠大の見識を以た、日本の大勢を左右する、といふ迄には、なつて居なかつた。然るに、月照と、投身した事件で、大島に流されて、歸つて来てからの、西郷は、全く前の西郷と異つて、年齢の割合に、老熟し切つて、大きい人物になつて居たのである。それと同じ事で、誰にしても、年齢の若い、元氣な時代には、其鋒を裏んで、巧に人を懐柔して行く、といふ事は、出来ないものだ。

飯山とても、同じ事で、其一事に於ては、頗る遺憾に、思はれる點はあつたが、其代り、家老の針尾九左衛門が、ついて居て、飯山の足らざる處を、補ふて居たので、自然と、勤王派一味の團結が、能く出来て居たのである。佐幕派の方から、之を見ると、針尾と、飯山と、相談の上で、すべての事を行ふ、といふのが、如何にも、嫉ましくて堪らない。又、此二人を、倒してしまへば、勤王派の勢力は、一時に挫折する、といふ見込もあるし、旁々、富永の暗殺に

對する、復讐の怨みも含まれて、彌よ此二人を、亡き者に仕やう、といふ、計畫は、出来たのであつた。此恐ろしい計畫が、着々、進んで行く事は、二人の方では、更に知らなかつた。佐幕派の者が、殺伐な事を、企てて居る位の事は、知つても居たが、併し、今、眼の前、自分等二人に對する、暗殺の計畫が、充分に運びが、ついて居る、といふ事は、覺る事が出来なかつた。狙ふ方には油斷はないが、狙はれる方には、どう用心して居ても、何處かに油斷のあるものだ。斯ういふ風に、計畫が、進んで来ると、二人は、何時か、佐幕派の毒刃に墮るべき、不幸の運命に、沈んで居たのである。

慶應三年の正月三日には、城内に於て、謠初の式があるので、恒例に依つて、藩侯も、其席に臨ませられるのだ。何れの藩でも、同じ事だが、其頃には、却々、謠が盛んで、謠丈けて高祿を、頂いて居るものもあつた。其趣味を、有つて居なければ、狼の遠吠のやうで變なものだが、若し、謠の趣味を、有つて聞くと、此位上品な、面白いものはない。初めは、藩侯が、其席に居られるから、各自、遠慮もして居たが、式の謠が済んで了ふと、藩侯は、席を外されたから、其跡は、御酒下されになる。笑ひ興じて、各自、得意の謠で、時を過した。飯山も、十二分に御馳走になつて、城を退る事に、なつたのだが、此時は、既う夜の九つ過に、なつて居た。

かねて待受けて居た、下男に、提灯を持たせて、別に若徒が、一人従いて、飯山は、酔歩躑躅として、人通の全く絶えた、屋敷町を、足元危く、やつて来る。自分の邸の門が見える位の所まで、やつて来た。最前から、物蔭に躲れて、飯山の歸途を、待受けて居た。一人の兇漢は、身輕の扮装に覆面して、櫻十字に綾どり、太刀の櫛に手をかけ息を凝して、構へて居る。それとも知らず、神ならぬ身の、飯山は、充分に酒の酔もあつたし、醉眼にも、自分の邸が見えたので、幾分か、心に緩みが出たので、一層醉を發して、足を千鳥に、邸へ近付いた。

諺にもある通り、暗夜の礫は、防ぎ難し、といふ。如何なる、剣術の名手でも、闇の中で、不意に斬りかけられる、刃は受けられない。それは油断である。といへば、それまでの事だが、併し、大概は受けられないものだ。假令、充分の用意があつて、一度は、それを避け得るにしても、身に微傷でも受けず、敵を走らせる、といふやうな事は、容易な事ではない。演劇や講談には、太刀風三寸にして、身を轉して、對手を手玉のやうに、とつて投げ付ける、といふやうな事もあるが、實地では、然うは行かない。況して、酒の酔が、充分に廻つて居て、自分の家が、眼の前に見える、といふ、心の油断はある。然ういふ場合に、腕前のある者に、不意に斬付けられれば、大概は斃されるものだ。充分に狙ひ澄まして居た、兇漢は、聲音を潜めて、物蔭から、ヌツと現はれた。飯山の後から、従いて来た、若徒は、先に駆ぬけて、邸の前へ停つた。飯山の歸りを、知らせる爲である。

「ヤツ」

と、聲がかゝると共に、二尺五六寸の大刀、抜打さまに、飯山の右の肩先から、斜に斬り下げた。不意の重傷に堪らず、

「呀」

と叫んで、飯山は倒れた。併し、氣性の普通すぐれた、飯山の事であるから、此重傷を負ひ乍らも、刀の欄に手をかけて、立上らうとした。途端に、一と足踏込んだ、兇漢は、眞向から割付けた。

「ヤツ、貴様は、直記……」

と、叫ぶを聞きも敢ず、亦一太刀、其内に若徒や下僕が、騒が出したから、兇漢は、止めを刺すの暇なくして、暗を幸ひと、何れへか逃げて了つた。

飯山の家から、人が出て来る。附近の人も、出て来て、これから大騒ぎになつた。兎に角、全身、血に染んで、倒れて居る、飯山を、邸に擔ぎ入れた。父の杏哲が、交際つて居た、醫者も多くあるので、殆んど城下に居る、名醫と

いはれた者は、皆集まつて来たが、何しろ二ヶ所の重傷に、治療も届かず、一時餘りて、息は絶えてしまつた。

話頭一轉、城内に居つた、藩士も、飯山と前後して、邸へ歸る。其内に、渡邊昇も居たのだ。江戸の齋藤塾で、充分に鍛へ上げて、腕前のすぐれた、渡邊は、斯る間にも油断はなく、兄の清左衛門と共に、邸をさして、急いで来る。途中を待受けた、佐幕派の兇漢五六人が、一時に、暗を破つて現はれ、斬つてかゝつた。併し、渡邊は、其用意があつたので、最初に斬付けた、一刀を引外して、流れて来る手先を、手刀で打つたから、大刀を、ポロリと落した。昇は踏込んで、一と當、當てたから、ウムと、脾胃を押へて、倒れた。續いて斬込んで来るのを、行違はして置いて、早くも取出した、短銃、引鐵に指がかゝつて、ズドンと、一發放した。最初の一太刀を、過つたのみならず、筒音を聞いたから、餘の者は、蜘蛛の子を散らすやうに、逃げて了つた。脇腹を當てられて、倒れたものも、痛さを味へて、駆出したが、渡邊兄弟は、逐はなかつた。其處に、修行の效が、現はれて居たので、之を逐駆れば、何様なものが出来て来て、途中で、何ういふ目に逢ふかも知れぬ。詮護を後にして、逃げて行くものを逐はぬ、といふ所に、味ひがある。

「兄上」

「オ、昇か」

「お怪我は、御座いませぬか」

「拙者は、何事もなかつたが、汝は、何うぢや」

「何の、微傷一つ負ひませぬ」

「それは、何よりの事であつた」

「併し、此様子では、飯山の身の上こそ、氣遣はれる。拙者は、之より鳥渡、様子を見に行つて参ります」

「ウム、そりや、然う仕たが可からう。然し、途中は、氣を付けて……」

「御心配には及びませぬ」
 渡邊は駈足になつて、飯山の邸へ、駈付けた。此時は、既に飯山は、邸の中へ擔ぎ込まれた時であつた。今、一時前までは、城内で同じやうに、酒酌交して居た、飯山が、變つた姿になつて、倒れて居るのを見ると、鬼のやうに言はれた、昇であるが、早や先立つものは、泪ばかりである。
 「残念な事をいたしました。斯ういふ事と知つたら、拙者が隨いて、送つて參るのであつたが、之が所謂、油断といふものだ。返すくも、惜しい事をした」
 と、自分の身に、危い事のあつたのは忘れて、昇は、飯山の災害を、悲しんで居る。處へ、針尾の邸から、知らせがあつた。
 「今、途中に於て、手前方の主人が、亂暴者に取圍まれて、數ヶ所の傷を負ふて、引揚げて來た。併し、生命には別狀がないから、取敢ずお知らせをする」
 と、いふのであつた。之には、昇も、益々驚いた。飯山は、既に絆きれて居るのだから、此處に、控へて居た所で、詮のない事、兎も角、傷も浅いと聞いて、安心はしたが、針尾を見舞はう、といふので、飯山の邸を出た。昇は、偉駄天の如く、足に任せて、針尾の邸へ、駈付けた。

一五

針尾は、藩士一同が、退けた時分に、城を退がつて來た。平生から、極めて質素な、生活をして居た人であるが、兎に角、家老職といふので、夫だけの格式は、損ずる事が出来ないから、供廻りの如きも、役柄相當に備へてはあつたのだ。夜も更けて居たが、輿物にも乗らず、徒歩で、邸の近くまで、歸へつて來ると、佐幕派の一團が、襲ひかゝつて來た。針尾には、供廻りの者も、充分にあるから、といふので、夫に對するだけに、相當の人数を揃へて、向つて來

たのであるから、渡邊や、松林の場合と異つて、其斬合は、却々激しかった。不意を打たれたので、針尾は、二三ヶ所の傷を負ふた。家來も、血だらけになつて、奮闘した效があつて、僅かに兇漢を逐拂ふて、針尾は、虎口を脱れる事が、可能たのである。最少し追詰めて切込めば、針尾を、殲す事が出來たのであるが、兇漢の方では、時刻の移るのを怖れて、幾分か、焦り氣味があり、充分の奮闘は、出來なかつた爲に、折角、傷は負はせながらも、針尾の命まで、奪る事は、出來なかつたのだ。

城内で、殿様の御酒下されに、氣を緩めて、飲んだ爲に、酒が、充分に廻つて居たから、出血が甚だしい。針尾の邸からも、應援の家臣が、出て來て、兎に角、主人を、邸の中へ、送り込んだが、傷の治療は、早く仕ない、と、出血の爲に、癒れる事もあるの、すぐに醫者を迎へて、治療にかゝつた。藩廳へも、事變を届けたから、殿様の御沙汰が下つて、相當の役目の人が、見舞に來る。親戚知人なども、多く來て、邸の中は、湧返るやうな騒ぎになつた。處へ、渡邊昇が、駈付けて來て、針尾が、寢て居る處へ、案内された。

「えらい御災難でござつたが、今、醫者のいふ所に依れば存外、傷は浅く、殊に、急所を避けて居る、といふ事であるから、御心配はござるまいが、猶、充分の御治療をなされて、一日も早く御本復の儀を、祈り上げます」
 「いや、早速の御見舞ひで、辱ない。卑怯千萬にも、途中に待伏して、闇打を仕掛けるとは、返すくも、奇怪千萬な事ぢや」

「而て、亂暴者のお見込は、つきましたか」

「何しろ、咄嗟の事として、殆んど人を識別する事も、出來ぬ位であつたゆゑ、其何人であるか、といふ事は、固より判らぬ、別に之といふ證據も、ないのぢやから、誰の所爲とも、知る事を得ないが、何れ渠等の所爲と、いふ事丈けは、想像もつくのぢや」

と、話して居る中にも、渡邊は、針尾の呼吸から、切ての容姿を見て居る。松林飯山が殺された、といふ事を、話し

て可いか、悪いか、針尾の容態に依つては、話さずに行かう、といふ考へて、凝乎と、其容態に注意して居たのだ。然るに、存外、容態も良いやうであるで、呼吸から考へても、さまでの重傷では、ないやうにも考へられた。

「今宵の凶變は、餘程、深く謀まれたに違ひない。其證據には、暗撃に遭ふたものは、貴殿ばかりではなく、他にもござつた」

「えつ、拙者ばかりでなく、他にも、暗撃をされたものがあるとは、そ、そ、そりや、誰ぢや」

「實は、拙者も、危い目に遭つたのでござる」

「ハ、ア、足下も……而て、別に怪我はなさなかつたか」

「いや、幸ひに弱い奴ばかりで、微傷だも負はず、曲者は、悉く逐ひ散らしました」

「それは何よりの事ぢや。餘人と異つて、足下は、腕前が、勝れて居られるゆゑ、普通大體の事では、足下に、傷をつける事は、なるまい」

「闇中、不意にかゝられては、如何に平生、修行して居ても、容易に防ぐ事は、出来ませぬ。只、天運に依つて、免かれたまでの事で御座る」

針尾は、少し考へて居たが、

「拙者といひ、足下といひ、斯うも二人までが、揃ふて災難に出遭ふ、といふ以上、飯山の身の上、思ひ遣られる。斯様な場合、第一に、駈付けて來なければならぬ筈ぢやが、まだ、飯山の姿が見えぬのは、心がかりぢや」

「飯山も、實は斬られましたぞ」

「ウム、飯山も……而て、何ういふ答子であつたか、御存じないか」

「只今、飯山の邸に參つて、これから、此方へ駈付けて來た所で、御座る」

「ウム、然らば、飯山の模様は、見て御座つたか」

「左様」

針尾は、自分の苦痛は忘れて、蒲團から、乗出さんばかりになつた。

「何様な、模様で御座つた」

昇は、俄かに恐れ返つて、

「誠に残念な事を、いたした」

「さては、飯山は、倒されたか」

「如何にも、二ヶ所の重傷に、治療の效なく、拙者が、駈付けた時には、既に息の絶えた所で、御座つた」

「残念な事をした。年齒は若い、那程の人物は、永く藩侯の、左右に置いて、我が藩の爲に、技倆を振はせたかつたが、今は、それも徒となつて、可惜、大村藩の名物を、失つた事が、儘になるなら、我等が代つて、飯山は、殘して置きたかつた。今更言ふも、愚痴のやうぢやが、返すくも、佐幕派の奴輩……」

暫くは、悲憤の泪に、聲も澁り、咽喉もつまつて、只默然として、飯山の邸の方に向つて、その不遇の最後を、呶ばかりであつた。

一六

昔の武士は、戰場に出た時ばかり、武士の心得があつても、平生に、武士としての嗜みがなければ、價値はないものとされてあつた。武藝十八般は、申すまでもなく、文事も、一通りは心得て居なければならぬが、併し、其文武の技ばかりが出来ても、心得の足らぬものは、仍且武士として一人前の通用は、出来ないのである。其點になると、普通の人でも、同じ事で、平生に於ての修養が、充分に積んで居れば、いざ、事が起きた、といふ時でも、決して狼狽するやうな事はない。不意の出來事に狼狽するのは、平生の修養が、つんで居ない證據であつて、語り、臆玉が、

据つて居ないから、然ういふ事に、なるのである。町人や百姓に、其油断はあつても、さまたに、非難も受けず、又、其價值にも、關係はしないが、倘し、大小を手扱む、武士といふ事になれば、然うした不覺な事では、世間で許さない。

武士として、一番に注意すべき事は、如何なる場合にも、油断をせぬ、といふ事である。諺にも、心得のある武士は、響の音にも、眼をさます、とか、霜降る音にも、氣をつける、とかいふてある位で、其處に、武士の價值は、あつたのだ。然れば、如何なる不意を襲はれて、鬨討に出遭つた場合でも、必ず刀の柄に、手をかけて居なければならぬ、といふのが、武士の作法であつた。假令、抜合さず倒れても、鯉口三寸、寛げて居れば、知行の半分だけは、相續人に與れたものである。平生、何様なに偉い人でも、鬨討に遭ふて、刀に手をかけず、兩手を擴げて、口をあい、死んで居る、といふやうな、不體裁のものでは、知行を没收された上、遺族は、城下から逐拂はれて了ふ、といふやうな、嚴重な處分を、受けたものだ。其處が、武士と町人の、區別のある所で、自然と、武士が、町人を輕んずる、といふのも、斯うした習慣の下に、身を立て居たからである。

飯山が、倒された時も、刀の柄に、手をかけて居た。只、最初の一刀が、重傷であつた爲に、抜合す氣力はなかつたのだが、固より心得のある、武士として、斯る咄嗟の間も、武士としての心得は、充分にあつたから、死んでの後の面目は、汚さないのであつた。

五教館の、生徒の中にも、多少は、佐幕派があつたけれども、飯山の教へを聞いて、勤王の志を、懐いて居たものが、多くあつたから、それ等のものは、飯山の遭難と聞いて、何れも押掛けて来て、口々に、佐幕派を罵りつて、斯る卑怯な、刃の下に倒れた、飯山先生の死を、悼むのであつた。斯る混雜の間にも、妻のおこまは、少しも動ずる様子もなく、見舞に来る人々に向つて、挨拶をして居る。其様子に、少しも亂れた所がない。針尾の邸から一旦引揚げた、渡邊は、兄弟揃ふて、再び飯山の邸を訪ねた。殊に昇の方は、平生から、飯山との親しみも深かつただけに、お

こまも、他の人と同じやうには、扱はなかつた。

「度々、御見舞下さいまして、有難う存じます」

「此度の凶變に就ては、何とも申上げやうもない。洵に悼ましい事で、定めし御無念で御座りませうが、何れ此仇は、我等に於て、報ゆる意で御座りますから、貴女は、何事も仰せられず、自然の成行に任せる、といふやうに、なされるのが、却てお爲と、心得まする」

「種々と、御心配に預りました、有難う存じます。妾は、女子の身でありますから、事の成行も、深くは承知いたさず、良人の最期に、つきましても、何誰を怨む、といふ次第も、御座いませぬから、其儀につきましては、御安心下さりませ」

昇は、少しく膝をすゝめて、聲を潜めた。

「昨夜、飯山先生のお供を致して居つた、御家來の中で、何か、後日の證據となるべき、事を認めた、といふやうな事は、お聞きになりませぬか」

「ハイ、夫に就ては、何事も聞きませぬ」

「フ、ム、些、自分の胸に、思ひ當る事もありますれば、昨夜、お供をいたした、御家來と、別室に於て、お話しした度く考へますが、お許し下さいますまいか」

「それは、御自由で御座いますから、如何やうとも、遊ばして下さいますし」

「然らば、チト立入つた、次第では御座るが、鳥渡、御免を被る」

之から、其席を立上つて、昇は、別室へ移つて、昨夜、飯山の供をした、家臣を、二人招んで、代るく、其時の様子を、聞き糺して見る、と、意外な事が、判つた。後から隨つて来た、若徒が、先に駆ぬけて、門前へ佇つた途端に、ヤツといふ、氣合の聲がした、と思ふと、直記か、といふ主人の聲を聞いた、といふ事を、判然答へたのだ。

「ウム、飯山先生が、一刀、浴せられた時に、直記と、叫ばれたか」
 「ハイ、慥かに聞きました」
 「原來は、那の時の事を、根にもつて、畜生にも劣つた此所爲、許し難きは、直記の奴……」
 「思はず、齒を噬り、腕を扼したが、心を取直して、」
 「いや、能く相解つた。其事は、決して他言してはならぬぞ。確と憤んで、人に語つて呉れるな」
 「へい、そりや、モウ話すなど、仰しやれば申しませぬ」
 「猶ほ聞いて置きたいが、扱合はさぬまでも、汝達は、曲者の姿を見たか」
 「そりや、慥かに見届けました」
 「上背のある、骨格の逞ましい、一廉の武士と、見たか」
 「へい、そりや、モウ背丈の高い、立派なお方で、御座いました」
 「此物語に依つて、彌上直記が、叔父甥の間柄であるにも拘らず、過日の事を含み、且つは、富永快左衛門に與して飯山の言ふた通り、犬畜生にも、等しい心から、飯山を、闇討した、といふ事は、先づ判然した。昇は胸の中で、直記を、其儘に置く事は出来ない、と決て了つたが、茲に一つ困るのは、直記が、飯山の妻の、血縁の者である、といふ、一事であつた。」

一七

直記が、心の善くないものである、といふ事は、おこまも、能く知つて居たから、良人の飯山にも、時折は頼んで直記に、異見して貰ふやうに、仕て居たのである。此頃の飯山と、直記の諍ひに就ても、一方ならず、胸は痛めたのだが、併し、品行上の事ではなく、勤王とか、佐幕とかいふ事に、關係しての議論が原因であつたから、女子の身と似寄りの事を、人が聴かせても、信するまでにはならなかつたのだ。

飯山は、藩主の寵愛も深く、敢て譜代の臣と、いふでもないのに、他で羨むほどに、重く用ひたのであるから、今、其人が、非業の最期を遂げた、といふ事を聞いては、藩主としては、甚だ快くない。飯山一家に對する、情は深くなるばかりであつた。然れば、藩主の名代として、重役が一人、其靈柩の前で、藩主から下された、有難い御沙汰を、傳へた位である。葬儀萬端の事は、針尾と、渡邊の二人が引受けて、親身も及ばぬ程の、世話をした。五教館の生徒は、一同詰掛けて、會葬者に對する、應接其他の事で、骨身も惜まず、働いて呉れた。

其内には、例の直記も立交つて、如何にも、殊勝氣に、駈廻つて居た。それを見た、會葬者は、平生に於てこそ、直記が、飯山を罵つて、荐りに悪い事を言觸して歩いたが、今日の様子を見れば、流石に、叔父甥の縁に、繋がつて居るだけ、斯ういふ時には、人の心が、眞に歸つて、那程の世話も出来るのであらう、と、直記についての噂は、悪くなかつた。渡邊昇は、直記が、立働らくのを見て居ながら、心の中で、さても憎むべきは、此奴である。自分が、手に懸けて、大逆の行ひを仕ながら、葬儀に參列して、眞しやかな振舞を、故意とらしく、見せ付ける、といふのは如何にも、其心さまの、歪んで居る奴である、と思ひながらも、程よく扱らふて、込み上げて来る、疝癩の虫を、グツと、押へて居た。

して、左様な事にまで、嘴を容れるのは、良くない、と思つて、それには觸れなかつたのだ。只、長上の人に向つて口答へをするのは、失禮であるから、其點だけは、直記を戒めたのだが、豈夫、斯ういふ事から、直記が、飯山を、亡き者に仕やう、といふ、非道い決心がついたとは、思はなかつたのである。従つて、飯山の死は、全く佐幕派の、人達の仕た事に違ひない、とのみ考へて居た。直記が、手を下した、といふやうな事は、固より思ふて居らず、それに似寄りの事を、人が聴かせても、信するまでにはならなかつたのだ。

飯山は、藩主の寵愛も深く、敢て譜代の臣と、いふでもないのに、他で羨むほどに、重く用ひたのであるから、今、其人が、非業の最期を遂げた、といふ事を聞いては、藩主としては、甚だ快くない。飯山一家に對する、情は深くなるばかりであつた。然れば、藩主の名代として、重役が一人、其靈柩の前で、藩主から下された、有難い御沙汰を、傳へた位である。葬儀萬端の事は、針尾と、渡邊の二人が引受けて、親身も及ばぬ程の、世話をした。五教館の生徒は、一同詰掛けて、會葬者に對する、應接其他の事で、骨身も惜まず、働いて呉れた。

其内には、例の直記も立交つて、如何にも、殊勝氣に、駈廻つて居た。それを見た、會葬者は、平生に於てこそ、直記が、飯山を罵つて、荐りに悪い事を言觸して歩いたが、今日の様子を見れば、流石に、叔父甥の縁に、繋がつて居るだけ、斯ういふ時には、人の心が、眞に歸つて、那程の世話も出来るのであらう、と、直記についての噂は、悪くなかつた。渡邊昇は、直記が、立働らくのを見て居ながら、心の中で、さても憎むべきは、此奴である。自分が、手に懸けて、大逆の行ひを仕ながら、葬儀に參列して、眞しやかな振舞を、故意とらしく、見せ付ける、といふのは如何にも、其心さまの、歪んで居る奴である、と思ひながらも、程よく扱らふて、込み上げて来る、疝癩の虫を、グツと、押へて居た。

葬儀も、式の如く終り、初七日も済んだ。飯山の教を受けて、其人格に、服して居た、門人や、藩士の間には、よりよりの集會が催されて、假令、場所こそ異へ、同じ藩中の、針尾、渡邊、松林と、揃ひも揃つて、三人が、同じ晩

に襲撃を受けたのは、慥かに佐幕派の連中が、やつた事に違ひない。針尾の傷は、漸く全快に向ふし、渡邊は、微傷だに受けなかつたが、飯山先生を倒された憾みは忘れる事が、出来ない。又、此儘に、手を空しく打過ぎる、といふのは、我々、勤王派に、人らしいものが、ないやうに思はれて、今後、佐幕派に對する對抗上、甚だ面白くない、といふ説もあつて、何でも、此際に、一大決心を以て、佐幕派を、一掃して了はなければならぬ、といふやうな、議論が漸次、擴がつて來た。それが、渡邊の耳にも、入つたが、佐幕派の方へも洩れたものか、俄に集會を催して、勤王派に、對抗すべく、種々の策を講ずるやうになつた。兩派の衝突は、何時起るか、全く判らない、といふ状況になつて來た。

今日も、渡邊は、針尾の傷見舞に行かう、といふので、身仕度を調べて居た。所へ、門人の一人が、忙しうに入つて來て、

「先生」

「オ、何ぢや」

「只今、五教館の有志が、急に御目にかゝりたい、といふて、參りましたが、何といたしませうか」

「今、用掛けやう、とする所だが、會はぬ譯にも行くまい。此方へ、通しなさい」

「ハイ」

暫くして一同は、渡邊の前へ、ズラリと列んだ。

「ヤア、大勢揃ふて、何か起つたかな」

「折入つて、先生に、御相談を申上げたい事があつて、參りました」

「ハ、ア、何ういふ事か」

「他の事でも御座りませぬが、飯出先生の事に就て、申上げ度いので、御座います」

「ウム、それが何としたか」

「漸々と、探つて見ます、と、慥かに佐幕派の者が、やつた事は、明らかに判りました。其手を下した者も、大方は、公儀へ對しても、相濟まぬ。又、他藩の聞えも、如何あらうか。飯山を、害した者は、藩の法に據つて、夫々處罰の方法もある。各自が、私の制裁を下す、といふのは、宜しくない。此一事に就ては、拙者に於ても、多少、考へも御座るから、暫く任せて置いて貰ひたい」

「先生の仰せでは御座いますが、既に我々にさへそれと相判つて居ります事を、藩の重役や、係りの者が、更に知らぬ、といふのも、不思議な次第で、御座います。之に依つて考へまするに、恐らく重役の中にも、渠等に與して居るものが、あるのではなからうか、とも思はれます。さすれば、順當を以て、願つて出る、といひましたも、先方には、防ぐべき手段もありませう。此上は、他に道はありません。只だ我々が、一身を犠牲にして、目差す者共を、倒して了へば、其後の事は、先生初め、先輩の方々が、始末もつけて下さらう、と存じて、我々は、深く決心いたし、一同に、誓を立て、此處まで參りました。是非、我々の希望通り、復讐の儀、お許しを願ひたい」

「其覺悟は、實に立派なもので、飯山先生も、地下に於て各々のお志を、嬉しく思ふであらうが、然ればとて、藩の御爲にならぬ事は致されぬから、是非、此度の事は、拙者に、任せて貰ひたい」

有志一同は、脊りに焦つて迫るが、鼻は、之を鎮撫する爲に、言葉を盡し、理を説いて、宥めるばかりであつた。

平生は、能く渡邊に服して、飯山に對する、と同様に、敬意を拂つて居たのだが、此日に限つては、一同も、覺悟して來たのであるから、却々、渡邊が、宥めるのを肯かない。宥めれば宥めるほど、一同が憤激して、果は、渡邊が卑怯な考へから、事を、穩かに治めやう、として、斯ういふ事を、いふのだらう、と、渡邊に、詰寄せる者もあつた。「我々は、渡邊先生は、初めから飯山先生とは、刎頭の交はりがあつて、殊に勤王の志に於ては、相許して居られるものと、深く信じて居りました。飯山先生が、那のやうな、最期を遂げられて、藩侯ですら、其死を惜まれるの餘り、重役を差向けられて、靈前に、御沙汰を傳へられた程であるのに、先生が去つてから、十日餘りにも相成つて、まだ、其下手人が、押へられぬなどいふのは、他藩へ聞えても、甚だ外聞の悪い事で御座る。然るに、我々が、既に其證據を握つて、渠等に對し、復讐をいたさう、とするのを、先生が、強て之を止められるといふのは、其意を得ませぬ。何か他に深い仔細が、あるので御座るか。それともに、渠等に、及ばぬ、といふ卑怯なお考へから、左様仰せられるのか。其點を伺へば、我々は、直に此場を、退く考へてございます」といふて、喧嘩仕掛けになつて、渡邊を語るやうに、いふ者もある。強く迫られるほど、軽く受流して、渡邊の態度は、どこ迄も、冷静であつた。

「各々の心配される如く、拙者に於ては、決して、卑怯な考へはない。又、渠等が、幾十人居ればとて、豈夫に、渡邊の邊身として、卑怯な振舞も致されぬ、が併し、悠る事に就ては、前後の分別が、第一に必要である。我藩は、極めての小藩こそあれ、動ともすれば、勤王論に傾く、といふので、長崎奉行などは、鶴の目、鷹の目で、我藩の一舉一動を、窺つて居る。此際に、若し藩士が、互ひに相争ふて、其内情の一端でも、奉行の爲に、探り知られ、幕府へ對して、針小棒大の報告をされたならば、それこそ、藩の興廢にも係する一大事にならう。只、飯山の復讐を

して、佐幕の一行を、討つて了へば可い、といふものではない。其事のあつた後が、何ういふ結果になるかといふ事も考へなければならぬ。身不肖乍ら、拙者も、藩の御爲には、此一身を抛つ事、足下方には、一步も譲らぬ。依つて、拙者の精神を、深くお察しあつて、此事の始末だけは、拙者に、御任せを願ひたい。之より針尾九左衛門殿方へ、罷り越して、各々の志も傳へ、今後の處置に就て、深く相談を仕て來る意ぢやから、先づ夫までは、拙者に一切を任せて、各々は、引取つて貰ひたい、と思ふが、どうであらうか」

漸々、諭されて見ると、渡邊のいふ所にも、道理はある。只一旦の勇に誇つて、無謀の事を仕ては、藩侯の、御身の上にも障る、といふのだから、遂に一同も、往生して了つた。

「左様な次第でありますなら、一時は、お任せをいたします。併し、至急御處置下さらぬ、と、我々に於ても、決心が御座るから、此事だけは、特に、申上げて置きます」

「委細心得た。此事に就ては、拙者が、お引受けをして、必ず處置をつける。先づ夫までは、靜穩にして貰ひたい」

漸くにして、有志一同は、渡邊の家を去つた。其後で、渡邊は、針尾の邸へ、やつて來た。

針尾は、先夜の襲撃で、可成りの負傷はしたが、幸ひにして、其傷は、急所をよけて居たから、生命に別條はなかつた。併し、相當に傷は大きかつたので、療治は、却々、骨が折れるのであつた。長崎からも、各醫が、やつて來て立會の上で、充分に治療を加へた。身分もあつたし、手當に等閑はなかつたから、日を経るに従つて、彌々快方に向つて來る。けれども、まだ床を離れる、といふまでにはならなかつた。

負傷の夜、渡邊が、やつて來て、飯山の死を、傳へた時には、針尾も、非常に昂奮して、これが爲に、出血が多く疲労して居る、身體に障つたものか、翌日からは、スツカリ弱つて、傷に就ては、心配ないが、疲勞の爲に、萬一の事が、ありはせぬか、といふ、醫者の心配であつた。處へ、藩侯から、お使が來て、種々と、有難い御沙汰が下つたので、幾分か、氣も引き立つた。同時に、自分からも、心を勵まし、之から先は、大村藩の爲に、一身を捧げて、働

かなければならぬ身である、といふ、覺悟がついて、見ると、飯山の死に依つて、自分は、一層、生存へて居らねばならぬ、といふ、感じも深くなつた。自分で、自分を引立てるやうにするから、その後の経過は、頗る良く、気分もすぐれて、醫者も、やうやく安心をした、といふほどになつた。所へ、渡邊が、見舞をかねて、やつて來た。

一九

針尾も、渡邊と同じやうに、飯山を斬つたのは、直記の所爲である、といふ事は、略、想像はついたのであるが、亦、思ひ直して見れば、兎に角、飯山の妻の甥に直記が、然うした無法な事は、如何に心が、拗けて居るにもせよ、豈夫、爲る氣遣はなからう、とも考へられ、自らその想像を、打消して居た。然し、暗殺の相談には、與つて居るに違ひない、といふ想像は、どうしても、打消す事が出来なかつた。而て見れば、假令、手はおろさずとも、直記の行ひは、大逆無道である事は、いふまでもない。又、此事の原因が、藩の重役の中から、起つて居る、といふ事も推定する事が出来るのだから、何れにしても、此始末をつけるには、非常な困難である、といふ事は、既に覺悟して居たのだ。

それにしても、自分の傷が、一日も早く、治つて呉れなければ、何うする事も、能ない。幸ひに、渡邊が、自分に代つて、一切の事を、取仕切つて、行つて呉れるのだから、幾分の安心は、あるやうなもの、渡邊は、然まで自分の、重いものでもなく、藩中の議論を、動かすほどの勢力は、有つて居ないので。齋藤塾で、學んだ、勝れた腕前が、光つて居るので、若い藩士の間には、深い信用を、得て居るが、それとても、昨今の事であるから、飯山ほどの力は、有つて居ないのである。那れや、是れやを、思ひ惱んで、獨、寢床の上に、煩悶して居た處へ、昇が來た、と聞いたから、針尾は、喜んで迎へた。昇は、席に着くと、すぐに話しかけた。

「如何で御座いますか、御血色は、良いやうであるが、何しろ、それほどの傷を受けられたのであるから、御静養が

専一ぢや。然し、善後の處置も、つけねばならず、又、此時勢に處して、藩の立場も、愈々重大なれば、一日も早く、御全快の儀を、祈ります」

「毎度、御見舞下されて、千萬辱ない。幸ひに傷口も、ふさがつたやうであるから、此分で過ぎたならば、遠からず、床を離れる事も、能ませう」

「今日は、折入つて、御相談したい事があつて、罷り出ました。暫くの間、お人拂ひを、願ひたい」

針尾は領いて、左右の者に、目配せをした。附添ふて居る者は、すぐに引退つて了つた。渡邊は、枕許へ、膝をすすめて、聲をひそめた。

「御相談申上げたい、といふのは、他の儀でも御座らぬ。此度の事變に就て、血氣に逸る人達は、荐りに佐幕派に對して、争ひを挑まう、といたして居り、只今も、御當家へ出がけに、五教館の生徒が、押掛けて來て、種々と、拙者に迫つた。拙者が同意をすれば、直にも事を起さう、といふやうな様子で御座つたから、實は、充分に戒めて、兎に角、此事は、拙者と針尾殿に於て、お引受いたすゆゑ、一時、お任せ下され、といふて、漸く宥めて歸したが、那の様子から考へるのに、一時も早く、何とか處置を、つけなければ、藩中に、一と騒動は、免れまい、と存する。御承知の通り、我藩に對しては、公儀に於ても、内々注意いたして居る次第であるから、倘し、藩士が、互に相争ふて、血を流すやうな事にも、相成つた日には、それこそ、藩の一大事、長崎奉行が、其配下の者に、姿を變へさせて、城下まで入込ませである、といふ事も、うすく判つて居る。此際には、たゞ貴殿の御覺悟一つで、事の納まりはつかう、と考へるが、良き御分別は御座らぬか。それを伺ひたく、罷り出ました」

「仰せの事は、御道理に思ふ、が、今俄に、此事に手をつけて、萬一、それが爲に、思はざる處まで、騒ぎの及ぶやうな事があつては、容易ならぬ大事を醸す事にもならう。殊に、重役の中に於て、拙者と、胸襟をひらき、何事に

まれ、相談をするといふやうな、同志はなく、例も、拙者は一人で、苦境に立つて居る次第であるから、假令、多少の證據は、握つて居ても、迂濶に乗出す事もなるまい、と思ふ。併し、五教館の有志が、それまでに憤慨して居る、といふのでは、一日も早く、事の處置を、つけなければなるまい。足下に、良き分別があれば、お洩し下さい」

「拙者とても、貴殿と、同じ考へを、有つて居るので御座る。一刀兩斷に、處置をつけるのは、容易い事ぢやが、それから起る紛訟も、深く考へなければならず、詰りは、痛し痒しで、奈何とも、手の下しやうが、御座らぬ。飯山を、討つた者も、目星は、ついて居る。それも、拙者一人でなく、五教館の有志も、大概は、想像が、ついて居るやうであるゆゑ、切めては、それだけでも、何とか處置を、つけなければ、血氣の人々が、何ういふ不穩の企てを、爲るやも圖り難い。依つて、拙者の思ふには、先づ、飯山を、害したる者から、處置をつけて、その跡は、徐に手をつけるのが可からう、と存するが、貴殿のお考へは、如何で御座るか」

針尾は、傷の痛みも忘れて、思はず膝をすゝめた。

「只今のお言葉の中に、飯山を、害した者は、略、相判つて居る、といはれたが、そりや、何者の所爲で御座るか。拙者に於ても、想像はつけて居るやうなもの、まだ慥とした、證據はないので、口外する事は出来ぬが、其下手人は、何者か、御明し下さい」

昇は、持つて居た、扇子で、蒲團の上に、何か文字を、書いて示した。之を見ると、針尾は、膝を打つて、

「原來は、左様で御座つたか、拙者の想像に違はず、憎みても餘りあるは、直記……」

昇は、手を擧げて、針尾が、激して、言はうとするのを制した。

父、亡き後は、叔父を以て、親とせよ、といふのが、其頃の教へであつた。直記の爲には、叔母の婿に當る飯山、而も、自分の爲には、學問の師である。その飯山に、刃を向けた、といふ事は、大逆不倫の所爲である。如何に、心の効けた者とは言ひながら、直記が、それまでの覺悟をする、といふには、亦自ら、理由が無ければならぬ。

大義名分の上から言へば、勤王論に反對する事は、勿論、間違つて居るには違ひないが、何しろ、二百五十年も、徳川の天下が續いたのであるから、自然と、徳川様有難いのは各藩の間にも、深くしみ込んで居た。然れば、勤王倒幕に、最も熱心であつた薩長二藩の中にも、一時は、佐幕の勢ひが、却々熾んで、勤王派は、屏息した事もある。漸々と、時を得て、勤王派が、頭を擡げて来るに従ひ、佐幕派の勢力は、日を逐ふて、衰へて来たのである。不思議な事には、何れの藩に於ても、佐幕の意見を、持つて居たものには、高祿を頂いて、重い役を、勤めて居た者が、多く居て、勤王の志士は、輕輩微祿の、者に、限られた如く、視られても居た。

それは語り、先祖以來、澤山の祿を頂いて、安樂に、生活て来たのは、藩侯の庇蔭でもあるが、同時に、徳川氏が、天下を治めて、太平を致した賜である、といふやうに考へて、其意味から、徳川を、何處までも庇護しやう、としたものであらう。又、一身の安を偷んで、無事の日を過ぎて居たい、といふ、卑劣な了簡も、交つて居たのであらう。衣食が足りて、藩中に、多少の權勢を、有つて居れば、それ以上の望みは、有たなかつたのであるから、どうしても、佐幕の意見に傾いて、家中に、動搖の起きぬ事を望む、といふやうな事情から、重役の多くは、何處の藩でも、佐幕の意見を、有つて居たのだらう、と思ふ。

それに反して、輕輩微祿の人になると、此儘に過ぎて行つたのでは、何日まで經つても、頭あがる時がないから、何か、天下に事あれかしと、探して居た。折柄、勤王倒幕の議論が、追々、傳はつて来たのである。又、貫つて居る、扶持米こそ少ないが、何うかして、相當の身分に、なりたいたいといふ、希望もあり、一面には、重役が、高壓的に、頭の上から、のしかゝつて来る態度に、不満をいだけ、一種の反抗心もあつて、苦しい生活の中からも、文武の二道を、

充分に修行をつんで居たのだ。その教育を、うけて居る間に、讀書の上から、興へられた刺戟が、大義名分の眼醒ともなり、それが、機會を得て、爆發仕たのが、即ち各藩に於ける、身分の輕い人達の、勤王論となつたのである。併し乍ら、切ての輕輩微祿の人が、然ういふ考へを、有つて居たのではなく、重役の權勢に、阿附賣縁して、佐幕の意見に走り、正しからぬ行ひを、仕て居るものもあつた。直記の如きは、即ち其一人であつて、幸か、不幸か、武術の嗜みもあり、腕力も強い、といふのを、見込まれて、佐幕派の重役から、重く用ひられたのに満足して、自然と、佐幕派に、流れ込んで了つたのである。従つて、飯山が、何う諭しても、説いても、直記の心の動く、道理はなかつたのだ。

恰度、飯山を倒した日の、寄合に出て居ると、荐りに飯山を斃せ、といふ事を、嗾かされた。流石に、初のうちは、拒んで居たのだが、既に一旦、邪路に、迷ひ込んで、至んだ心は、正しい道に、歸る事は難しいもので、先輩から、説き伏せられて、終に決心したのである。それでも、家に歸つて、幾度か躊躇したが、今更に、逃げもかくれもされず、同志の間に、幾分の誇りも、有ちたいといふ、つまらぬ考へから、妙な所に、瘦脰を張つて、親殺しにも等しい、大逆を、行ふ事に、なつたのである。尤も、飯山の、激しい異見が、幾分か、直記をして、反抗の心を起さしめた、といふ點も、あつたのだが、何れにしても、直記の決心は、佐幕派の先輩が、促したものである、といふのが事實である。斯て、直記は、謠初の式が終つて、飯山の歸るのを、先輩の方から、知らして來たから、時を計つて、邸の附近に待伏せ、只一刀に、斫倒して了つたのだ。不意を打たれて、飯山は、哀れ、直記の刃に罹つて、殞れたのであつた。

一一一

針尾と、渡邊が、密談をした、其晩遅くなつて、藩の御側用人を、勤めて居る、稻田東馬の邸へ、一通の封書が、

舞辻んで來た。何人が遣したのか、署名が仕てないから、無論、解らない。封を切つて見ると、其中に、別の一封があつて、添書が、ついて居た。東馬が、何心なく添書を、披いて見ると、佐幕派の、卑劣なる計畫を、無遠慮に攻撃して、

「此別封は、是非とも、足下の手より、藩侯のお手許へ、差上げて貰ひたい。若し足下が、それを怠るやうな事があれば、足下も、佐幕派の一人として、我等は、決して足下を、安穩に見通すものでない」

といふ意味の事が、認めてあつたので、東馬も、聊か驚いた。其様な事が、自分の身に、振掛つて來ては、甚だ迷惑千萬であるから、翌朝は、早く登城して、御前へ罷り出た。

大村侯は、近頃になつて、藩士の中に、不祥な出來事が、頻發するのみならず、何となく、藩中に、穩かならぬ空氣が、流れて居るやうであるから、痛く之を憂ひて、重役の者共へ、注意はするけれども、更に其效もなく、日に増し、藩の状態は、險惡になつて來るばかりであつた。

「恐れながら、秘密に申し上げたき、一儀が御座いまするゆゑ、暫時の間、お人拂ひを、願ひ上げたく存じます」

と、稻田の述べるのを、お聞きになつて、大村侯は、左右を顧みたら、

「其方共は、暫時、遠慮いたせ」

と、いはれて、左右に従て居た者は、何れも、其席を去つた。後は、稻田と對座である。

「密々、申し述べたい、といふのは、何事ぢや」

「ハツ、實は、此頃の藩の状態、大概は、御承知の儀と考へますが、廉之助の横死、並びに針尾の負傷に就きました、藩士の中に、穩かならぬ争ひの、起りまする傾きがありまして、不肖に於ても、種々、身に致しまするが、昨夜、深更に及んで、不肖方へ、一通の封書が、到來致しました。何者の書面とも判らず、不思議に思ひながら、閉封いたしました處、此一封を、君公お手許へ差上げるやう、若し、其手續きを、怠るに於ては、其分に致して置

かね、と、認めて御座いました。事件に依りましては、假令、如何なる脅迫を受けましても、一々申上げまするやうな、拙き事は致しませぬが、此頃の兇變に、つきましては、自分に於ても、憂慮いたして居りまするゆゑ、秘密の中に、葬る事もなりませぬ、お人拂を願ふて、其封書を差上げたく、罷り出てまして御座ります」

「フ、ム、そりや、穩かならぬ事のやうにも思ふが、而て、書面といふのは、持参いたしたか」

「ハツ、之に携へて、参りました」

稲田が差出した、書面を、侯は受取つて、直に開封して御覽になつて驚かれた。佐幕派が、昨年来の計畫を落もなく、精しく、認めてあつた。殊に、正月三日、諸初の様式が終つての歸途に、針尾と松林、並びに渡邊の三人が、闇討に遭ふた顛末を、精しく認めて、其計畫は、何れも佐幕派の重役が、指圖の下に成つた、といふ事も、一々證據をあげて、書いてあるのみならず、飯山を産したのは、其甥に當る、直記の處爲である、といふ事まで、書いてあつた。其末に、佐幕派の連名と、いふやうなものが、二十幾人ズラリと、列べてあつたから、暫くの間は、其書面を手に仕た儘、考へて居られた。

固より賢明なお方であつたから、さまでに焦つて、騒ぐやうな事はないが、顔色には、幾分の憂色が、現はれて居た。

「東馬」

「ハツ」

「之を見よ」

殿様から示されて、其書面を見ると、意外の感に、打たれる事が多く、稲田も、しばらくは考へ込んだ。「之は容易ならぬ、密書で御座ります。之に就ての御賢慮、如何御座りまするか」

「ウム、差當つて、之といふ處分の法もないが、さても困つた事が、出来たのう」

流石に、大村侯も、東馬も、共に首をたれて、考へに沈む許りて、何と、良い分別も、つかなくつたらしく、暫時は、口を噤んで、思案にくれて居た。稍あつて侯は、稲田に向ひ、

「兎に角、之に就ては、予も、一應は考へて見やうと、存ずる。其方も、良き分別をつけて、欲しい」

「御賢慮に基きまして、如何やうとも、此處置をつけたく存じますれば、然るべき御沙汰の儀を、お待受けいたしまする」

「ウム、可い。其儀に就ては、予も、考へて見る。其方も、熟々考へて、良き思案も出たならば、遠慮なく申述べたが、可からう」

「就きましては、此書面の處置は、如何いたしませうか」

「火中いたせ」

「ハツ、仰せては御座りまするが、此密書を、火中と御座りましては……」

「左様なものは、残して置いて、詮ない事ぢや。予の心に、深く止め置いたら、それで可からう。却て左様なものがあつては、後日の爲になるまい。速に火中いたせ」

殿様の御沙汰に、稲田は、例の密書を、火中して了つた。

大村侯が、密書を焼いて、猶ほ考へて見やうと、言つた其間の態度は、如何にも悠揚として、更に迫らなかつた。永くお側に、從て居た、東馬も、今更の如くに感じて、心の中に、只恐れ入つて、控へて居た。

然るに、五教館の生徒で、飯山の徳を慕ふて居る者は、若りに奔走して、飯山を害したのは、佐幕派の所爲である、

といふ事を慥めたので、幾度か、渡邊に迫つて、其復讐を計つたけれども、渡邊は、單に宥めるばかりで、更に復讐の手續きを、つけて呉れない。乃て、血氣に逸る人達は、最早、渡邊の指圖を、待つて居るにも及ばぬから、我々の決心一つで、佐幕派を片付け、併せて、飯山先生の仇を、報じて了はう、といふ事に決したのである。

誰が觸出した、といふのでもなく、自然と、それからそれへと、傳へられて、五教館の裏續きなる、愛宕山へ、一同が集合した。同じ復讐をするならば、闇夜に人知れず、相手を傷ふ、といふが如き、卑怯な態度でなく、正々堂々と、名乗りかけて、殺つて了はう、といふ事になつた。血氣の若者が、五六十人餘り、集まつて、今や、その斬込みに就いて、相談をして居るのである。篝火を焚き、酒を呷つて、罵々と議論を戦はし、天を衝く許りの、意氣込みで、これより將に、大村五左衛門を初め、藩の重役から、先づ片付けて了はう、といふのであつた。此儘に捨て置いたならば、恐らく大村藩は、それが爲に、幕府から、咎めを受けて、何様な嚴罰を、加へられたか知れないのである。

渡邊は、藩の重役に對して、此度の事變に就ての始末を、一刻も早くつけたい、と、如何なる變事が、起るかも知れない、といふて、説き廻つたけれども、何分にも、重役の多くが、佐幕に傾いて居たのと、残る人達も、曖昧の意見であつたし、一番に、勤王の志の厚い、針尾は、負傷して、御前勤めもなりかねて、居るので、渡邊の苦心は、空しく葬られて、徒らに日を送る許りであつた。

「夕、夕、大變て御座ります。鳥渡申上げます」

周章しく、駈込んで來たのは、家來の某であつた。渡邊は、徐に顧みて、

「騒がしい、靜かにいたせ。何事が起きたかは知らぬが、武家勤めをする者が、如何なる場合にも立騒ぐといふ事があるか」

「ハイ、大變な事が起りました」

「大變といふのは、何ういふ事か」

「只今、五教館の連中が、愛宕山へ集まりまして、今にも、不穩の事を仕出來す、といふ事を、慥かに聞いて参りましたからお知らせをいたします」

「今まで、沈着き拂つて居た、渡邊も、流石に、此事を聞いては、驚かすには居られない。」

「何ぢや。五教館の者が、愛宕山へ籠つた、と」

「ハイ」

「そりや、實際の事か」

「何て、嘘を申しませう。慥かに聞いて参つたので、御座ります」

「何うして、然ういふ事が判つた」

「只今、それへ出駈ける、といふ人から、私が誘はれたので御座ります。他にも行く人があるやうで、御座りました」

「そりや、一大事ぢや。那れ程迄に、いふて置たのに、さて、血氣の人達は、情にばかり激し易く、理に遠ざかつて、困るものぢや」

別室で、書見に耽つて居た、兄の清左衛門も、此事を聞いて、昇の室へ、入つて來た。

「こりや、弟」

「イヤ、之は兄上……」

「沈着て居る所ではなからう、と思ふから、汝は、早速に駈付けて、一同を制したら、可からう」

「左様、何としても鎮撫めなければ、なりません」

「然う、沈着て居らず、早く行つたら、何うぢや」

「ハイ、御心配下さるな、すぐ参ります」

昇は、流石に、心の驚きを忍んで、表面には、慌てた様子が見えない。斯うして居る間にも、一同を鎮撫めるに就て、どういふ風に説いたものか、と、その口實を考へて居たのだらう。聽て、身仕度を調べ、大小を揃みざしにして只一人、邸を出て、愛宕山へ、駈付けた。

昇が、駈付るに就ては、兄の清左衛門も、共に行かう、といふのであつたが、之は昇が、堅く押し止めた。

「斯ういふ事は、却て一人の方が、計らひ可いものであるから、決して御心配下さるな。一人で行くも、二人で行くも、納まる處は、同じであるから」

といふて、一人で、行く事に、なつたのである。兄も、昇を、深く信じて居るから、殊に、昇に對する信用は、青年の方でも、却々厚い、といふ事を知つて居るから、清左衛門は、故意と、昇の言ふ通りになつて、家に残る事にしたのである。

愛宕山へ、集まつた連中は、誰が、持つて来たか、酒樽の鏡をぬいて、柄杓から、ガブ／＼と呑んだので、其元氣は、一層激しくなつて、今や全隊を、五組に別け、準備を整へて、之から押出さう、とする所であつた。其内の重立ちたる者が、一段、小高き所へ立上つて、

「只今まで、熟議を遂げて、決した所は、各自、深く守つて、各自の受持に、進んで貰ひたい。只我々は、我藩の爲め、又一つには、飯山先生の仇を、報ずる爲、斯うと目差たものは、一人も残らず、撃ち倒し、我藩の名をして、三百諸侯の間に、重きをなさしめる、といふ他に、我々に、考へはないのであるから、其覺悟で、しつかりやつて貰ひたい」

といふ趣意を、極めて激越の、口調を以て、演説した。ワツと、鬨の聲をあげて、一同は、之に和した。

「サア押出せ」

と、彌下山の途に、就かうとした時、駈付けて來たのが、渡邊昇であつた。

一同が、山を下らう、とすると、麓の方から、駈上つて來る、一人の武士がある。鬨の中にも、それと見て取つて何者であらうか、と、流石に、一同は、足を停めて、其様子を見て居る。處へ、

「暫く／＼、暫く待たつしやい」

と叫びながら、兩手を擴げて、近付いて來る。其顔は見ずとも、叫ぶ聲は、渡邊昇であるから、再び一同は、ドツと鬨の聲をあげた。

「先づ各、暫く、聊か昇に於て、申上げたい事がある。お止まり下さい」

「いや、此場に及んで、最早、先生の御言葉といへど、聞くに及ばぬ」

「然うても御座らうが、兎に角、拙者の申す所を、お聞き取り下さい」

「假令、先生の仰せでも、今に及んでは、致し方ありません。此頃來、先生の御言葉に従ふて、一同は、無念を忍んで待受けたが、更に何等の御返事もなく、空しく今日に及んだので、一同は、此處に集合して、最後の方法を、決しました以上、先生の仰せを、承はつた所で、詮のない事、何卒、先生は、我等の致す事を、傍觀して居て、頂きたい」

重立ちたるものは、斯う答へるのであるが、後に居る、威勢の好い連中は、却々、其様な手緩い事は、言つて居ないのだ。各自に、ワイ／＼言ふから、何ういふ理窟を、いふて居るのか、よくは判らないが、要するに、渡邊の言ふ事は、聞くに及ばないから、すぐに押出せ、強て妨げを致せば、渡邊といへども許すな、といふのだ。各自が、勝手に、言ふのであるから、其騒がしい事は、一通りでない。一同の様子を見て、渡邊も、之までと考へたか、

「何うしても、各自はお待ち下さらぬか。拙者が、態々駈付けて、斯くお止め申すのを、其次第も聞かずに、只無謀

に、事を起さう、と言はつしやるなれば、據所ない。昇も、男子ぢや。或はお相手になつて、各自の爲に、此場に命を預すまでも、防がなければならぬ。先達より、拙者は、重役其他の者共に對して、出来る限りは、奔走して居る。然るに、それを待つ事が出来ず、今亦、申述ぶ事がある、といふにも拘らず、それを聞かず、飽までも押出さう、といはつしやるのは、大村藩をして、再び起つ事の出来ぬやうな、窮地に引入れやうとするに等しい。各自の心は、藩のお爲と、いふのであるかは知らぬが、其行ひは、將に我藩を推倒すにも等しい。『之は怪しからぬ。假令、渡邊先生の一言なりといへども、左様な事を仰せられては、勘辨ならぬ。我々が、何故に我藩を推倒さう、といふ考へがあらうぞ』

『さア、夫ぢやから、拙者が、止めるのぢや。それ程までに、各自が、誠實の心を以て、藩侯のお爲に盡さう、といふなれば、斯ういふ事を仕た後は、我藩が、何ういふ事になるか、といふ、先の先まで、考へての上でなければならぬ。只一時の勇に驅られて、無謀の事を爲して、夫が爲に、我藩に救ふべからざる、大事が起つたならば、其時には、何と爲さる。拙者とても、決して足下等の不爲を、計るものではない。又、松林飯山の死に就ても、足下等が、憤慨するにも劣らず、胸中の怨みは、實に、痛切なるものがあるのぢや。只、飯山の怨みを報い、我々と、反對の者を倒して、事が済むなれば、足下等の手は借りぬ。身不肖乍ら、多少は、武藝の嗜みも御座る。五人や十人を撫斬にするは、朝飯前ぢやが、併し、左様致して、事が治まる、といふものではない。其所に、我等の立場と藩の前途を考へる、必要が御座るのぢや。先づ兎に角、此度の事は、拙者にお任せを願ひたい。必ず目鼻のついた處置はつけて、御覽に入れる。斯く申上げて、強て押出す、といふなれば、據所ないこと、拙者も、お相手を仕る。如何でござるか』

破鐘のやうな聲で、昇が、息も吐かずに、まくし立てた。此勢には、流石の元氣連も壓抑されて、黙つて了つた。渡邊の心事に就て、多少とも疑ひがあれば、假令、何と説かれた所で、鎮まりはすまいが、渡邊は、自分達と、同

じ立場に在つて、飯山とも、兄弟同様の交はりを、結んで居た、といふ事は、知つて居るし、渡邊が、之までに言ふのであるから、強て夫を倒してまで進まう、といふ考へは、出ないのであつた。又、渡邊は、武藝に秀で、居るから普通一通りて、押退けて進むことは、出来るものでない、といふ事も、判つて居るので、遂に一同も怯んだ。その中には、穩かな説を、出す者もあつて、兎に角、渡邊の意見を、一應、聞いて見やう、といふ事になつた。

二二四

漸くにして、一同は鎮めたけれども、さて、此場に於て、何うする事も能ない。此人數の中で、而かも、是れほどに、昂奮して居る、元氣者を對手にして、何を話した所で、徒らに議論ばかり多くして、纏まりのつくべき筈はない。けれども、何かいはねば治まらぬのであるから、渡邊は、咄嗟の間に考へて、一同に對して、流石に、永く江戸詰をして、齋藤塾に、幾百人の門人を、扱ふて居た、經驗を有つて居る丈に、若者を扱はしては、却々巧な所はあつた。『飯山の復讐をいたす、といふ事は、一己の私情にすぎない。その心はあつても、口に唱へては、穩かならぬ事だらう、と思ふ。又我々は、大村藩士として、それよりも、大切の事が、前途に横はつて居ると思はねばならぬ。第一は勤王佐幕の二道に就て、何れを探るか、といふ事である。飯山の死も、之に基づいて居るが、今は區々たる、一人の死に就て、争ひを爲すべき秋でない。藩として、之から進むべき道を、何れに探るか、それを定めて、然る後にこそ、飯山の復讐はすくにも、出来るのぢや。その下手人も、既に判つて居るのぢやから、其處置は、瞬く中に、決すると思ふ。復讐の事も、大切には違ひないが、事の原因になつて居る、重大な事柄を差措いて、名分の立たぬ事をいたしては、却て飯山の爲にもなるまい。兎に角、拙者にも、相當の考へはあるから、此中より、五名なり、十名なりの、總代を選び、拙者と共に、邸まで、同道して貰ひたい。其上にて、相談のいたしやうも御座るから、是非とも、拙者のいふ事を、背いて貰ひ度いが、どうぢや』

鐵壁をも打破るべき、勢を以て進みかけた、一同は渡邊の爲に、出鼻を押へられたので、氣勢も挫けて居た。同じ年齢の、威勢の好い連中でも、そのうちには、幾分の思慮を、有つて居るものもある。渡邊の言ふ所を、聞いて見れば、それにも道理はある。人のいふ事に、耳を傾けるやうになれば、氣も落付いて来るから、無謀の企は、遂行し得るものでない。

近年、流行物の如く、なつて来た、勞資の争ひで、例の同盟罷業にしても、それと同じ事だ。騒ぐ人を、一人づゝ引離せば、存外に思慮のあるもので、無茶な事は出来ないが、大勢が集まつて、ヤレ／＼といふて、ワツと鬨の聲をあげた時は、平生、沈着な人でも、其渦巻に巻込まれて、殆んど無意識に、暴廻るものだ。之が所謂、群集心理なるものであつて、人間の心の働きは、昔も今も、一つなのであるから、舊幕時代でも、昭和の今日でも、一時の勢に煽られて、人の騒ぎ立つ、といふ事は、同じ理合から、起るものである。併し乍ら、一寸腰をついて、理窟を、言ひ合ふ時になると、利害の打算に引づられて、存外に、其騒ぎが小さくなつて、龍頭蛇尾に、終る事が多い。

五教館の青年も、渡邊に諭されて、相談の末が、五人の總代を、選ぶ事になつた。選ばれた五人は、渡邊の前に來て、

「漸々、先生のお説を承はつて、御道理と、考へますから、吾々五名が、一同の名代として、先生のお邸まで、伺ふ事にいたします」

「能くお肯入れ下されて、千萬辱ない。拙者の面目も立つた、といふものぢや。決して足下方の、お顔を潰すやうな事は、いたさぬから、兎に角、御同道下され」

斯くて、渡邊は、五名の總代を引連れて、邸を指して、歸つて來た。一同の者は、五教館へ歸つて、總代の報告を待つ、といふ事になつた。昇の兄、清左衛門は、因より兄弟の事として昇の性質も、知つて居るし、何丈の力のあるものか、といふ事も、判つて居るから、自分は、昇の説に従ふて、同道して居たら、それは、意外にも、昇が五名の青年を伴れて、やつて來るのであつた。

「オ、昇か」

「是は兄上、何の御用ですか」

「實は、餘り時刻が過ぎても、汝の歸りが遅いから、心配の餘りやつて、來たのぢや。而て、何うなつたか」

「御覽の通り、五名の總代を選んで、兎に角、相談をする、といふ事になつて、今、立歸る所でございます。残るものは五教館へ、引揚げた模様であれば、其儀に就ては、御心配御無用でございます」

「それは、結構であつた。藩の爲に、争ふなれば格別、徒らに騒擾を極めて、藩の不爲になる事は、慎まねばならぬ。拙者も、共々に歸らう」

「イヤ、兄上は、之より五教館へ參つて、那方に集まつて居る人々に、御説得を願ひたい。拙者は、邸へ歸つて、總代の人々へ、自分の考へを、申入れる意ぢやから、然ういふ事に、願ひたい」

「然らば、拙者は、之より五教館へ、參る事にいたさう」

兄弟は、手を別つて、血氣の人を、宥める事になつた。斯ういふ風になれば、騒動は、大きくならぬに、定つて居る。昇は、五人を伴れて、邸へ歸つて來た。

一一五

渡邊が、飯山の死を、歎いて居るのは、五教館の人達よりも、一層、深いのであるから、今は、騒ぐ人達を、鎮める方へ、かゝつて居るが、渡邊の心中では、此人達の騒ぐのは、何程、嬉しいか判らない。雖然、只何の考へもなく、

しなかつたが、餘りに時が経つても、歸つて來ぬから、其處は、兄弟の情で、心配になつて來た。其處で、愛宕山へ狀況を見にゆく事になつて、出かけてゆくと、山の坂道を、揃つて來るものがある。道の傍に、身體を避けて、窺つて居たら、それは、意外にも、昇が五名の青年を伴れて、やつて來るのであつた。

「オ、昇か」

「是は兄上、何の御用ですか」

「實は、餘り時刻が過ぎても、汝の歸りが遅いから、心配の餘りやつて、來たのぢや。而て、何うなつたか」

「御覽の通り、五名の總代を選んで、兎に角、相談をする、といふ事になつて、今、立歸る所でございます。残るものは五教館へ、引揚げた模様であれば、其儀に就ては、御心配御無用でございます」

「それは、結構であつた。藩の爲に、争ふなれば格別、徒らに騒擾を極めて、藩の不爲になる事は、慎まねばならぬ。拙者も、共々に歸らう」

「イヤ、兄上は、之より五教館へ參つて、那方に集まつて居る人々に、御説得を願ひたい。拙者は、邸へ歸つて、總代の人々へ、自分の考へを、申入れる意ぢやから、然ういふ事に、願ひたい」

「然らば、拙者は、之より五教館へ、參る事にいたさう」

兄弟は、手を別つて、血氣の人を、宥める事になつた。斯ういふ風になれば、騒動は、大きくならぬに、定つて居る。昇は、五人を伴れて、邸へ歸つて來た。

徒らに騒ぐ、といふ事は、却て害になる、といふので、頻りに鎮撫に、かゝつたのである。漸次、話して居る中に、生徒の方にも、熱く其心が解つたから、遂に一切の事を、渡邊に一任して、暫く成行を見る、といふ事になつて、總代は、五教館へ、引揚げて行つた。

其事があつて、二日ほど経つと、執政の福田伸衛と、いふ人の門に、長い竹の先を割いて、封書を挟んだのが、扉に挿てあつた。朝早く、門番が、之を見かけて、用人の前に、持つて来た。

「斯ういふ物が、御門の扉に、挿て御座いましたから、持参致しました」

用人は、之を見て、

「それは、何だ」

「何で御座いますか、願書のやうにも思はれますが、封がして御座いますから、竹に挿てある儘、持つて来たので御座います」

「フ、ム、そりや妙ぢやな。豈夫、若者共の悪戯でもなからう。兎に角、御目にかかる事にするから、此方へ出せ」

用人は、之を受取つて、すぐに主人へ、此次第を申出た。福田は、不思議に思つて、封を抜いて見ると、驚いた。佐幕派の、重立ちたる者の姓名を、ズラリと列ねて、今日までの悪計の、大略を認め、飯山を殺したのは誰で、渡邊針尾の二人に、斬掛つたのは、何ういふ者である、といふやうな事までも、全部書いてある。之は容易ならぬ事だ、とは思つたが、黙々、讀んで見ると、何うも不思議なのは、文體から見れば、佐幕派の、自訴状の如くなつて居るが、豈夫に、同志の姓名まで列ねて、自訴する、といふのは、可怪な譯だ。倘し、勤王派の方で、認めたものとすれば、餘りに佐幕派の内幕を、能く穿つて在る。何れにせよ、何の爲に、斯ういふ戯をしたのであるか、更に其意が解らない。乃で、すぐに手を廻して、探偵をさせて見たが、何人の所爲であるか、更に判らなかつた。福田も、書面の處分には、頗る窮して、種々に苦心したが、之を殿様に、御目にかける、といふ事も出来ないし、然ればとて、他の重

役に示して、可いか、不可か、少しも見極めが、つかない。何としたものであらうか、と、其一日は、思案に暮れて了つたが、夜になつてから、不圖、思ひ付いたのは、渡邊昇の事である。兎に角、昇を招んで、此處置に就て、相談を仕て見やう、といふ考へになつて、すぐに使者を、昇の邸へ、出す事に仕た。

此封書を作つたものは、昇であつた。佐幕派の連名は、多く御側御用人の、稻田東馬から聞いたもので、闇撃の下手人は、昇の知つて居る者だけの、姓名を列ねたのである。何ういふ譯で、此様な事を仕たか、といふと、公然、藩聽へ訴へて出る、といふ事は、穩かでないが、といふて、此儘に、黙つて居ては、五教館の青年が納まらぬ。何とかして、其始末をつけたいものだ、と、思つて、乃で種々、工夫を仕た末に、「斯ういふ戯を仕たら、其戯が原因になつて、多少は、火の手も上るだらう。披いて見た方で、之を佐幕派の、自訴状と見やうが、又、勤王派の投書と見やうが、それは、何れでも構はぬ。詰り、此書面が原因になつて、福田が、心配を初めれば、何處かへ、相談をするに違ひないから、漸々、火の手が、擴がつて来て、結局、五教館の青年が、仕た事だ、といふ鑑定をつけられれば、無論、自分の方へ、何とか打合せがあらう。若し、勤王派の所爲だ、といふ事に思はれれば、勤王派が、佐幕黨に對して、何か不穩の企てを爲るのではないか、と心配して、猶且、相談は、自分へ、かゝつて来るに、違ひない。事の處分は、それから出来る」と、深い考へから、餘り上策でない、とは思つたが、まあ行つて見ろ、といつた調子で、試みたのである。それが巧く圖星に當つて、福田が、昇を招んで、相談を仕て見る氣になつたから、昇の思ふ壺に、はまつて来た譯だ。

「只今、渡邊昇殿が、見えました」

「左様か、直にお通し申せ」

自分は、ズツと異ふけれど、渡邊の腕前に感心して、殊には、江戸にも、永く居たし、京都にも、足を留めて、小藩ながら、大村の家臣に、渡邊昇のある事を、諸藩の間に、知られて居る、といふ事は、福田も、知つて居るから、

昇に對しては、相當の敬意を、拂つて居たのだ。昇は、案内されて來た。

「さあ、何卒、之へ」

昇は、すぐに席に着いた。

「態々、お使ひを受けまして、恐縮いたします。貴命に従ひ、罷り出でました」

「いや、御多用中、お呼び立てをいたして、定めて御迷惑で御座つたらう。些、折入つて、談合いたしたい筋があつて、お招きいたしましたのぢや」

「ハ、ア、そりや、どういふ事で、御座りますか」

「他の事でもないが、今朝、拙者方の門に、斯様な物が、竹に挟んで、刺してあつたのぢや。一應御覽下さい」

昇は、心の中で、原來、思つた壺に箆つたな、と、幾分の喜びはあつたが、其様様子は、更に顔にも出さず、空恍けて、封書を披いた。讀んで見るとも、自分が書いたのだから、熱く判つて居るのだが、如何にも感心したらしい容子を見せて、精讀して居る。

一一六

昇の様子を、癡乎と、瞶て居た、福田は、膝をすゝめて、

「足下、之を何と見られるか」

「左様、こりや、何か深い仔細が、ありそうな書面と、見ました。豈夫に、自分の秘密を、自分から曝露くものも、あるまいが、といふて、それと反對の人達が、かほど迄に、事情を知つて居るとも覺えず、洵に不思議な書面で御座るが、貴下は、何とお考へになりますか」

「さあ、拙者にも、慥と考へはつかないのぢやが、何れ此連名の者を、處分して呉れ、とても、言ふのぢやらう」

「まあ、左様見たら、大した間違はなからう、と、心得ます。而て、何となさる、お考へて御座りますか」

「夫に就て、足下の御足勞を、煩はしたのぢや。先づ第一に、心懸りなのは、五教館の生徒で、渠等は、何れも松林飯山の、教へを受けたものであるゆゑ、飯山の死に就て、最も憤慨して居る者は、彼等であらう。人數も相當に多く、元氣の若者ばかりが、集まつて居るのぢや、に依つて、此取締を巧手にせねば、怖るべき事にもならう、と考へる。此書面も、或は、其邊から出たのではなからうか、といふ疑念もあり、旁、何ういたしても、足下の御配慮に依つて、何とか渠等の鎮定方を、お引受けを願ひたいものぢやが、如何で御座らうか」

それと、判然は言はぬが、何となく、話の調子では、自分等の仕た事だ、と、悟つて居るらしくも、思はれるて、昇も、聊か薄氣味悪い、感じも起つた。

「仰せの如く、五教館の青年は、却々、元氣者の揃ひで御座るから、今の中に、何とかいたして、押へて置かねば、後日の騒動は、見え透いて居る。併しながら、それに就て、飯山を、圍撃にした、下手人を、何とか處分せねば、如何に鎮撫方に、力を盡したとて、其效はあるまい、と存じます。其邊に就ての御思慮は、如何で御座りますか」

「而て、飯山の下手人が、誰ぢやといふ事は、御存じて御座るか」

「如何にも、心得て居ります」

「えツ、御存じとか」

「左様」

「ウム、全體、何者で御座つたか」

「さあ、それを申述べる前に、一應、伺つて置きたいのは、若し、飯山の下手人が判りましたならば、必ず相當の御處置を、加へて下さるか、話は聞き置くが、處置はつけぬ、といふのでは、お明し申す效もなからう、と存ずるゆゑ、其儀を一應、伺つて置きたう御座る」

斯ういはれて見れば、福田も、豈夫に、其本人は判つても、處分は仕ない意だ、とはいへない。苟も、大村藩の執政を、勤めて居るものが、曖昧な事はいへないから、

「然らば、申上げませう」

「ウム、而て、何者か」

「飯山の縁續きに、なつて居る、雄城直記で御座る」

「えッ、直記が、下手人であると、仰せられるか」

「左様」

「それには、確かな證據でも、あつての事か」

「直記が平生の行ひと、拙者が目撃した、飯山と争ひの顛末からも、考へられるが、それよりも、當夜、飯山の叫んだ一言に、汝は直記か、といふ言葉、之を聞いたのは、飯山の若徒で御座つた。之丈け確かな證據があれば、下手人は、直記と見ても、差支へあるまい、と存ずる」

之から、昇は、飯山と、直記との間に於て、最後の争ひの顛末を語り、自分が、其仲裁者になつて、直記に、叱言を言ふた事までも、くはしく語つた。其の他に、直記が、平生の行ひなどに就ても、遠慮なく説明をしたので、福田も、流石に心が動いた。

「成程、然う承つて見れば、或は然うであつたかも知れないが、併し、叔父殺しは、大逆罪の一つで、無論、獄門は免がれぬのであるゆゑ、容易に、それと決する事もなるまい。今少し確かな、證據を握つた上でなければ、之ほどの大罪を犯したものととして、取扱ふ事もなるまい。其點に就ては、少しく考へて見なければ、ならぬ」

之を聞くと、昇は、顔色を替へて、

「怪しからぬ事を、仰せられる。最前のお約束に、下手人の名を言ふたならば、直に處分を加へる、といふ、お答へがあつたに依つて、自分は、言ひ難き事を忍んで、直記が、其本人である、といふ事を、申述べたので御座る。是程まで、確かな證據があつて、それでも、まだ直記と、いふ事には定められぬ、といはれるか。何故に左様、疑念を扱まれるのか。拙者には、其次第が相解らぬ。それとも、此昇を以て、偽り多き者として、御覽になつて居られるか」

并續の起きた時であるから、昇の言葉は何となく荒々しく、宛然、福田を、問詰めるが如くにして、迫るのであつた。

「イヤ、左様に、疑ふのではないが、何しろ大逆罪の事であるから、夫と定めるには、今少し證據を見たい、といふのであつて、固より足下の仰せられた事を、疑ふといふ次第では御座らぬ」

「拙者に、何の疑ひもない、といふなれば、拙者の申した事を、お信じ下されば、差支へあるまい。猶ほそれを慥めるには、飯山の若徒を、之へ招いて、當夜の状況を、お訊きになつても、判るで御座らう」

福田も、今は、切迫詰つた。

「然らば、左様いたさう。其若徒を、足下の姓名を以て、之までお招き下さい。拙者が、一應會ふて、詮議いたして見やう」

「それが、宜しからう」

昇は、すぐに手紙を持たせて、飯山の處へ、使ひを立た。福田は、渡邊を、疑つて居るのではないが、極穩かな人であつたから、叔父殺しは、親殺し、主殺しにも等しい大逆罪であつて、獄門にもなるべきものであるから、これ程の罪を、人に被せやう、といふのには、確かな上にも、充分の證據を捉へなければならぬ、といふ考へがあつたのだ。況んや、他の重役の中には、直記を、庇ふ者があるのは、眼に見えて居るのであるから、それで大事をとつたもので

「イヤ、左様に、疑ふのではないが、何しろ大逆罪の事であるから、夫と定めるには、今少し證據を見たい、といふのであつて、固より足下の仰せられた事を、疑ふといふ次第では御座らぬ」

「拙者に、何の疑ひもない、といふなれば、拙者の申した事を、お信じ下されば、差支へあるまい。猶ほそれを慥めるには、飯山の若徒を、之へ招いて、當夜の状況を、お訊きになつても、判るで御座らう」

福田も、今は、切迫詰つた。

「然らば、左様いたさう。其若徒を、足下の姓名を以て、之までお招き下さい。拙者が、一應會ふて、詮議いたして見やう」

「それが、宜しからう」

昇は、すぐに手紙を持たせて、飯山の處へ、使ひを立た。福田は、渡邊を、疑つて居るのではないが、極穩かな人であつたから、叔父殺しは、親殺し、主殺しにも等しい大逆罪であつて、獄門にもなるべきものであるから、これ程の罪を、人に被せやう、といふのには、確かな上にも、充分の證據を捉へなければならぬ、といふ考へがあつたのだ。況んや、他の重役の中には、直記を、庇ふ者があるのは、眼に見えて居るのであるから、それで大事をとつたもので

況んや、他の重役の中には、直記を、庇ふ者があるのは、眼に見えて居るのであるから、それで大事をとつたもので

況んや、他の重役の中には、直記を、庇ふ者があるのは、眼に見えて居るのであるから、それで大事をとつたもので

況んや、他の重役の中には、直記を、庇ふ者があるのは、眼に見えて居るのであるから、それで大事をとつたもので

況んや、他の重役の中には、直記を、庇ふ者があるのは、眼に見えて居るのであるから、それで大事をとつたもので

況んや、他の重役の中には、直記を、庇ふ者があるのは、眼に見えて居るのであるから、それで大事をとつたもので

況んや、他の重役の中には、直記を、庇ふ者があるのは、眼に見えて居るのであるから、それで大事をとつたもので

況んや、他の重役の中には、直記を、庇ふ者があるのは、眼に見えて居るのであるから、それで大事をとつたもので

ある。
昇の迎ひを受けた、飯山の若徒は、何事が起つたか、と、取るものも取敢ず、駆付けて来た。そこで福田が、渡邊を、立會人として、若徒を調べる事になつた。

一一七

調べて見れば、若徒のいふ所は、渡邊の語つたのと、少しも違はない。他の事は聞かずとも、只、飯山が斬られた時、最後の一言を聞いたのと、其逃げて行く、曲者の後姿は、平生、見馴れて居る、直記と違はなかつた、といふ證言だけで、充分に直記を、疑ふ事は能うのだ。其上に、直記が、飯山の教へに背いて、佐幕派の富永快左衛門に、抱へ込まれて、殆んど其部下の如くなつて、働いて居た、といふ事實に、照して見れば、益々、下手人の直記であるといふ事は、察し得る譯である。

昇の爲人は、熟く知つて居るから、福田も、強て疑ひは仕なかつたが、下手人が、直記といふ事に就ては、直ちに信ずる事も成り兼ねたのであつた。然し、斯うして、飯山の若徒の語る所を、聞いて見れば、昇の言ふ所と、寸分違はない。愈々、直記が、手を下したものに違ひない、とは思ふが、さて、此上は、如何にして、彼を押へたならば可からうかと、それからそれへ、福田の心配は、多くなるのであつた。直記を押へた後、其關係が、何の邊まで、及んで居るか、といふ事も、疑念を置いて見れば、幾分の心配はある。福田は、極めて公平な、態度を以て、藩政に臨んで居たが、他の重役は、各自、勤王佐幕と、二つに分れて、争ふて居たのであるから、若し、直記を、押へた後に、佐幕派の重役に、深い關係があつて、それ等にまでも、手をつけなければならぬ、といふ事になれば、大村藩の紛擾は、どれほど大きくなるか判らない。然ういふ事を、思ひ合せて見ると、福田も、逡巡すには居られなかつた。昇は、福田が、腕を拱んで、考へて居る態度を、見た丈けて、直記に對する疑ひは、充分に有つたらしい事が判つた。

「最初の約束の如く、直記に對して、相當の御處置を下さるか。それとも此儘、打捨てお置きなさるか。御返事に依つては、我等に於ても、亦一應、考へて見なければならぬ。御即答を願ひたい」
若し、福田が首を掉つたならば、すぐにも渡邊は、五教館へ、馳せ付けて、今度こそは、自から青年を指揮して、一と騒動持上げる考へはあつたらしく、福田に、つめ寄つて行く様子といふものが、甚だ穩かでない。福田も、最初の約束があるから、強て昇を、押へる事も出来ぬ。又假りに約束はない、としても、之丈けの證據があれば、何うしても、直記を、一應は取押へて、調べて見るのが、當然である。流石に、執政を勤めて居るものは、普通の藩士と違ふと、幾分の思慮もあるから、福田は、漸く領いて、

「よろしい。最初、お誓ひ申した通り、直記に對して、相當の處置は加へるが、併し、直記の背後に、何者か居つて、之を爲さしめたものと、すれば、直記を取押へるにしても、却々面倒の事と考へる、兎に角、直記を、押へる事だけは、足下、お引受け下さらぬか」

之には、昇も、聊か困つた、といふものは、自分が、自から進んで、直記に、手を下す、といふのは、随分、迷惑な次第である。之は福田が、惻愴な人で、詰り、間違つた處で、其責は、渡邊にある、といふ事になり、悪くいへば狡猾い考へである、ともいへるが、此場合に於て、昇は、強て之を拒む事が、出来なかつた。

「何せに従ひ、直記を、取押へる事は、御引受けいたす。つきましては、直記の外にも、其味方があつて、充分に證據があつたならば、仍且、直記と同様に、引捕へても差支へありませんか」

昇も、さるもの、其處まで押して、福田に、返事を求めやう、としたのは、流石であつた。福田の方でも、豈夫、直記以外の者は、證據があつても、捕へて呉れるな、とは、言へないから、
「直記を取押へる、と定まつた以上、それに關係した者があるならば、共に取押へる、といふ事は、足下の手加減としたら、よからう」

「然らば、貴下は、お認め下さるか」
 「承知いたしました」
 「然らば、お引受けいたしませう」
 漸く相談は定まつた。昇は、期せずして、自ら飯山の敵を討つべき、役廻りになつたのである。昇としては、此位の喜びはなからう、と思ふが、茲に一つ、苦しい事は、直記が、飯山の未亡人たる、お駒の甥であるから、一應はお駒にも、此事を言ふて置かなければならぬので、それが、此上もない苦痛であつた。

二一八

人間は、必らず一度は死ぬもので、永世無窮に、死なぬ人間はないのだ。而し見ると、死ぬといふ事は、當然、來るべき運命であつて、如何に免れやう、としても、人間の力で、免れる事は能ない。然るに、意義もなく、長生を仕たい、といふ心願を以て、種々に、煩悶する人もあるが、實に愚な事である。何んなに生きた處で、凡そ限度は定まつて居る。人生を、五十と限つてあるのへ、十年か十五年を引延ばした所で、それが何にならう。七十歳は、古來稀也、と言はれるのではないか。

假令、天折はしても、社會に對して、盡すだけの務めを仕て置いたら、其肉體は死んでも、精神は、活きて居るので、其人は、決して死んで居ないのだ。此見易い道理が解らないで、遮二無二に、長生を仕たがるのは、愚もまた甚だしい。又、肉體は死んでも、精神の殘る事を忘れて、大切な自分に、汚點をつけ、正しくない筋に依つて、卑しい利益を貪る者もあるが、實に度し難い馬鹿者である。誰れでも、其職務に甘んじて、營々として、勤勉の日を送り責任を完うしやう、といふ事に、努めて居るものは、洵に立派な人間であつて、假令、一代の富豪となり、或は大臣となつても、其心に、汚い所があつて、社會に對する、當然の務めを、爲さないものがあれば、其人は、正しく勞働

して居る貧しい人よりも、劣つて居るのだ。されば、衆人の上に立つて、天下の事に任じやう、といふものは、餘程崇高い心掛を、有つて呉れなければならぬ。

松林飯山が、大村藩の藩政に、改革を加へやう、と努め、又、天下の事にまで、苦心して、勤王の魁を、爲さしめやうとした、其働らきに對しては、何人も之を悪い、と評する事は能ない。殊に、反對派の迫害が、漸次、加はつて來て、何時、何處で、何ういふ災難が、起らないとも限らないほどの立場に臨んでも、平生の志を翻さず、飽迄も進んで行つたのは、偉とせねばならぬ。而して、遂に直記の兇手に罹つて、倒れて了つたのであるが、恐らく飯山は、斯ういふ無慘な、最期を遂げても、悔る事は、なかつたのであらう。却て、自分の一身は犠牲になつたが、之に依つて、大村藩の勤王派に、少からぬ奮發心を興へた、といふ事を、喜んだに違ひない。

只一つ、悲惨な事は、飯山に限らず、斯うした立場に居る人が、自分の一身を犠牲にして、其企てた事の爲に倒れると、自分は、覺悟の前であるから、宜しい、としても、後に遺される、妻子や遺族が、可哀想である。他で見ても然うした感じは起るから、本人の心に、立入つて見たならば、随分、辛い事があるから、苟も志士義人として世に立つのは、可成り果をも忍んで、志の爲に倒れる、といふのが、男子の本分であるから、苟も志士義人として世に立つのは、可成り苦しいに違ひない。また、然うした人を、良人に有つた以上、妻たる者も、良人の名を、汚さない丈けの覺悟がなければならぬ。夫婦が、未永く揃つて居る事は、大なる幸福に違ひないが、それにしても限りのある事で、古人も、人間の一生を以て、泡沫夢幻に如し、いといふて居る位だ。只徒らに、生を貪つても、仕方がない。永く世間の人から羨まれる人物になれば、それが未來永劫の光榮に、なるのだ。志士仁人の妻が、存外に、氣性のすぐれて、普通の婦人と、異なる所のあるのは、斯ういふ理合を悟つた上で、決心が強いからであらう。

今日も、直記は、飯山の邸へ、來て居たのだ。叔母のお駒を、慰めやうとして、來て居るのではあるが、随分、圖太しい奴だ。自分が、飯山を、斬つて置いて、その妻たる、叔母を慰める爲に、相變らず邸へ、出入して居る、とい

ふのは、到底、普通の人間に、出来る事ではない。如何に偉いやうでも、女は、情に脆いものであるから、お駒は、直記の、昨今の行ひを見て、直記に對する、今までの、不信用は、何時か、泡の如く消えて、現在では、此上もない相談相手として、何事も、計つて居るのであつた。

「叔母様、彼の時の事を考へると、如何にも、残念で堪まりませぬが、併し、既に過去つた事で、致方がない。只此上は、一日も早く、下手人を、探し出して、それと慥かに決まりましたならば、私が、叔母様に代つて、必然、敵を討ちますから、餘りクヨク思はぬ方が、宜しう御座ります」

お駒は、然も嬉しうにして、
「汝さんが、然うして度々、訪づれて来て、妾を慰めて呉れるのは、實に嬉しい事に思ひます。之は仍且、親身の間柄であるから、出来る事でありませう。それにしても、汝さんが、其親切の心を、何故、飯山の世に在る時、有つて下さらなかつたか、と、嬉しいにつけても、それが怨みて御座いますよ」
直記は、額を押へて、

「いや、それを言はれては、何とも申譯がありません。別に之といふで、叔父様に反抗ふといふ、意はなかつたのですが、餘り頭ごなしにやりつけられるので、性來た疝癢で、時としては、口答へも仕た事はあります。而し、それは、僅の一事の事で、詰りが縁にながる、叔父明て御座いますから、猶少し、叔父様が、生きて居られたら、私の心も、熱く判つて頂き、又叔父様の、お爲になる事も、出来たてせうが、今更に、叔母様に、然ういふ事を言はれる、と、死んだ人に濟みませぬから、何卒其話は、止めにして下さい」
「汝さんを、困らせやうとて、言ふのではないが、現在の汝さんを見て、以前の事を、思ひ出すと、ツイ、言ひたくもなつて、斯ういふ愚痴も出るのですよ」
二人が、陸じく話して居る所へ、召使が、廊下に登音荒く、やつて来た。

「只今、渡邊昇様が、お入來になりました」
「えッ」

と、直記は、顔色を變へて、聲を出した。お駒は、それに氣が注かぬらしい。

「恰度、好い所へ、渡邊様の御光來…直記さん、序に緩り、渡邊様と、話して行つたら、可いでせう」

「いや、拙者は、些急ぎの用事も、ありますから」
はや逃げ支度の、膝を立直した所へ、豫て案内を知つた、昇は、ツカ／＼と、入つて来た。直記は、頭を上げ得なかつた。

二一九

昇は、飯山の宅へ来て、取次の者から、直記が、来て居る事を聞いて、一時に、疝癢が、込み上げて来て、忍耐が出来なく、案内もされないのに、ツカ／＼、座敷へ入つて来たのである。

飯山が、世に在る時は、取次なしで座敷へ、入る事もあつたが、一度、飯山が、亡き人になつて後は、深く遠慮して、何人かの取次がなければ、決して座敷へ通らなかつた。又、長話の時分には、或可く誰かを、側に置くやうにしたのは、流石に、注意の行届いたものであつた。けれども、今日は、其様な遠慮も、仕て居られなかつたのだ。昇がズツと、座敷へ通るのを見て、お駒は立上り、

「オヤ、渡邊様で御座いましたか。只今、お出迎へに出やうと、存じて居りましたのに、失禮いたしました…」

「御案内も受けず、無遠慮に、座敷へ通つて、誠に相濟まぬが、以前の御懇意で、之はお許しを願ひたい」

「恰度、直記さんも、見えて居りまして、貴下様の御光來と、いふ事を承りましたので、此位幸ひな事はないと存じました。直記さんも、以前のお心が、直つた所で御座いますから、是非、貴下様に、御目に掛つて、自分の心

も、明して置いた方が、可いだらう、と、今、此人の歸る、といふのを、引止めて居つた所で、御座います」

「ハ、ア、そりや、何よりの事で、御座つた」

と、言ひ乍ら、昇は、昵と、直記の方を見た。平生は、傲慢な態度で、長上の者に、決して頭を下げない、直記も、今日は何うしたのか、俯目勝になつて、昇の顔を、正面に、見る事が出来なかつた。昇は、大きな眼球を、キヨロク、させ乍ら、直記を、睨み付けるやうにして居る。

「いや、直記さん、其後は駆違ふて、お目にも掛らなかつたが、足下の大嫌な、飯山先生も、那アいふ最期を遂げたから、今では、言葉敵もなく、此邸に來ても、緩くり尻が、落着く事ぢやらう」

少しの遠慮もなく、皮肉な事を言ふて、直記の頭から、壓へつけるやうに、出たので、直記も、年齒が若いから、憤然とした。

「お言葉で、恐れ入ります。如何に平生は、言葉敵であらう、とも、飯山は、私の縁の叔父でござります。其人が、那アいふ無惨な最期をとげたのを見て、拙者が、喜んで居るやうに思ふてか、其お言葉は、甚だ怪しからぬ事と、心得ます」

「ハツハ、、、怒つたな。いや、まだ、お年齒も若い、氣も若い、之しきの事で、怒つては困る。拙者は、悪氣で、言ふたのではない。然う思ふたから、有りの儘にいふたのぢや」

「それが、宜しう御座いませぬ」

「ハ、ア、何故、宜しくないか」

「言葉敵の飯山が、居なくなつたから、安心して、此邸へ出入りを、仕て居るだらう、といふやうな事は、拙者を辱かしめる、言葉と考へます。此邸へ、出入する事は、飯山が居らうと、居るまいと、左様な事には、頓着ない。赤の他人の貴下から、彼是れ言はれる筈はない、と存じます」

「さうか。こりや、拙者が、間違つたかも知れぬ。正直な奴は、時々、斯ういふ失錯があるよ。巧言令色は、大嫌ひぢやから、ツイ有の儘をいふて、怒られる事がある。ハツハ、、、」

何處までも、直記を、怒らせやう、としてか、昇の言ふ事は、皮肉であつた。直記は、益々、顔色を變へて、昇の方へ、膝を向けやう、とするのを見て、お駒は、

「直記さん、些お慎みなさい。假令、何であらうとも、當家のお客様、殊には、渡邊先生は、藩中第一の、お腕前の立派なお方ぢや。汝さんなども、竹刀を取つて、御教授を願はねばならぬ、身の上であります。それを、お仲間同様に心得て、彼是れ仰しやるのは、宜しくありません」

「併し、叔母様の、お言葉で御座りますが、只今のやうな、無禮な事を申されては、忍耐がなりません。假令、渡邊先生といへど、自分の思ふた事だけは、述べなければならぬので、思はず、聲も高く、言葉も激したので御座います。せうが、其處は、御容赦を願ひます」

昇も、直記の顔を見て、小癩に障つたから、擲擲ては見たが、お駒が心配して、仲裁の勞を、執るのを見る、と、何となく氣の毒にも、なつた。

「兎角、拙者は、憎まれ口を叩くので、何處へ行つても、斯ういふ事に、なるのぢや。最早、何も申すまいから、足下も、怒らぬがよい」

「貴下が、何も仰しやらなければ、拙者とても、黙つて居る丈けの事で、御座る」

「未だ怒つて居るな。ハツハ、、、」

其内に、お茶がはいり、お菓子が出る。お駒は、頻りに昇を、歡待すので、直記も、程の宜い所で、歸つた方が可からう、と考へた。

「叔母様、拙者は、是て失禮いたします」

「まア、可いでせう。猶少し、話しておいでなさい。渡邊先生へも、今までと異つて、全然、行ひも改まつた、といふ事を、熟くお話し申して、此後のお引立を、願つた方が、可いでせうよ」
 如何に、叔母の注意でも、此矢先に、其様な事は、渡邊に對して、言ふことは能ぬ。直記は、幾分の不平を有つて、渡邊先生には、今改めて申上げずとも、拙者の事は、熟く御存じてすから、先生の思はれる通りの人間として、お交際下されば、差支へはないのです。兎に角、拙者は、之で失禮をいたす」
 「然う、角目立つての事では、却て先生にも、失禮に當りますから、今日は、此儘歸つて、又、お目にかゝる機會もありませんから……」

「左様、いたしませう」
 直記は、渡邊の方へ、膝を向けて、

「とんだ失禮をいたしました。之で拙者は、お先へ御無禮いたします」

「オ、歸らつしやるか。廻り道にもなるまいから、飯山先生の御墓詣りでも、仕て行つたら、可いだらう」

「御念の入つた、御注意、仰せまでもなく、毎日、墓参りは、いたして居ります」

「足下が、墓参りを仕たら、飯山先生も、喜ぶ事ぢやらう」

「何と、仰しやる……」

「お歸りとあるなら、早く歸つたら、可いぢやらう」

直記は、プン／＼怒つて、登音荒く、歸つて行つた。

三〇

直記が、歸つた後で、お駒は、渡邊に向つて、

「何うも、那アいふ氣性で、誠に困り入ります。飯山の歿なりました後は、態度も、異つたやうで御座いますが、それでも、持つて生れた、氣性は、直らぬものと見えて、貴下様に、那アいふ、失禮な事を申上げて、何とも申譯が御座いませぬ。年齒の若いものは、前後の考へが、兎角、疎かになりますから、御勘辨を願ひます」
 「何の、左様な事を、氣にするものでは、御座らぬ。江戸に居て、三百諸侯の若侍や、浪士を對手に、幾年となく交際ふた、拙者で御座る。之しきの事を、心にかけては、江戸の勤めは、一日も出来ぬもので、御座る」
 「然う、仰せ下さいますと、私も、安心して御座います」
 「併し、那の直記は、餘り近付けなさらぬが、宜しう御座るぞ」
 「えッ、直記を、近付けるなどは……」

「さア、拙者の口からは、一寸申しにくいが、那アいふ者を近付ける、と、お爲になりますまい」
 何程、伶俐のやうでも、其所が女子だ、飯山の歿なつてから、直記が、親切にして呉れるのを、嬉しく感じたと思えて、お駒は、直記を、深く信じて居たのだ。渡邊に、斯う言はれては、心に喜ばないのも、無理はない。

「貴下は、左様に仰しやいますが、以前の直記と、現在の直記は、大分異つて居ります」
 「ハ、ア、何う異つて居りますかな」

「別に、何うといふて、お話しもなりませんねが、大分、心も改まつて、妾共の事に就ても、能く親切に、世話をし呉れるやうに、なりました。飯山の居りました時分は、那の通りでしたが、仍且、親身の叔母甥の間柄とて、自分には、濟まぬといふ心が、出たのでございませうか、妾の目には、其心も改まつたやうに見えてなりません」
 「いや、夫が間違ひぢや。彼の心が、容易に改まるものではない。假令、改まつたにしても、今、改まつたのでは、何の詮もない事ぢや」
 「假令、何んな悪い者でも、其心が改まれば、人様は、許して下さるでせう。況して、別に何が悪い、といふ事もない」

く、只、飯山に反抗ふて、其申す事を肯かなかつた、といふ丈けて御座いますから、貴下も、お心を赦めて、直記を、引立て、頂きたう存じます」

「折角の頼みぢやが、それは、お断り申す」

「成りませぬか」

「成らぬばかりでなく、彼奴が、當家へ出入りを、いたすといふ事さへ、拙者は、不快に考へるので、御座る」

「以前の事をお忘れなく、直記を、お憎しみて御座いますか」

「それも御座るが、其他にも、仔細があるのぢや」

「何ういふ事で、御座いますか」

「昇は、四邊を見廻して、聲を潜めた。」

「飯山を斬つたのは、全體、誰ぢやと思ふて、お在でか」

「夫に就ても、直記が心配して、孝りに探ねて呉れますが、誰といふ事は、未だに判りませぬ」

「そりや、判る筈がない。探ねて居る奴が、斬つたのぢや」

「えッ、探ねて居る奴が斬つた、と仰せられると、さては、直記が……」

「左様」

豈夫に、とは思ふが、渡邊の答へが、如何にも判然して居たので、お駒も、幾分か、心が動いた。

「直記が、斬つたといふ證據でも、御座いますか」

「大した證據もないが、生きた人間が、證據で御座る」

「ナ、ナ、何と仰しやる。生きた人間が、證據とは」

「貴女には、未だお話しを仕なかつたが、飯山が、斬られた時に、汝は直記と、一言叫んだ、それを、聞いた者があ

る。其後も、直記の様子を、漸次、探つて見ると、慥かに疑はしい點もある。又、それまでの成行から考へても、直記であるといふ、事は、充分に想像もつく。別に之といふ、用事もなきに、飯山の亡き後に、屢次、此邸に出入する。といふのも、一つの不思議で御座る。那の晩とても、第一に、駆付くべきは、渠であるのに、翌朝になつてから、コツソリ參つて、居合した人にも、碌な挨拶もなさずして、其儘、ソツと立歸つた。それらの事も、考へて見れば、疑ひの種ではありませぬか。貴女は、肉親の關係から、直記に、幾分の眞心があつて、御覽にならうが、那のやうな者は、決して出入させぬが、可う御座る」

斯ういふ態に、話されて見ると、お駒にも、不審の廉は、判つて来る。今更に、直記の所爲であつたか、と思へば

餘りに情けない、といふ心も起つた。渡邊は、擬乎と、お駒の容姿を見て居たが、猶も聲を潜めて、

「實の所を言へば、最早、既に直記は、細にかゝる事に、なつて居るので御座る」

「えッ、それでは、直記は捕はれるので、御座いますか」

「左様、直記を、捕へる役目は、拙者が、承はつて居る。貴女とは、肉親の間柄でもあり、旁、一應は、お断り仕て

置いてから、手を下さう、といふ考へて、今日は、罷り出たので御座つた。折柄、直記が、来て居つたので、拙者

も、那の皮肉を、言ふたやうな譯であるが、此事に就ては貴女は、何事も言はず、只だ黙つて、事の成行を、見て

居なさるが、可からう、と存ずる」

自分の良夫たる、飯山を斬つたのが、現在の甥に當る、直記だ、といふのは、今聞くが初めてであり、渡邊の話には筋も立つて居て、道理らしく聞えたが、併し、まだ幾分か、直記に對する信用もあつて、お駒の胸は、全然亂れて、今は何れを信じて可いか、更に判らなく、なつて了つた。

昇が、お駒に打明けて、直記を、飯山の敵として、今までは、秘して、居た事迄も、打明けてしまつたのは、直記を捕へる日も、近づいて来たから、豫め其事を、了解して置く必要がある、と思つて、是までに突込んだ、話を仕たのである。お駒も、其時は、まだ幾らか、疑ひを有つて居たのだが、漸次、事情を思ひ合せ、且つは、飯山が、斬られる時に、直記と叫んだのを聞いた、といふ、若徒を招んで、糺して見れば、確かにそれに違ひないので、彌、お駒も、直記が、下手人である、といふ事を、信するやうになつた。

扱ても怖しいのは、人の心である、現在、血肉を分けた、叔母の配偶に、なつて居るばかりでなく、直記の爲にも、書物を教へて呉れた人で、謂はゞ、師弟の關係に、なつて居るにも拘はらず、斯うした無慘な事を爲る、といふのは、何といふ極悪非道の奴であらう、と、今更に、直記の心の、歪んで居るのを、怒りもすれば、且は、自分の親身の者が、良夫を斬つたのか、と思へば、恨めしい氣もして、昇が、歸つた後も、お駒は、殆んど一日泣き暮して了つた。

二日ほど経つと、直記は、不意に、藩廳へ呼出された。何處までも、圖太々しい、直記が、少しの疑念もなく、平氣で、藩廳へ出て来ると、意外にも、叔父殺しの取調べを受けた。無論、直記は、知らぬとばかり答へたが、遂に其日から、獄舎に入れられる事になつた。同時に、直記の同類と、見做された者が、十三四名が捕縛されて、何れも獄に投ぜられた。此事は全然、重役に相談がなく、藩主から、直接に、奉行の方へ、申付けたのであるから、何人も故障を入れる暇がなく、實にきびしい遣方であつた。

大村藩のやうな、小藩の城下に於て、十三四名の藩士が、捕へられれば、後の騒ぎが、随分、えらかつたに違ひない。奉行所の調べが、漸次、進んで行く、と、其内には、弱い奴もあつて、到頭、飯山を圍撃にした、當時の秘密を、白状する者もあつた。それを突込んで行けば、重役も、關係して居るのは、言ふまでもないから、奉行も、其點に就て、幾分の手加減をして、只此際には、飯山に、手を下した者丈けを捕へる事に止め、其他の事は、更に藩主の内意を聞いてから、手を付けやうと、考へたのである。従つて、調べやうもその程度であつたから、まだ、重役の姓名ま

では、判然、奉行の手帳には、記らなかつたのだ。然るに、直記は、却々、強情を張つて居て、一切、知らぬ、存ぜぬの一點張で、更に事實を申立てぬから、疑獄は延びて、容易に、取調は運ばなかつた。

人を殺す、といふ事が、大なる罪悪である、といふのは、言ふまでもない。密に殺された本人が、口惜いばかりでなく、後に遺された、遺族の歎きを思へば、容易に、人を殺すなどいふ事は、能ない筈である。それを忍んで、爲し得る、といふのは、餘程、惨忍な性質を、有つたものでなければ、能ない事だ。戰場の事でもあつて、何方を見て、血腥い事ばかりの間に、殺すとか、斬るとかいふ、事が、目的になつて居る時ならば格別、平時に於ては、只だ一通りの怨み位で、無暗に、人を殺す、といふのは、全く人間の心を離れなければ、可能る事ではない。

況して、縁に繋がる、叔父を殺しながら、口を喋んで、空恍けて居る、といふのは、よほど冷血な人間でなければ、能ない事だ。これほどの奴でも、良心の呵責には勝てない、直記の胸の中には、始終、當事の事を繰返して、人知れず煩悶して居たのだ。獄中の人になつて、明けても、暮れても、只一人、薄暗い鐵窓の下に、茫然と、坐つて居るのであるから、如何に忘れやう、としても、其時の事が、想起されてならない。殊に、雨でも降り出して、寂しい晩などには、一層、良心の呵責に堪へられず、一夜を、煩悶のうちに、送る事もあつた。そんな事が、續いて来るので、遂には、氣も心も狂はしくなつて、或日の事であつたが、監視の油斷を窺ひ、窓格子に、帯を結へて、自ら縊れて、死んで了つた。時経てから、牢係りの役人が、やつて来ると、此光景であるから、大騒ぎとなり、漸く引下して、介抱はして見たが、既に呼吸は絶えて、醫者の手にかけても、取返しがつかなかつた。

直記が縊死した、といふ事は、すぐに藩主へも手續を経て、上申に及んだ。首魁者と、認められて居た。直記が、最期を遂げたから、其他の者に對しては、訊問を急いで、片端から、下シく口書押印も済まして、或は斬罪、或は切腹、或は追放といふやうな具合に、輕重の別はあつたが、いづれも處分されて了つた。直記は、現在の叔父殺しといふ、大逆罪であるから、其首を斬つて、數日の間、獄門に梟し、一切の處刑は終つた。

67
3

昭和九年十月十八日印刷
昭和九年十月廿二日發行

實錄新十傑 第四卷

(第二回配本)

1078

著者 伊藤仁太郎
發行者 下中彌三郎
印刷者 關口一男

東京市日本橋區吳服橋三ノ五

平凡社

振替東京二九六三九番
電話日本橋三平・三六・三五

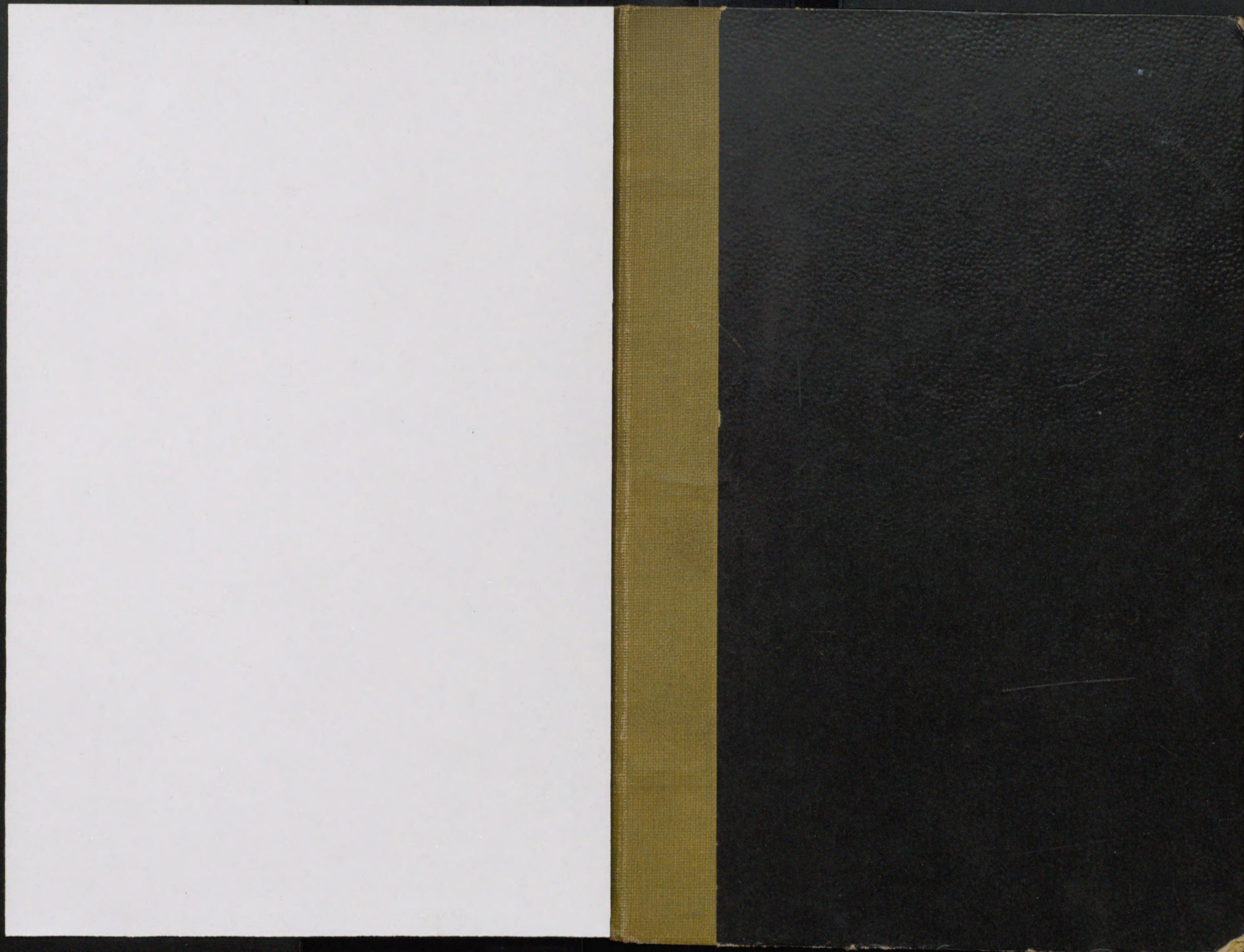
共同印刷株式會社發行

67
3

民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日	8707	中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日
中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日	中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日	中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日 中華民國六年十月十八日

中華民國六年十月十八日

677
3

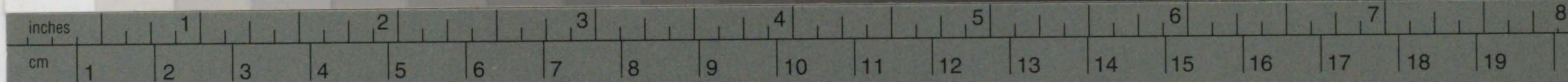


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

